

序

岩手県では旧石器時代をはじめとする一万箇以上の遺跡の所在が知られており、地中には貴重な埋蔵文化財が豊富にのこされています。地域の風土が生み出したこれらの遺産は、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であるとともに、岩手県民のみならず国民的な財産といえます。現代に生きる私たちが、これらの埋蔵文化財を将来にわたって大切に保存し、その活用に力を注ぐべきであることは言うまでもありません。

一方、豊かな地域づくりのためには社会資本の整備・充実が必要不可欠であることもまた事実です。故郷の大地と共にある埋蔵文化財の保護と開発行為との調和は、現代社会に暮らしを営む私たちに与えられた大きな課題といえましょう。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず破壊・消滅の難を受ける遺跡の緊急発掘調査を実施し、調査成果を記録化して保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、一般国道4号渋民バイパス建設事業に伴い実施した盛岡市玉山区芋田沢田IV遺跡および芋田沢田VI遺跡の発掘調査成果を取録したものです。芋田沢田IV遺跡の調査では本遺跡が縄文時代の集落跡であることが判明し、発見例の乏しい早期住居跡を多数検出、さらに中期末葉～後期前葉にかけての配石遺構を伴う集落の検出など、当地域における該期の様相を明らかにする貴重な情報を記録することができました。また、芋田沢田VI遺跡では中世とみられる堀跡が検出され、城館等の一部であることが判明するなどの成果が得られました。

本書が学術研究や教育活動などに広く活用されることにより、埋蔵文化財への理解と関心が一層深められ、ひいては埋蔵文化財保護思想の涵養に資するものとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成25年2月

公益財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 池田克典

例 言

- 1 本書は岩手県盛岡市玉山区に所在する芋田沢田Ⅳ遺跡および芋田沢田Ⅵ遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 収録遺跡の発掘調査は、一般国道4号渋民バイパス建設事業に伴い、岩手県教育委員会の調整を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが、記録保存を目的として実施したものである。
- 3 岩手県遺跡台帳における各遺跡の登録番号／調査略号は以下のとおりである。
【芋田沢田Ⅳ遺跡】 KE47-2243 / TSDD-09・10・11 (平成21～23年度)。
【芋田沢田Ⅵ遺跡】 KE47-2207 / TSDF-10 (平成22年度)。
- 4 各遺跡の野外調査実施期間／調査面積／担当者ならびに室内整理期間／担当者は以下のとおり。
【芋田沢田Ⅳ遺跡】
〔野外調査〕平成21年4月9日～同12月4日 / 1,250㎡ / 村上拓・濱田宏・北村忠昭・佐藤あゆみ。
平成22年5月6日～同8月31日 / 1,280㎡ / 村上拓・北村忠昭。平成23年6月1日～同9月2日 / 1,100㎡ / 村上拓・丸山浩治。
〔室内整理〕平成21年11月1日～平成22年3月31日 / 村上拓・佐藤あゆみ。平成22年9月1日～平成23年3月31日 / 村上拓・北村忠昭。平成23年11月1日～平成24年3月30日 / 村上拓。
【芋田沢田Ⅵ遺跡】
〔野外調査〕平成22年4月8日～同4月30日 / 553㎡ / 北村忠昭・村上拓。
〔室内整理〕平成22年12月16日～平成23年1月14日 / 北村忠昭。
- 5 本文の執筆分担は次のとおりである。国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所…Ⅰ。村上…Ⅱの2、Ⅲ、Ⅳ(北村担当分除く)。北村…Ⅳの3(Ⅰ)・Ⅳの4(Ⅱ)・Ⅴ。丸山…Ⅱの1・3。
- 6 本書中の平面座標値には、平面直角座標第X系(世界測地系)を用いた。
- 7 基準点測量は平成21年4月に実施し、これを元に設定した区画割付を調査終了まで継続して使用した。平成23年3月11日発生の東北地方太平洋沖地震に伴う座標補正は行っていない。
- 8 基準点測量業務は株式会社岩手開発測量設計に委託した。
- 9 石器図化業務の一部(主に剥片石器の実測図作成)は株式会社アルカに委託した。
- 10 各種試料の分析・鑑定等は下記の機関に委託した。
【芋田沢田Ⅳ遺跡】 花崗岩研究会(石質鑑定)、株式会社加速器分析研究所(放射性炭素年代測定)、バリノ・サーヴェイ株式会社(土壌分析・火山灰分析・炭化材樹種同定)、黒曜石産地同定(明治大学)。
【芋田沢田Ⅵ遺跡】 花崗岩研究会(石質鑑定)、バリノ・サーヴェイ株式会社(火山灰分析)。
- 11 野外調査では下記の機関・個人の協力を得た。(敬称略・五十音順)
岩手県教育委員会生涯学習文化課、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、盛岡市遺跡の学び館、盛岡市教育委員会。安齋正人、石井寛、井上雅孝、熊谷常正、小林達雄、酒井宗孝、土井宣夫、中村良幸、名久井文明、三浦謙一。
- 12 出土遺物および諸記録類の一切は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

〔第一分冊〕

序
例言

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の立地と環境	1
1	遺跡の位置と地形的環境	1
2	芋田沢田IV遺跡の基本層序	5
3	周辺の遺跡	5
III	芋田沢田IV遺跡の調査・整理の方法	9
1	野外調査	9
2	室内整理	13
IV	芋田沢田IV遺跡の調査	15
1	概 要	15
2	遺 構	36
(1)	竪穴住居跡	36
(2)	方形柱穴列	194
(3)	土 坑	215
(4)	炉跡・焼土遺構	271
(5)	土器埋設遺構	289
(6)	溝 跡	301
(7)	その他の遺構	309
3	遺 物	310
(1)	縄文時代早期～前期の土器	310
(2)	縄文時代中期末～後期前葉を中心とする土器	320
(3)	土 製 品	400
(4)	石器・石製品	405
4	総 括	448
(1)	縄文時代早期～前期の住居跡	448
(2)	縄文時代早期の土器について	452
(3)	縄文時代後期初頭～前葉の遺構について	457

芋田沢田Ⅳ遺跡 第4～12表

V 芋田沢田Ⅵ遺跡の調査	117
附編 自然科学分析	131
写真図版	181
報告書抄録	419

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧	7	第3表 RF炉跡（焼土）一覧	272
第2表 遺構一覧表	18	第4～12表（→第二分冊）	

図 版 目 次

第1図 遺跡位置図	2	第22図 個別検出柱穴配置図（9）	35
第2図 周辺地形図	3	第23図 RA01-03共通断面（兼基本土層）	86
第3図 地形分類図	4	第24図 RA01・02	87
第4図 周辺の遺跡	6	第25図 RA03	88
第5図 事業用地・遺跡範囲・調査区 （便宜的区割名）	10	第26図 RA04	89
第6図 グリッド図示凡例	10	第27図 RA05	90
第7図 グリッド配置と基準点	11	第28図 RA07	91
第8図 遺構配置全体図	16	第29図 RA07伊断面・RA06	92
第9図 遺構配置分割図（1）〔分割図配列〕	22	第30図 RA08	93
第10図 遺構配置分割図（2）	23	第31図 RA09	94
第11図 遺構配置分割図（3）	24	第32図 RA10	95
第12図 遺構配置分割図（4）	25	第33図 RA11（1）	96
第13図 遺構配置分割図（5）	26	第34図 RA11（2）	97
第14図 個別検出柱穴配置図（1）〔分割図配列〕	27	第35図 RA12全体図	98
第15図 個別検出柱穴配置図（2）	28	第36図 RA12断面	99
第16図 個別検出柱穴配置図（3）	29	第37図 RA12分割図（西半）	100
第17図 個別検出柱穴配置図（4）	30	第38図 RA12分割図（東半）	101
第18図 個別検出柱穴配置図（5）	31	第39図 RA12柱穴断面	102
第19図 個別検出柱穴配置図（6）	32	第40図 RA12 ^Ⅱ	103
第20図 個別検出柱穴配置図（7）	33	第41図 RA12遺物等出土状況図	104
第21図 個別検出柱穴配置図（8）	34	第42図 RA13全体図	105
		第43図 RA13断面①	106

第44图	RA13断面②③⑤	107	第84图	RA45	147
第45图	RA13分割平面图(北半)	108	第85图	RA46·47	148
第46图	RA13分割平面图(南半)	109	第86图	RA46·47断面	149
第47图	RA13構成確別断面	110	第87图	RA48·RA49平面	150
第48图	RA13構成確別名称	111	第88图	RA49断面·RA50	151
第49图	RA14	112	第89图	RA51	152
第50图	RA14·15共通断面、RA14炉断面	113	第90图	RA52	153
第51图	RA15	114	第91图	RA53	154
第52图	RA15炉·柱穴断面	115	第92图	RA54·57平面	155
第53图	RA16	116	第93图	RA54·57断面	156
第54图	RA17	117	第94图	RA55平面	157
第55图	RA18	118	第95图	RA55断面	158
第56图	RA19	119	第96图	RA56·59	159
第57图	RA20	120	第97图	RA58平面	160
第58图	RA20·21断面	121	第98图	RA58断面	161
第59图	RA21·22	122	第99图	RA60平面	162
第60图	RA23~25平面	123	第100图	RA60断面	163
第61图	RA23~25断面	124	第101图	RA61	164
第62图	RA26	125	第102图	RA62	165
第63图	RA27·28平面	126	第103图	RA63	166
第64图	RA27·28断面	127	第104图	RA64·65平面	167
第65图	RA29	128	第105图	RA64·65断面	168
第66图	RA30	129	第106图	RA66	169
第67图	RA31	130	第107图	RA67	170
第68图	RA32	131	第108图	RA68	171
第69图	RA33	132	第109图	RA69·RD77	172
第70图	RA34	133	第110图	RA70	173
第71图	RA35	134	第111图	RA71	174
第72图	RA36平面	135	第112图	RA72	175
第73图	RA36断面	136	第113图	RA73	176
第74图	RA37	137	第114图	RA74	177
第75图	RA38	138	第115图	RA75	178
第76图	RA39	139	第116图	RA76平面	179
第77图	RA40平面	140	第117图	RA76根出部·柱穴·炉断面	180
第78图	RA40断面	141	第118图	RA77平面	181
第79图	RA41平面	142	第119图	RA77柱穴·炉断面	182
第80图	RA41断面	143	第120图	RA78	183
第81图	RA42平面	144	第121图	RA79	184
第82图	RA42断面	145	第122图	RA80	185
第83图	RA43·44	146	第123图	RA81	186

第124回	RA82	187	第164回	RD52 · 68 · 72 · 73	267
第125回	RA83	188	第165回	RD74 ~ 76	268
第126回	RA84	189	第166回	RD78 · 79	269
第127回	RA85	190	第167回	RD80	270
第128回	RA86	191	第168回	RA76 ^甲 · RF01	273
第129回	RA87	192	第169回	RF02 · 03 · 09	274
第130回	RA88	193	第170回	RF04 · 05	275
第131回	RB01平面 (礫 · 黄色土 · 烧土分布)	201	第171回	RF06 ~ 08	276
第132回	RB01平面 (掘方完掘)	202	第172回	RF10 · 11	277
第133回	RB01断面	203	第173回	RF12 ~ 15	278
第134回	RB02	204	第174回	RF17 · 18	279
第135回	RB02断面 (1)	205	第175回	RF16 · 19 ~ 21	280
第136回	RB02断面 (2)	206	第176回	RF22 ~ 25	281
第137回	RB03平面	207	第177回	RF26 ~ 28 · 30	282
第138回	RB03断面	208	第178回	RF29 · 31 ~ 33	283
第139回	RB04	209	第179回	RF34 · 35	284
第140回	RB04断面	210	第180回	RF36 ~ 38	285
第141回	RB05	211	第181回	RF39 ~ 42	286
第142回	RB06	212	第182回	RF43 ~ 45	287
第143回	RB07	213	第183回	RF46 · 47	288
第144回	RB08	214	第184回	RZ01 ~ 03	296
第145回	RD01 ~ 05	248	第185回	RZ04 ~ 06	297
第146回	RD06 · 08	249	第186回	RZ07 · 08	298
第147回	RD07 · 09 ~ 11	250	第187回	RZ09 · 10	299
第148回	RD12 · 13 · 15	251	第188回	RZ11 · 13	300
第149回	RD14 · 16 · 17	252	第189回	RG溝跡全体图 (RG01 ~ 08)	304
第150回	RD18 ~ 20 · 22	253	第190回	RG01 ~ 03平面	305
第151回	RD21 · 23	254	第191回	RG02 ~ 04 · 07断面	306
第152回	RD24 ~ 26	255	第192回	RG04 · 07 · 08平面	307
第153回	RD27 · 28	256	第193回	RG04 (断面) · 05 · 06	308
第154回	RD29 ~ 31 · 33	257	第194回	遺構内出土土器 (1)	322
第155回	RD32 · 34 ~ 36 · 38	258	第195回	遺構内出土土器 (2)	323
第156回	RD37 · 39 · 41	259	第196回	遺構内出土土器 (3)	324
第157回	RD40 · 42 ~ 46	260	第197回	遺構内出土土器 (4)	325
第158回	RD47 ~ 49 · 54	261	第198回	遺構内出土土器 (5)	326
第159回	RD50 · 51 · 53	262	第199回	遺構内出土土器 (6)	327
第160回	RD55 ~ 58	263	第200回	遺構内出土土器 (7)	328
第161回	RD59 ~ 62	264	第201回	遺構内出土土器 (8)	329
第162回	RD63 ~ 65 · 69 · 70	265	第202回	遺構内出土土器 (9)	330
第163回	RD66 · 67 · 71	266	第203回	遺構内出土土器 (10)	331

第204回	遺構内出土土器 (11)……………	332	第244回	遺構外出土土器 (11) [早期中心] ……	372
第205回	遺構内出土土器 (12)……………	333	第245回	遺構外出土土器 (12) [早期中心] ……	373
第206回	遺構内出土土器 (13)……………	334	第246回	遺構外出土土器 (13) [早期中心] ……	374
第207回	遺構内出土土器 (14)……………	335	第247回	遺構外出土土器 (14) [早期中心] ……	375
第208回	遺構内出土土器 (15)……………	336	第248回	遺構外出土土器 (15) [早期中心] ……	376
第209回	遺構内出土土器 (16)……………	337	第249回	遺構外出土土器 (16) [早期中心] ……	377
第210回	遺構内出土土器 (17)……………	338	第250回	遺構外出土土器 (17) [早期中心] ……	378
第211回	遺構内出土土器 (18)……………	339	第251回	遺構外出土土器 (18) [早期中心] ……	379
第212回	遺構内出土土器 (19)……………	340	第252回	遺構外出土土器 (19) [早期中心] ……	380
第213回	遺構内出土土器 (20)……………	341	第253回	遺構外出土土器 (20) [早期中心] ……	381
第214回	遺構内出土土器 (21)……………	342	第254回	遺構外出土土器 (21) [早期中心] ……	382
第215回	遺構内出土土器 (22)……………	343	第255回	遺構外出土土器 (22) [早期中心] ……	383
第216回	遺構内出土土器 (23)……………	344	第256回	遺構外出土土器 (23) [早期中心] ……	384
第217回	遺構内出土土器 (24)……………	345	第257回	遺構外出土土器 (24) [早期中心] ……	385
第218回	遺構内出土土器 (25)……………	346	第258回	遺構外出土土器 (25) [早期中心] ……	386
第219回	遺構内出土土器 (26)……………	347	第259回	遺構外出土土器 (1) [後期中心] ……	387
第220回	遺構内出土土器 (27)……………	348	第260回	遺構外出土土器 (2) [後期中心] ……	388
第221回	遺構内出土土器 (28)……………	349	第261回	遺構外出土土器 (3) [後期中心] ……	389
第222回	遺構内出土土器 (29)……………	350	第262回	遺構外出土土器 (4) [後期中心] ……	390
第223回	遺構内出土土器 (30)……………	351	第263回	遺構外出土土器 (5) [後期中心] ……	391
第224回	遺構内出土土器 (31)……………	352	第264回	遺構外出土土器 (6) [後期中心] ……	392
第225回	遺構内出土土器 (32)……………	353	第265回	遺構外出土土器 (7) [後期中心] ……	393
第226回	遺構内出土土器 (33)……………	354	第266回	遺構外出土土器 (8) [後期中心] ……	394
第227回	遺構内出土土器 (34)……………	355	第267回	遺構外出土土器 (9) [後期中心] ……	395
第228回	遺構内出土土器 (35)……………	356	第268回	遺構外出土土器 (10) [後期中心] ……	396
第229回	遺構内出土土器 (36)……………	357	第269回	遺構外出土土器 (11) [後期中心] ……	397
第230回	遺構内出土土器 (37)……………	358	第270回	遺構外出土土器 (12) [後期中心] ……	498
第231回	遺構内出土土器 (38)……………	359	第271回	小形土器・ミニチュア土器 ……	399
第232回	遺構内出土土器 (39)……………	360	第272回	土製品 (1)……………	402
第233回	遺構内出土土器 (40)……………	361	第273回	土製品 (2)……………	403
第234回	遺構外出土土器 (1) [早期中心] ……	362	第274回	土製品 (3)……………	404
第235回	遺構外出土土器 (2) [早期中心] ……	363	第275回	石器・石製品類 (1)……………	409
第236回	遺構外出土土器 (3) [早期中心] ……	364	第276回	石器・石製品類 (2)……………	410
第237回	遺構外出土土器 (4) [早期中心] ……	365	第277回	石器・石製品類 (3)……………	411
第238回	遺構外出土土器 (5) [早期中心] ……	366	第278回	石器・石製品類 (4)……………	412
第239回	遺構外出土土器 (6) [早期中心] ……	367	第279回	石器・石製品類 (5)……………	413
第240回	遺構外出土土器 (7) [早期中心] ……	368	第280回	石器・石製品類 (6)……………	414
第241回	遺構外出土土器 (8) [早期中心] ……	369	第281回	石器・石製品類 (7)……………	415
第242回	遺構外出土土器 (9) [早期中心] ……	370	第282回	石器・石製品類 (8)……………	416
第243回	遺構外出土土器 (10) [早期中心] ……	371	第283回	石器・石製品類 (9)……………	417

第284図	石器・石製品類 (10).....	418	第302図	石器・石製品類 (28).....	436
第285図	石器・石製品類 (11).....	419	第303図	石器・石製品類 (29).....	437
第286図	石器・石製品類 (12).....	420	第304図	石器・石製品類 (30).....	438
第287図	石器・石製品類 (13).....	421	第305図	石器・石製品類 (31).....	439
第288図	石器・石製品類 (14).....	422	第306図	石器・石製品類 (32).....	440
第289図	石器・石製品類 (15).....	423	第307図	石器・石製品類 (33).....	441
第290図	石器・石製品類 (16).....	424	第308図	石器・石製品類 (34).....	442
第291図	石器・石製品類 (17).....	425	第309図	石器・石製品類 (35).....	443
第292図	石器・石製品類 (18).....	426	第310図	石器・石製品類 (36).....	444
第293図	石器・石製品類 (19).....	427	第311図	石器・石製品類 (37).....	445
第294図	石器・石製品類 (20).....	428	第312図	石器・石製品類 (38).....	446
第295図	石器・石製品類 (21).....	429	第313図	石器・石製品類 (39).....	447
第296図	石器・石製品類 (22).....	430	第314図	住居形態分類・Va層土堆積状況分類図.....	449
第297図	石器・石製品類 (23).....	431	第315図	II群～IV群土器.....	454
第298図	石器・石製品類 (24).....	432	第316図	IV群～V群土器.....	455
第299図	石器・石製品類 (25).....	433	第317図	VI群～XI群土器.....	456
第300図	石器・石製品類 (26).....	434	第318図	配石を伴う柄鏡形遺構の比較.....	461
第301図	石器・石製品類 (27).....	435	第319図	中期末葉～後期前葉の遺構分布.....	462

I 調査に至る経緯

「芋田沢IV遺跡」および「芋田沢VI遺跡」は、一般国道4号渋民バイパス改築工事の施工に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道4号は、東京都中央区日本橋を起点に青森県青森市に至る、東北地方の大動脈の一端を担う主要幹線道路である。渋民バイパスは、盛岡市玉山区渋民と同区馬場の間、約5.6kmの区間で計画されている。現国道はほぼ区を中心を南北に縦断しており、全幅員8～12mと狭く両側に歩道がない状態となっている。近年の自動車交通の増大や車輛の大型化など増加する交通需要に対応するため、通過交通の分離による交通の円滑化、交通安全の確保および沿道環境の改善を図ることを目的に、昭和61年度に事業着手、平成8年度に工事着手し、平成16年度に一部供用し、事業を進めている。

「芋田沢IV遺跡」については、岩手県教育委員会による分布調査で確認され、平成20年度の試掘調査の結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所が協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。これにより、平成21～23年の各年度において、岩手河川国道事務所長と財団法人岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、発掘調査に着手した。

「芋田沢VI遺跡」については、平成21年度の試掘調査を実施、その結果に基づき岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所が協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。平成22年度、岩手河川国道事務所長と財団法人岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置と地形的環境 (第1～3図・巻頭写真1・写真図版1)

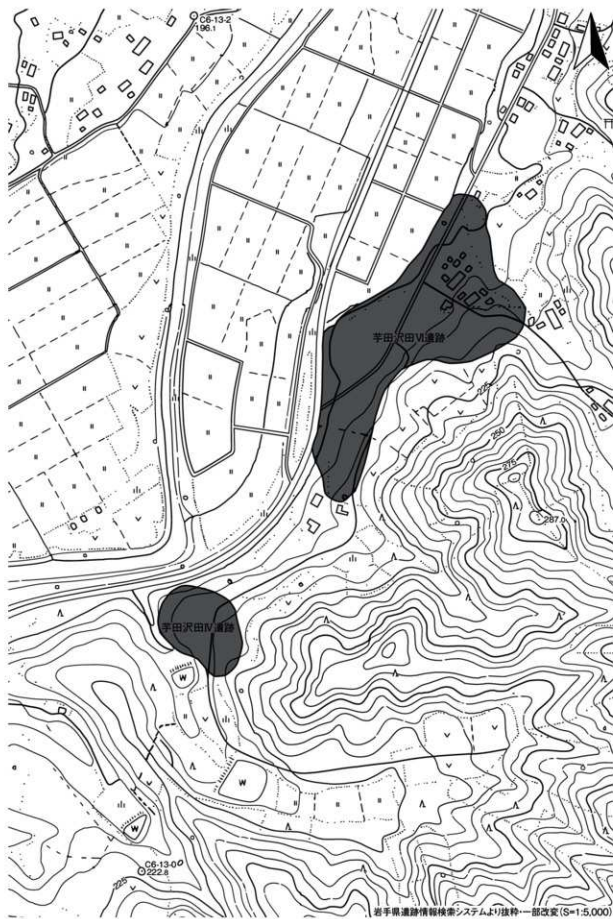
芋田沢IV遺跡および同VI遺跡は、IGRいわて銀河鉄道好摩駅の東方約1.0kmに位置する。両遺跡とも国土地理院発行の5万分の1地形図「沼宮内」および2万5千分の1地形図「渋民」の図幅中に含まれ、緯度・経度上の位置は、前者が北緯39度52分21秒、東経141度11分04秒付近、後者が北緯39度52分32秒、東経141度11分12秒付近である。

遺跡の所在する盛岡市玉山区西部は、北上川に沿ってひらけた北上盆地の北端に位置する。北には北上川・馬淵川の水源地である奥中山高原があり、西には奥羽山脈、東には北上高地が連なる。北上川の水源地は岩手郡岩手町御堂付近にあり、玉山区周辺は上流域に区分される。当該域は比較的河岸段丘の発達が良いとされるが、それが顕著なのは北上川西岸であり、東岸は北上高地から続く標高200m以下の小起伏山地が河川開削まで迫っている。

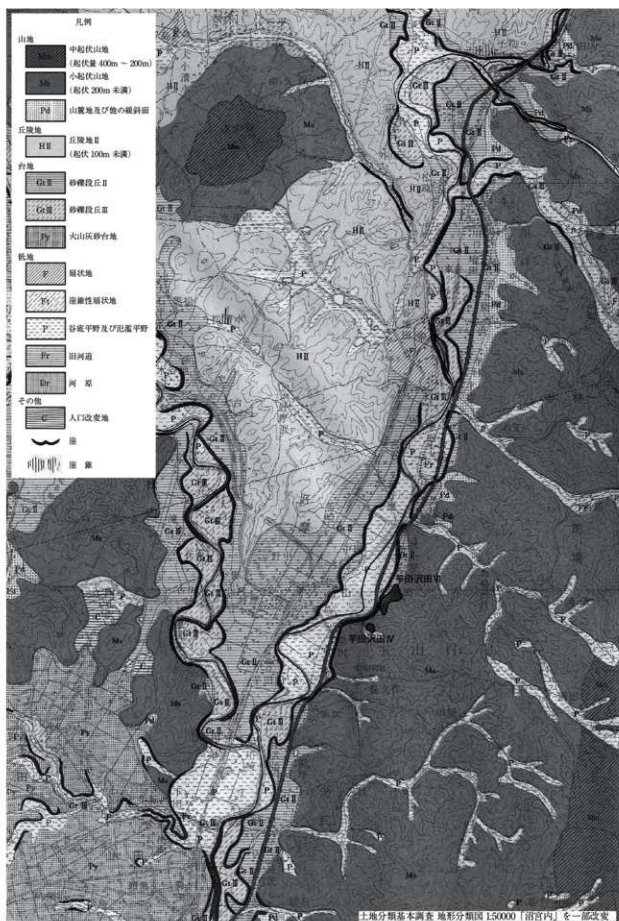
芋田沢IV遺跡は、北上川東岸約130mの小起伏山地西端部平坦面に立地している。標高は214m前後である。遺跡の北西側は段丘崖で、下位面との比高は約10mほどである。基本的に北西側以外はこの小起伏山地が続くが、南東側から西流する沢が遺跡の載る平坦面の南縁を画している。

芋田沢VI遺跡は、同IV遺跡の北東方約300m、一段下の狭小な砂礫段丘上に立地する。北上川からの距離は約240mである。この段丘は中位段丘で(岩手県企画開発室1976)、水野(1960)の好摩段丘相当と考えられる。

(丸山)



第2図 周辺地形図



第3図 地形分類図

2 芋田沢田IV遺跡の基本層序 (第23図・巻頭写真2)

芋田沢田IV遺跡における基本層序は、調査区を南北に縦断する西縁断面に模式的に観察できる。

I層は現表土。下面に刈屋スコリア(岩手火山起源、1686年降下)の層状の堆積が認められる。

II層は均質な黒色土で、下面には塊状の十和田a降下火山灰が分布する。

III層は橙色を呈する生出スコリア(岩手火山起源、約3200年前)の混入が顕著な黒色土層。

IV層は黒褐色土中に火山灰様の暗褐色斑がもや状に広がる土層。III層との層界は漸移的である。

Va層は混入物がほぼ認められない均質で緻密な黒色土層。

Vb層はVI層との漸移層で暗褐色～褐色を呈する。VI層に含まれる柳沢軽石の細片を微量含む。

VI層は柳沢軽石(秋田駒ヶ岳起源、約12000年前)を多く含む黄褐色土層。本層以下、地山。

基本層序と検出遺構との関係性を見てみよう。平安時代(9世紀後半～10世紀初頭)住居跡は壁がIII層上面まで立ち上がり、埋土中に十和田a降下火山灰が堆積(流入)、それより上位をII層相当土が埋めている。縄文時代中期末葉及び後期初頭～前葉の遺構ではIV～Va層土が埋土の主体であり、埋没に時間を要する大形の遺構では最上部にIII層土が入る例が多く認められた。前期前葉とみられる住居跡はほぼ完全にVa層の流入により埋まっている。早期(中葉が主体)の住居群には、埋土上部にVa層土、下部にVb層土が堆積するものと、Vb層相当土とVI層再堆積土によって埋没しているもの二者が認められた。

このように、遺跡内の層序と各時期の遺構群との層位的な関係性は極めて総合的である。鍵層となり得る複数の降下火山堆積物の存在や、そのことによりそれぞれ個性的な性状を呈する各層が一定の層厚を保ちながら整然と重層していたこと、調査区内全体が大きな削平等を経験しないまま良好に保存されていたことなど、層位的観点から検討を加えるのに極めて有利な遺跡であったと言える。

なお、本書に併せて報告している芋田沢田VI遺跡の基本層序については、V章の1「概要」(第二分冊)を参照されたい。

(村上)

3 周辺の遺跡 (第4図・第1表)

平成22年度までに岩手県遺跡台帳に登録された遺跡のうち、報告遺跡近隣の縄文時代早期、同中～後期、古代、中世の遺跡を抽出し、第4図および第1表に掲載した。以下、各時代の遺跡に関する概要を記す(カッコ内数字は第4図・第1表の遺跡番号)。

縄文時代早期

玉山区内で当該期資料の出土が報告されている遺跡として、日戸⁽¹⁾、芦名沢I(3)、芦名沢II(4)、昼久保III(5)、芦名沢V(6)の各遺跡が挙げられる。これらの遺跡からは貝殻文系土器が出土している。ただし、遺構はいずれも未検出であり、本報告遺跡である芋田沢田IVが玉山区内における初例となる。

一方、田盛岡市内は岩手県内でも早期遺跡の検出数が多いことで知られる(既知遺跡数は30超)。近年複数回にわたって調査された薬師社脇遺跡では、早期(中葉主体)の竪穴住居が28棟検出された。住居形態は方形を基調とし、大きさは4m以下という。関東地方に分布する田戸下層式類似土器が多量に出土したことも特徴の一つで、当該期の一大集落として注目される遺跡である。

なお、当該期の遺跡立地を見ると、北上川西岸・栗石川北岸の火山灰砂台地(滝沢台地)上に大き



第4図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代	出土遺物等	備考
1	宇田川遺跡	集落跡	縄文・平安・近世	縄文土器(卑～晩期)、石鏡、土師器	田辺川川尻を改称
2	宇田川遺跡	集落跡	縄文・平安・中世	縄文土器(卑～晩期)、石鏡、土師器、陶器ほか	宇田川川尻を改称
3	声石遺跡	集落跡	縄文・平安	縄文土器(卑～晩期)	
4	声石遺跡	集落跡	縄文	縄文土器(卑～晩期)	
5	沢尻遺跡	集落跡	縄文・平安	縄文土器(卑～晩期)、土師器	
6	沢尻V遺跡	集落跡	縄文・弥生	縄文土器(卑～晩期)、板瓦式土器	
7	八雲遺跡	集落跡	縄文	縄文土器(卑～晩期)、石鏡	
8	八雲遺跡	集落跡	縄文・奈良	縄文土器(卑～晩期)、土師器	日ノ瀬跡と兼宗
9	子孫子遺跡	集落跡	縄文・弥生・平安	縄文土器(卑～晩期)、土師器、弥生土器	
10	樋上遺跡	集落跡	縄文・近世	縄文土器(晩期)、弥生土器	
11	樋上遺跡	集落跡	縄文	縄文土器(晩期)、弥生土器	
12	石臼遺跡	集落跡	縄文・奈良・古代	縄文土器(中～晩期)、土師器、弥生土器	
13	馬場遺跡	集落跡	縄文	縄文土器(中期末)	
14	沢尻V遺跡	集落跡	縄文	縄文土器(卑～晩期)、石鏡、陶器	
15	宇田川遺跡	集落跡	縄文・平安	縄文土器(卑～晩期)、須恵器、土師器	宇田川を改称
16	宇田川遺跡	集落跡	縄文・平安	縄文土器(中～晩期)、土師器	宇田川を改称、宇田川を改称
17	宇田川遺跡	集落跡	縄文・弥生	縄文土器(晩期)、弥生土器	宇田川を改称
18	沢尻V遺跡	集落跡	縄文	縄文土器(中～晩期)、土鏡	
19	綱網	集落跡	縄文・古代	縄文土器(晩期)、石鏡	
20	綱網	集落跡	縄文	縄文土器(晩期)	
21	沢尻Vの沢尻A	集落跡	縄文	縄文土器(中～晩期)、土師器	
22	沢尻Vの沢尻B	集落跡	縄文	縄文土器(中～晩期)、土師器	
23	沢尻Vの沢尻C	集落跡	縄文	縄文土器(晩期)	
24	山田川遺跡	集落跡	縄文	縄文土器(中～晩期)、石鏡、土鏡	
25	山田川遺跡	集落跡	縄文	縄文土器(晩期)	
26	山田川遺跡	集落跡	縄文	縄文土器(晩期)	
27	水本川上遺跡	集落跡	平安	土器、土師器、須恵器、瓦葺土器	日ノ瀬川を改称
28	水本川上遺跡	集落跡	奈良・平安	土器、土師器、須恵器	
29	水本川上遺跡	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器	
30	土鏡	集落跡	縄文・平安	土器、土師器、須恵器	
31	いたく石	集落跡	奈良・平安	土器、土師器、須恵器	
32	壺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	縄文土器、土師器	
33	壺跡	集落跡	奈良	土師器	
34	手鏡音叉遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	縄文土器、土師器、須恵器、弥生土器	
35	壺跡本宮	集落跡	縄文・平安	縄文土器、土師器	本宮と本宮前を統合
36	壺跡本宮	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器	
37	壺跡本宮	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器	
38	小豆上遺跡	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器	
39	沢尻V遺跡	集落跡	縄文・古代	縄文土器、石鏡、土師器	
40	宇田川遺跡	集落跡	縄文	縄文土器、土師器	
41	宇田川遺跡	集落跡	縄文・平安	縄文土器(前期)、土師器	
42	宇田川遺跡	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器	
43	宇田川遺跡	集落跡	縄文	縄文土器、土師器	日ノ瀬川を改称
44	宇田川遺跡	集落跡	縄文・平安	縄文土器、土師器	宇田川を改称
45	宇田川遺跡	集落跡	奈良・平安	弥生土器、土師器	宇田川を改称
46	宇田川遺跡	集落跡	奈良	土師器	宇田川を改称
47	武田川遺跡	集落跡	縄文・平安	縄文土器、土師器	
48	武田川遺跡	集落跡	縄文・平安	縄文土器	
49	川原川遺跡	集落跡	縄文・奈良・古代	縄文土器、弥生土器、土師器	
50	古谷沢遺跡	集落跡	縄文・古代	縄文土器(晩期)、土師器	川原川を改称
51	樋上遺跡	集落跡	平安	土師器	
52	壺跡	集落跡	縄文・古代	土師器	
53	小長瀬遺跡	集落跡	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器	
54	長瀬遺跡	集落跡	縄文・平安	縄文土器、土師器	
55	壺跡本宮A	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器	
56	壺跡本宮	集落跡	平安	土師器	
57	壺跡本宮	集落跡	奈良・平安	土師器	
58	壺跡本宮上	集落跡	奈良・平安	土師器	
59	壺跡本宮下	集落跡	平安	土師器	
60	小豆上遺跡	集落跡	奈良・平安	土師器	
61	小豆上遺跡	集落跡	奈良・平安	土師器	
62	古川遺跡	集落跡	奈良・平安	土師器	
63	土鏡	集落跡	古代	土師器	
64	山田川遺跡	集落跡	古代	土師器	
65	壺跡本宮	集落跡	古代	土師器	
66	壺跡本宮	集落跡	古代	土師器	
67	沢尻Vの平瀬跡	城跡跡	中世	土師器	
68	平瀬跡	城跡跡	中世	土師器	
69	山田川遺跡	城跡跡	中世	土師器	
70	壺跡本宮跡(土平瀬)	城跡跡	中世	土師器	壺跡土遺跡内に所在
71	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器、土鏡	
72	大瀬跡	城跡跡	中世	陶器、土師器	
73	大瀬跡	城跡跡	中世	土師器、須恵器	矢城を改称
74	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器	壺跡本宮を改称
75	宇田川遺跡	城跡跡	中世	土師器	
76	宇田川遺跡	城跡跡	中世	土師器、土鏡	
77	宇田川遺跡(土平瀬)	城跡跡	中世	土師器、土鏡、石鏡、土鏡、平埴	
78	宇田川遺跡(土平瀬)	城跡跡	中世	土師器、土鏡、石鏡、土鏡、平埴	
79	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器	
80	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器	壺跡本宮を改称
81	壺跡本宮跡	城跡跡	縄文・中世	縄文土器、土師器、平埴	壺跡本宮を改称、壺跡本宮跡を改称
82	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器	
83	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器、土鏡	壺跡本宮を改称
84	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器	
85	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器、平埴、土鏡	
86	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器	
87	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器	
88	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器	
89	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器	
90	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器	
91	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器	
92	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器	
93	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	土師器	
94	壺跡本宮跡(一本杉)	城跡跡	中世	土師器、平埴、土鏡	壺跡本宮跡(壺跡本宮跡)と兼宗
95	壺跡本宮跡	城跡跡	中世	縄文土器、土師器	

3 周辺の遺跡

な集中域（大新町、大館町、大館堤、小屋塚、館坂、安倍館、前九年Ⅰ、宿田、茨島の各遺跡）があり、奥羽山脈東麓にあたる中・小起伏山地縁辺に散見（下猿田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、山中の各遺跡）される以外は、北上高地から続く山地の西縁部（小起伏山地縁辺）にあることがわかる。

縄文時代中～後期

図中には24遺跡が載る。昼久保Ⅴ、才津沢（9）、鶴飼（19）、日戸Ⅱ⁽²⁾、の各遺跡では当該期の竪穴住居が検出されているが、集落の様相を推定できるほどの資料はない。立地に関しては、報告遺跡周辺では北上川東岸の砂礫段丘基部から小起伏山地縁辺に多く、より東方・高位の山地内部にも小河川流域を中心に立地が確認されている。北上川西岸でも砂礫段丘～丘陵地上で確認されているが、中～後期以外の縄文全般を見てその立地割合は東岸よりかなり低い。

古 代

図中には49遺跡が載る。芋田Ⅱ遺跡では37棟の竪穴住居が見つかり、墨土器や耳皿なども出土している。当該期の一大集落であることとともに、官衙との関連性が窺われる遺物の存在が注目される遺跡である。芦名沢Ⅰ遺跡では鍛冶炉や鉄関連遺物が見つかり、当該域における生産活動の一端が垣間見られる。当該期の立地は縄文時代と同様に北上川東岸の砂礫段丘基部から小起伏山地縁辺に多いが、山地内部での検出数は少ない。一方で、北上川西岸の砂礫段丘上での検出数は縄文時代に比して増加し、松川流域でも確認されるようになり、主要河川流域に集中する傾向が看取される。

中 世

図中には30遺跡が載る。芋田沢田Ⅵ遺跡以外の29遺跡はすべて城館跡で登録されている。記録もしくは伝承の残る遺跡として、下田館跡（76）、玉山館跡（91）、日戸館跡（94）などがあり、いずれも川村氏一族の居館とされる。立地は北上川兩岸の氾濫平野～砂礫段丘上に集中し、北上川・松川合流地点は密度が濃い。古代以前に比べ、より路沿近くに位置するようになる。その一方で、山地内部も選地対象となり相当数が立地している。主要河川近接地、山地内部ともに他期の遺構・遺物が確認されない場合が多く、立地の特異性がそのまま遺跡の性格を示しているともいえる。

（丸山）

註

- (1) 日戸遺跡は岩手県遺跡台帳に未登録の状態であり、古屋敷遺跡がこれにあたりと推定されている。
- (2) 盛岡市教育委員会調査。岩手県遺跡台帳には未登録。

参考文献

①岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは②岩手文壇と略記

- 草間俊一1956「岩手県日戸遺跡調査報告」『岩手大学文学部研究年報』第10巻 岩手大学文学部学会
草間俊一1959「岩手県日戸遺跡調査報告（第2報）」『岩手大学文学部研究年報』第14巻 岩手大学文学部学会
②岩手文壇1998「才津沢遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第278集
③岩手文壇1999「芦名沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第295集
④岩手文壇2005「芋田Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第457集
⑤岩手文壇2000「芦名沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第322集
盛岡市遺跡の学び館2007「盛岡市遺跡の学び館 平成17年度 館報」
盛岡市教育委員会2008「業師社協遺跡」
盛岡市教育委員会2008「昼久保Ⅴ遺跡」

Ⅲ 芋田沢田Ⅳ遺跡の調査・整理の方法

1 野外調査

(1) 調査区(第5図)

登録されている芋田沢田Ⅳ遺跡の範囲は、南北約90m・東西約130m、面積にして約9,500㎡である。今回の調査区は遺跡範囲の北西部に位置する。岩手県教育委員会が実施した試掘調査の結果から本発掘調査を要すると判断された、幅約45m・全長約85mの範囲である。調査着手前は山林及び牧草地であった。

(2) グリッド設定と基準点(第5～7図)

検出される各種遺構・遺物の詳細な座標値を記録するため、調査区を覆う碁盤目状のグリッドを設定した。まず、調査対象区域の北西側に原点(世界測地系、平面直角座標第X系、X=-14,000・Y=30,000)を設け、ここから南及び東にのびる軸線を等分して100×100mの大グリッドを設定した。さらに大グリッドの一辺を25等分して小グリッド(4×4m)とした。

大グリッドは南北軸にローマ数字(北からI～)、東西軸に英大文字(西からA～)を用い「IA」のように表し、さらに小グリッドも同様に北側から順に算用数字1～25、西側から順に英小文字a～yとして「1a」または「2b」のように表した。特定の小グリッドを指し示すには、これらを組み合わせて「IA1a」のように表記した。現地では各小グリッドの北西隅に名称を標記した杭を打設した。

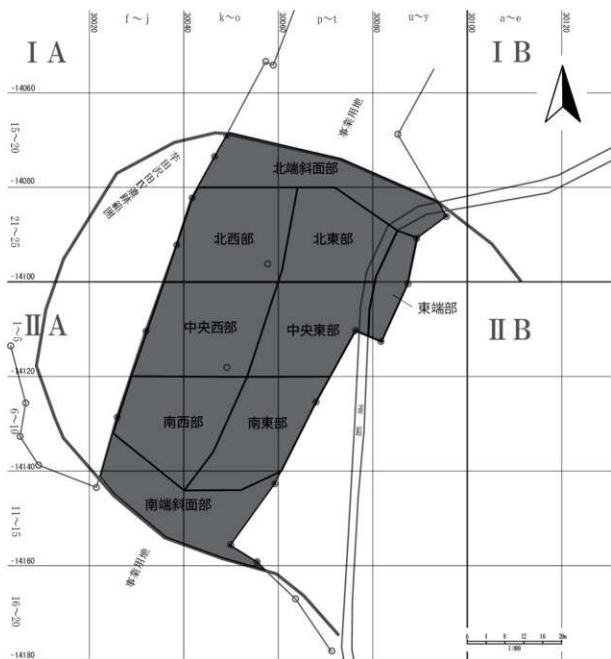
また4m四方の小グリッドをさらに4等分した2mメッシュも用いた。NW(北西)・NE(北東)・SE(南東)・SW(南西)のように分割し、小グリッド名の末尾に付して、「IA1a-NE」のように表した。この標記は本書中でも用いており、とくに平面図中に多用している。小グリッド杭は北西隅に当たるので、必ず「NW」が付記されている。平面図中に用いる場合は、小グリッド杭を示す「NW」は「⊕」(交点四角のトンボ)で、それ以外の2mメッシュの北西隅を示す場合は「+」(通常の十時トンボ)で表し、区別した。

上記のグリッドを実際に調査区に割り付けるため、現地には基準杭及び区画割付杭を打設した。基準点測量業務は㈱岩手開発測量設計に委託した。基準杭及び区画割付杭の第X系座標値・標高値、及び対応するグリッド杭名は第7図中に示した表の通りである。

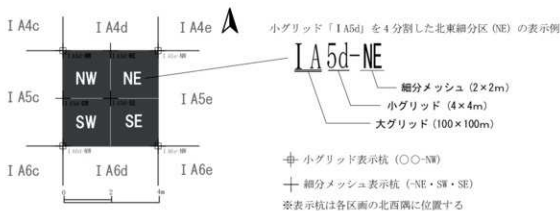
(3) 試掘・表土除去

調査ではまず対象区域に任意に試掘トレンチを設定し、重機・人力を併用して土層の堆積状況と遺構の存否を把握した。試掘により遺構・遺物が存在しないことを確認した範囲はこれをもって調査終了とし、一方、遺物包含層および遺構が確認された場合は、その上面を面的に広げるように土層を除去した。この際、バックホー・キャリアダンプ等の重機を積極的に用いたが、検出面までの土層が薄い場合や遺物が集中的に出土する場合など、重機の使用が適当でないと判断した区域では人力による掘削を行った。

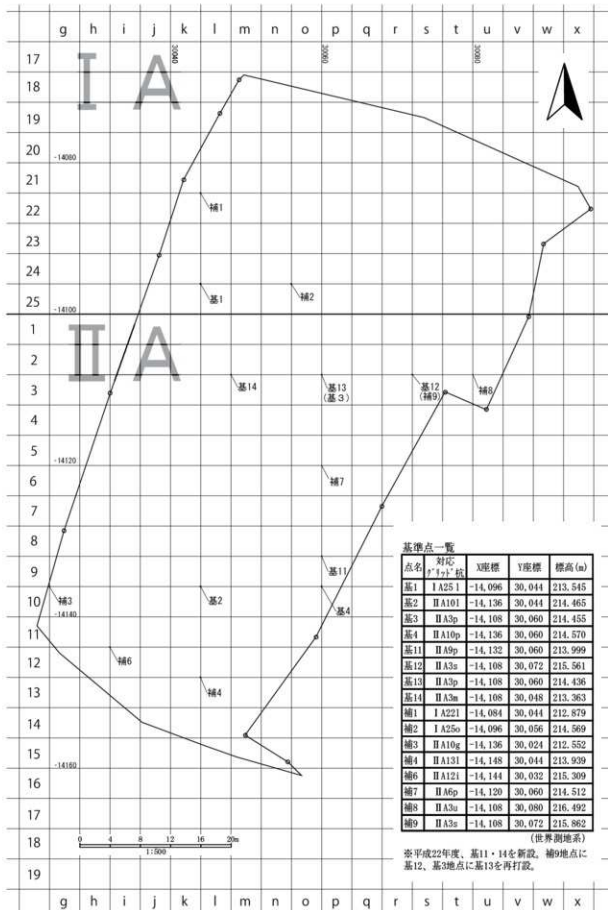
1 野外調査



第5図 事業用地・遺跡範囲・調査区（便宜的区割名）



第6図 グリッド図示凡例



第7図 グリッド配置と基準点

(4) 遺構の検出と精査

表土除去の後、鋤簾（じょれん）・両刃草削り・移植ベラを用いて遺構検出を行い、必要に応じてスプレー塗料による白線で遺構プランにマーキングを施した。

精査では遺構の規模や性質に応じて2分法・4分法を使い分け、土層断面を観察しながら埋土を除去した。検出時に遺構の重複が認められた場合、なるべく平面観察で先後関係を把握するように努め、原則として新期のものから順に埋土の掘削を行った。この場合、両者を縦断する断面を設定し土層の堆積状況からも併せて先後関係を検討した。また、平面プランの確定や埋土の解釈が困難な場合には、積極的にサブトレンチを活用してこれらの確認に努めた。これにより完掘段階には平面プランの一部がサブトレンチで壊された状態になったものも含まれる。遺物は、遺構名やグリッド名および出土層位を記録して取上げ、必要に応じて出土状況図の作成・写真撮影を行った。

(5) 遺 構 名

① 野外調査での仮名称

検出した遺構に対してはその都度固有の仮名称を与えた。住居跡にS I、土坑にSK、溝跡にSD等、Sで始まる略号を用いている。柱穴状ピットについては、単独検出のものには「PP」を冠した連番を付し、堅穴住居等に帰属すると判断したものは「S I ○○Pit○」とした。このほか、精査の初段階で遺構種別が判然としない場合などは、「○○グリッド付近暗褐色土落ち込み」のように特徴を端的に示した語を付して、遺物の取り上げや諸記録に用いた。以上の仮名称は、室内整理段階でも作業用遺構名としてそのまま用いた。

② 本書中の掲載名称

盛岡市内の遺跡を調査した場合、各遺構には盛岡市教育委員会作成の「R」で始まる略号を付して報告書に収録するよう定められている（堅穴住居跡は「RA」、土坑は「RD」等）。野外調査において「S」で始まる一般的な略号を用いたのは、遺構同士の統合や登録抹消により改名の必要が生じた場合、同種の略号同士で番号のみを入れ替えれば無用の混乱が生じることが懸念されたからであった。結果、遺構名は全体的に変更が生じているので、新旧遺構名の対応関係については第2表を参照されたい。

また、整理の進行に伴い、個別検出の柱穴状ピット（PPを冠したもの）の中から住居跡等に帰属する可能性が高いと判断されるものが複数生じた。このため、当初から帰属先がある「Pit」と、あとから帰属先が判明した「PP」の一部を統合し、新たに「PPA」を冠した連番号を与えた。それ以外の「PP」については、番号はそのままで「PPB」を冠し、前者と区別した。これらについては図中では「PPB」の略号を省略し、番号のみ示している。

(6) 実 測

遺構の平面実測は、主に御CUBICの遺構実測支援システムを使用し、デジタルデータとして記録した。この他、遺物出土状況等の微細図は、小グリッドを再細分した1m方眼を基準に実測・作図する「簡易造り方測量」で行った。縮尺は1/20を基本とし、必要に応じて1/10図を作成した。

断面図は水平に設定した水糸を基準にして実測・作図した。縮尺は1/20を基本とし、細部表現を要

する場合には1/10図も作成した。

(7) 土層断面の分層と注記

遺構やトレンチなどの土層断面は慎重に観察し堆積状況を把握するよう努めた。分層は堆積過程を表現するのに必要と思われた場合は細部にも配慮したが、薄層が連続的に互層をなす部分や、偶然の結果と思われる混入物の偏りなどは徒らに細分せず、有意と思われるまとまりの境界を表現した。

この分層の根拠を示すため、各層の性状を記録した。土層は主体土と混入土(物)によって構成されるものと考え、色調・土性・混入物・粘性・締まりの程度等を記載した。また、解釈可能な場合は、その層の持つ性格を想定し付記した。

遺構埋土等の堆積層の「主体土」には、認識可能な場合、その層が堆積した時点で周辺の表土を形成していたと思われる土(埋没開始時点における最新期の土)を充てた。例えば地山土のブロックが大半を占める遺構の壁の崩落層であっても、当時の表土と思われる黒色土が含まれている場合は、後者を主体土とし、「地山土が大量に混入している状態」と解釈している。主体土と基本土層の対比から、その層の堆積時期を推定することが可能だと考えたからである。

土色の表記は新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議事務局)に準じたが、調査員が受ける層間の印象の差が土色名の違いに反映されない場合も多くあった。このため、各層の記録には調査員個人の主観による相対的な層全体の印象(明暗や色味の差)も併記した。例えば、「○層よりも明るい」・「焼土含み全体に赤味」・「炭化物多く黒味強」・「地山土含み黄味がかかる」などの表現がこれにあたる。また混入物の量について「極微」・「やや多」等の表記を行っているが、調査員の主観的基準を土色帖に示されているパーセント表記に置き換えれば、概ね、極微(1~2%)・微(3~5%)・少(5~10%)・やや多(15~20%)・多(30~50%)・大量(50%以上)となろうか。

なお、複数の調査員が併行して記録に当たったため、図中に示した土層注記の記述形式には不統一な部分が生じている。堆積状況に係る本文記載と併せてご覧いただくことで、意図するところをお祈り頂ければ幸いである。

(8) 写真撮影

野外調査では6×7cm判カメラ(モノクロ)、デジタル一眼レフを用い、各種遺構の全景・土層断面・遺物出土状況等を撮影した。撮影に際しては、撮影状況を記したカードをその都度写し込み、これを元に整理した。なお、一部の遺構ではいずれかのカットを省略した場合がある。また、カメラの故障などで必要なカットを撮影できなかったものも含まれる。平成21年度には小型飛行機による空中写真の撮影を行った。

2 室内整理

(1) 作業手順

出土遺物の洗浄と地点別の仕分け作業、土器を除く各遺物の分類は、野外調査と並行して現地で行った。野外調査終了の後、室内において土器の接合・復元作業を開始し、随時掲載資料の選別・登録を行った。その後、実測図作成・拓影作成・トレースの順に作業を進めた。調査員はこれらの作業を統

括し、並行して図面合成・遺物観察表作成・原稿執筆を行った。

(2) 遺 構

デジタルデータ、手描き図面ともに必要な整理を行ったのち、Adobe社Illustrator CS4を用いてトレース・編集を行った。図中には縮尺を示すスケールを付し、方位マークで座標北を示した。写真はデジタル一眼レフで撮影したRAWデータをJPEGに変換し、パソコン上でレイアウトして図版を作成した。

(3) 遺 物

出土土器は縄文時代早期中葉～前期初頭と中期末葉～後期初頭の、二つの時期を中心とするまとまりに大別できた。そこで、前者には詳細な形態分類を、後者には遺構との関連性を主眼とする整理方針を定めた。これに基づき、出土地点・遺構別に分けた後に掲載に適した個体を選抜し、図化等作業の対象資料として登録した。石器類は器種ごとに仕分け、いわゆる定形石器は全点を登録し個別番号を与えた。各器種は形態を元にさらに細分し、各類を代表する個体を選抜し図化した。なお、剥片石器の図化業務は㈱アルカに委託した。これらの遺物については、掲載番号・出土地点・層位・計測値・その他観察事項等を記載した一覧表を作成した。実測図から読みとれる属性については、本文・表ともに記載を省略したものがある。各図版には掲載縮尺を示すスケールを付している。写真はデジタル一眼レフで撮影した個別のJPEGデータをパソコン上でレイアウトし、図版を作成した。

なお、本書に併せて報告している「芋田沢田VI遺跡」の調査・整理の方法等については、V章の1「概要」(第二分冊)を参照されたい。

IV 芋田沢田IV遺跡の調査

1 概 要

(1) 平成21年度調査

縄文時代早期及び中期末葉～後期前葉の竪穴住居32棟、配石遺構2基、土坑32基、土器埋設遺構8基、炉跡32基、柱穴620個、平安時代住居1棟、近世の溝状遺構3条を検出、縄文土器（早期・中期末葉～後期前葉が主体）50箱、石器10箱、平安時代の土師器・須恵器数片などが出土した。

縄文時代早期の住居は調査区南部に集中して検出されたが、調査未了の北半部に分布が広がる可能性が高いと思われた。楕円形で底面中央にピット状に掘り込まれた炉をもつものと、不整形で炉を持たないものなどが存在することが判明し、出土する土器には貝殻文のほか、押型文・沈線文・表裏縄文等が含まれることから、時期幅を持つことが予想された。

中期末葉の住居は調査区西縁部に並列して分布し、このうち南西端部では他より図抜けて規模の大きい住居が検出された。直径約11mの円形（角の丸い多角形）で、柱穴は直径、深さともに1m前後、西側の壁に接して全長3.3mの複式炉をもつもので、柱穴・周溝の重複状況から改築・拡張を疑うことがわかった。床面直上からは炭化材が多く出土。廃絶段階に焼失・倒壊したものであることが判明した。

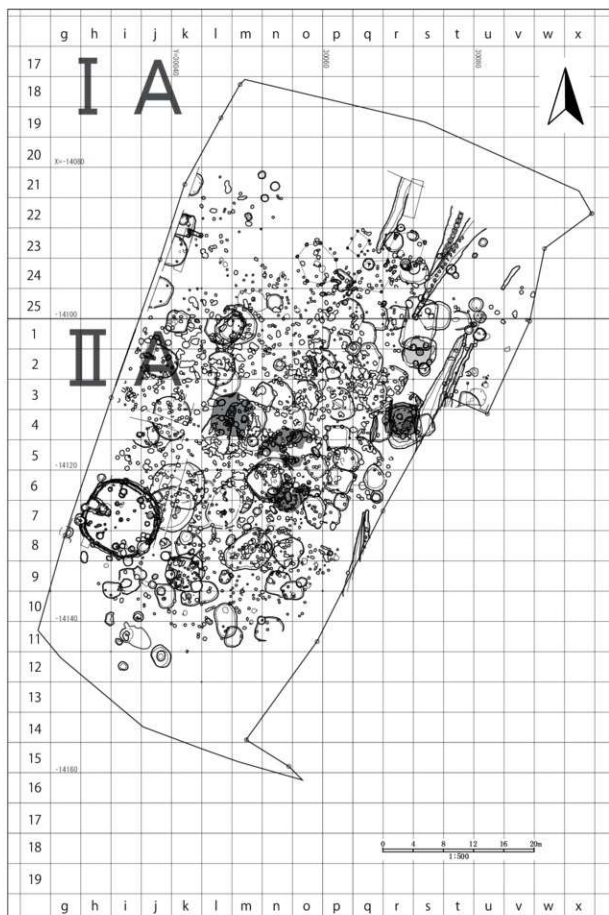
さらに調査区中央部からは、後期初頭～前葉に位置づけられる環状配石を伴う遺構が検出された。直径約9mの円環をなす配石の南縁に、方形基調の張り出し部を持ち、いわゆる柄鏡形住居に類似した形態を持つものであった。下部構造について次年度に追加調査を行うこととした。また本遺構に近接して、外周に長方形に礎を配した6本柱遺構も検出された。

(2) 平成22年度調査

縄文時代早期～前期初頭・中期末葉～後期前葉の竪穴住居31棟、住居状遺構18棟、炉跡26基、陥し穴状遺構3基、土坑66基、柱穴330個、立石1基、土器埋設遺構4基、遺物包含層600㎡等が検出された（これらの一部の精査は次年度に持ち越しとなった）。出土遺物は縄文土器大コンテナ11箱（早期中葉・後期初頭～前葉が中心）、石器大コンテナ13箱、土製品数点等。

後期遺構面では、前年度に検出した環状配石を伴う遺構の下部を追加調査し、南側張り出し部の中心から楕円形墓壇を検出、石礎の副葬が確認された。また環状配石の南北軸北端の礎の下位から、埋設された小形鉢形土器が出土した。土器の内部と掘方には小礫・砂が充填されていた。いずれも遺構本体との関係が濃厚であると思われた。また、環状配石を伴う遺構と同時期と目される、黄褐色土の敷き均しを伴う4本柱遺構が弧状に並ぶ様子が確認された。前年度来検出されていた黄褐色土の集中地点や他の4本柱遺構を加えると、概ね環状に分布する状況が認められた。同様の環状分布傾向は、フラスコ状土坑（墓壇に転用の可能性あり）にも認められた。

早期の遺構面では、楕円形と略方形の住居跡が密に重複した状態で検出された。出土土器から早期中葉が中心とみられたが、個別の時期について詳細は不明であった。このうち楕円形の住居の一部では、壁の外周（或いは壁上端付近）に碗形（楕円形）の柱穴、床面壁際にも小ピットが巡る2重の柱穴配置が確認された。断面観察から壁柱は住居中心に向け内傾していた可能性が高いと思われた。



第8図 遺構配置全体図

(3) 平成23年度調査

縄文時代住居跡40棟〔早期36、中期末～後期前4（方形柱穴列1含む）〕、炉跡5基、土坑5基、土器埋設遺構2基、柱穴600個等を検出した。出土遺物は縄文時代土器大コンテナ6（早期中葉～前期前葉、中期末葉～後期前葉）、縄文時代石器大コンテナ3（石鏃・敲磨器類・石皿ほか）、円盤状土製品3点等。今次調査区域は、過年度の成果から縄文時代早期の住居跡が密に分布することが予想されており、結果、多数の住居跡が魚鱗状に重複した状態で検出された。出土遺物は縄文時代早期中葉の土器を主体とし、これに前後する遺物も若干量認められたことから、住居跡の大半は縄文時代早期中葉～前期初頭に帰属するものと思われた。ただし遺構の時期特定に有効な出土状況を示す遺物は少なく、加えて遺構埋土の識別が極めて困難なために新旧関係の把握が十分でないことから、個々の住居の詳細な帰属時期については後の検討が必要であった。住居跡は以下の3形態に分類できる。①平面形は円～楕円形。壁直下または壁面に内傾する柱穴をもつ。まれに床面中央付近に炬をもつ。②方形～隅丸方形。柱穴配置は不明確。まれに中央または壁際に焼土の生成が認められる。③平面形は不明だが、柱穴状ピットが直線あるいはL字状に連なるもの。埋土は黒色土主体で、①・②を切る。

以上のほか、調査区北部の尾根頂部から縄文時代中期末葉住居跡、後期初頭～前葉住居跡、同方形柱穴列、同土器埋設遺構等が確認された。過年度調査において検出された該期遺構群に伴うものと思われた。

(4) 本遺跡調査の遺構・遺物の総数

平成21～23年度にわたって実施した発掘調査における検出遺構および出土遺物の総数量は次の通りである。内訳の詳細は書中の記載を参照されたい。

〔縄文時代〕

〈遺構〉 住居跡・住居状遺構	88棟
方形柱穴列	8棟
土坑	77基
陥し穴状遺構	3基
炉跡・焼土	47基
土器埋設遺構	12基
立石遺構	1基
〈遺物〉 縄文土器	67箱（620.9kg）〈大コンテナ40×30×30cm、以下同〉
土製品	345点（うち308点は円盤状土製品）
石器・石製品類	26箱

〔平安時代〕

〈遺構〉 住居跡	1棟
〈遺物〉 土師器・須恵器	数点

〔近世〕

〈遺構〉 溝跡（道路状遺構か）	8条
〈遺物〉	なし

1 概要

第2表 遺構一覧表

調査年度	遺構略号 (野採調査)	掲載遺構名	種別	地点	時期	備考	図	写真
2009	SD001	RA01	竪穴住居跡	I A25a	平安(9-10C)			23巻 3巻
2009	SD002	RA02	竪穴住居跡	I A23a	中期木葉			23巻 5
2009	SD003	RA03	竪穴住居跡	I A23a	中期木葉			23巻 6
2009	SD004	RA04	竪穴住居跡	I A25	中期木葉			26 7
2009	SD005	RA05	竪穴住居跡	II A01a	中期木葉			27 8
2009	SD006	RA06	竪穴住居跡	I A25a	後期初頭～前期	壁残存し2a+(黄褐色土層間)		29 9
2009	SD008	RA06-0 ^a	砂礫・焼土					
2009	SD007	RA07	竪穴住居跡	II A01	後期初頭～前期	黄褐色土敷き均し		23巻 10
2009	SD007	RA07-0 ^a a	砂礫・焼土					
2009	SD009	RA07-0 ^a b	砂礫・焼土					
2009	SD008	RA08	竪穴住居跡	II A02	後期初頭～前期	黄褐色土敷き均し		30 11
2009	SD008	RA08-0 ^a a	砂礫・焼土					
2009	SD008	RA08-0 ^a b	砂礫・焼土					
2009	SD010	RA09	竪穴住居跡	II A02	中期木葉	襦式跡		31 12
2009	SD011	RA10	竪穴住居跡	II A04a	後期初頭～前期			32 13
2009	SD010	RA10-0 ^a	砂礫・焼土					
2009	SD012	RA11	竪穴住居跡	II A04a	後期初頭～前期	黄褐色土敷き均し		33巻 14
2009	SD022	RA11-0 ^a	砂礫・焼土					
2009	SD013	RA12	竪穴住居跡	II A05	中期木葉	大形の住居 襦式跡		35巻 15巻
2009	SD014	RA13	住居跡遺構	II A05a	後期初頭～前期	配石・敷土を伴う		42巻 19巻
2009	SD101	RA13-張出部	住居跡遺構		後期初頭～前期			
2009	SD015A	RA14	竪穴住居跡	II A09a	後期初頭～前期			49巻 21巻
2009	SD000	RA14-0 ^a a	砂礫・焼土					
2009	SD001	RA14-0 ^a b	砂礫・焼土	II A09a				
2009	SD002	RA14-0 ^a c	砂礫・焼土	II A09a				
2009	SD013B	RA15	竪穴住居跡	II A09a	中期木葉			51巻 23
2009	SD016	RA16	竪穴住居跡	II A01a	早期木葉～前期初頭			53 24
2009	SD018	RA17	竪穴住居跡	II A02a	早期木葉			54 25
2009	SD019	RA18	竪穴住居跡	II A04	中期木葉			55 26
2009	SD020	RA19	竪穴住居跡	II A10	早期木葉			56 27
2009	SD021	RA20	竪穴住居跡	II A07a	早期木葉			57巻 28
2009	SD022	RA21	竪穴住居跡	II A11a	早期木葉			58巻 29
2009	SD024	RA22	竪穴住居跡	II A12a	早期木葉			59 30
2009	SD025	RA23	竪穴住居跡	II A10	早期木葉			60巻 31
2009	SD027	RA24	竪穴住居跡	II A10a	早期木葉			60巻 32
2009	SD028	RA25	竪穴住居跡	II A10	早期木葉			60巻 33
2009	SD029	RA26	竪穴住居跡	II A10a	早期木葉			62 34
2009	SD030	RA27	竪穴住居跡	II A08	早期木葉			63巻 35
2009	SD031	RA28	竪穴住居跡	II A10	早期木葉			63巻 36
2009	SD032	RA29	竪穴住居跡	II A11a	～早期木葉			65 37
2009	SD033	RA30	竪穴住居跡	II A08a	早期木葉～前期初頭			66 38
2009	SD034	RA31	竪穴住居跡	II A09a	早期木葉			67 39
2009	SD035	RA32	竪穴住居跡	II A08a	早期木葉～前期初頭			68 40
2010	SD052	RA33	竪穴住居跡	I A25a	後期初頭～前期			69 41
2010	SD054	RA34	竪穴住居跡	I A25a	後期初頭～前期			70 42
2010	SD053	RA34-0 ^a	砂礫・焼土	II A01a				
2010	SD055	RA35	竪穴住居跡	II A01a	後期初頭～前期			71 43
2010	SD052	RA35-0 ^a	砂礫・焼土	II A01a				
2010	SD066	RA36	竪穴住居跡	II A01a	前期木葉	大形(長方形)		72巻 44
2010	SD067	RA37	竪穴住居跡	II A04a	早期木葉～前期初頭	方形		74 45
2010	SD068	RA38	竪穴住居跡	II A04a	早期木葉			75 46
2010	SD069	RA39	竪穴住居跡	II A06a	早期木葉～前期初頭	縦長範囲のみ		76 47
2010	SD061	RA40	竪穴住居跡	II A08a	早期木葉			77巻 48
2011	SD062	(東A03)・統合)		II A08a				
2010	SD063	RA41	竪穴住居跡	II A07a	早期木葉	内側壁柱状・手取り美濃		79巻 49
2011	SD064	(東A11)・統合)		II A07a				
2011	SD074	(東A11)・統合)		II A07a				
2010	SD070	RA42	竪穴住居跡	II A06a	早期木葉	手取り美濃		81巻 50
2011	SD071	(東A42)・統合)		II A06a				
2010	SD079	RA43	竪穴住居跡	II A07a	早期木葉			83 51
2011	SD078	(東A43)・統合)		II A07a				
2010	SD080	RA44	竪穴住居跡	II A07a	早期木葉			83 52
2010	SD081	RA45	竪穴住居跡	II A09a	早期木葉	方形		84 53
2010	SD083	RA46	竪穴住居跡	II A07a	早期木葉			85巻 54
2010	SD084	RA47	竪穴住居跡	II A09a	早期木葉			85巻 55
2010	SD087	RA48	竪穴住居跡	II A07a	早期木葉			87 56
2010	SD088	RA49	竪穴住居跡	II A05a	早期木葉	方形?		87巻 57
2010	SD091	RA50	竪穴住居跡	II A06a	早期木葉			88 58
2011	SD102	RA51	竪穴住居跡	I A25a	中期木葉	襦式跡・小形住居		89 59

IV 芋田沢田IV遺跡の調査

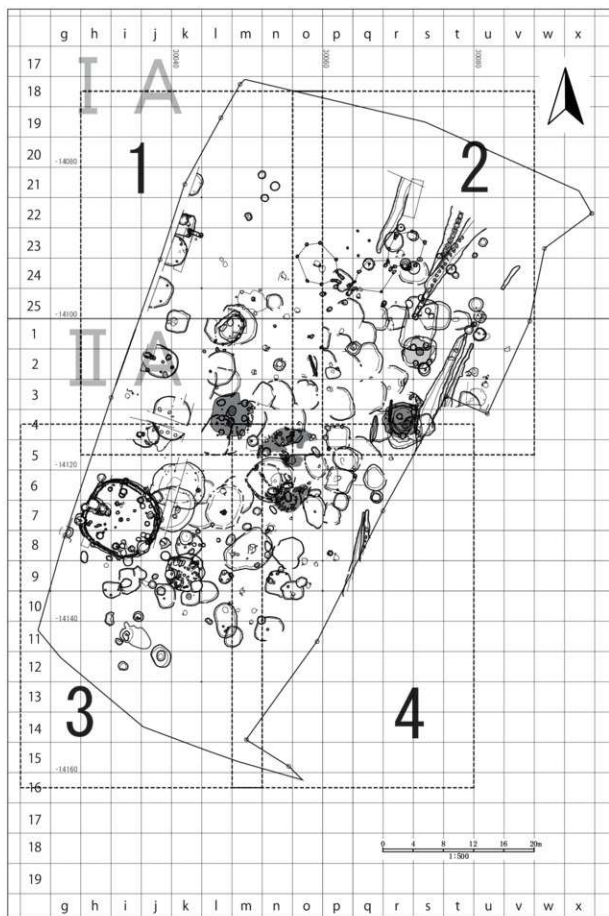
調査年度	遺構略号 (野採調査)	掲載遺構名	種別	地点	時期	備考	図	写真
2011	SI103	RA52	竪穴住居跡	E A04e	早期中葉～前期初葉	方孔、燧石焼土。	90	60
2011	SI104	RA53	竪穴住居跡	E A06m	早期中葉		91	61
2011	SI105	RA54	竪穴住居跡	E A03	早期中葉		92	62
2011	SI106	RA55	竪穴住居跡	E A06e	早期中葉		94	63
2011	SI107	RA56	竪穴住居跡	E A06e	早期中葉		96	64
2011	SI108	RA57	竪穴住居跡	E A08	早期中葉		97	65
2011	SI109	RA58	竪穴住居跡	E A06m	早期中葉		97	66
2011	SI110	RA59	竪穴住居跡	E A04f	早期中葉		96	64
2011	SI111	RA60	竪穴住居跡	E A04e	早期中葉		99	67
2011	SI113	RA61	竪穴住居跡	E A03e	早期中葉	方孔	101	68
2011	SI114	RA62	竪穴住居跡	E A03f	早期中葉		102	69
2011	SI115	RA63	竪穴住居跡	E A03e	早期中葉		103	70
2011	SI116	RA64	竪穴住居跡	E A03m	早期中葉		104	71
2011	SI117	RA65	竪穴住居跡	E A01f	早期中葉		104	71
2011	SI118	RA66	竪穴住居跡	E A02p	早期中葉		106	72
2011	SI119	RA67	竪穴住居跡	E A03e	早期中葉		107	73
2011	SI120	RA68	竪穴住居跡	E A03a	早期中葉		108	74
2011	SI121	RA69	竪穴住居跡	E A02p	早期中葉		109	75
2011	SI122	RA70	竪穴住居跡	E A04e	早期中葉～前期初葉	方孔?	110	76
2011	SI123	RA71	竪穴住居跡	E A03e	早期中葉		111	77
2011	SI124	RA72	竪穴住居跡	E A03a	早期中葉～前期初葉	方孔、燧石焼土。	112	78
2011	SI125	RA73	竪穴住居跡	E A03p	早期中葉～前期初葉	方孔、燧石焼土。	113	79
2011	SI126	RA74	竪穴住居跡	E A05e	早期中葉		114	80
2011	SI127	RA75	竪穴住居跡	E A02q	早期中葉		115	81
2011	SI128	RA76	竪穴住居跡	I A24a	後期初葉	張出部有、出入口?	116	82
2009	SN001	R A76-6 ^a	炉跡・焼土	I A24a				
2009	SN002	R A76-6 ^b	炉跡・焼土	I A24a				
2011	SI129	RA77	竪穴住居跡	I A25a	後期初葉	張出部有、出入口?	118	83
2011	SN101	R A77-6 ^a	炉跡・焼土					
2011	SI130	RA78	竪穴住居跡	E A03e	早期中葉	方孔、燧石焼土。	120	84
2011	SI131	RA79	竪穴住居跡	E A01q	早期中葉		121	85
2011	SI132	RA80	竪穴住居跡	I A25e	早期中葉		122	86
2011	SI133	RA81	竪穴住居跡	E A03q	早期中葉		123	87
2011	SI134	RA82	竪穴住居跡	I A24a	早期中葉		124	88
2011	SI135	RA83	竪穴住居跡	E A01p	早期中葉	方孔、燧石焼土。	125	89
2011	SI136	RA84	竪穴住居跡	E A01p	早期中葉	方孔	128	90
2011	SI137	RA85	竪穴住居跡	E A03e	早期中葉	方孔、燧石焼土。	127	91
2011	SI138	RA86	竪穴住居跡	I A24a	後期初葉～前葉	張出部有、出入口?	128	92
2011	SI139	RA87	竪穴住居跡	中期～後期?		柱穴のみ	129	77
2011	SI140	RA88	竪穴住居跡	E A06	早期中葉	方孔、燧石焼土。	130	93
2009	SN009	FB01	方孔柱穴	E A04m	後期初葉	黄褐色土敷き均し。	131	94
2009	SN009	FB01	方孔柱穴	E A04m				
2009	SN021	FB01-焼土 a	炉跡・焼土	E A04m				
2009	SN022	FB01-焼土 b	炉跡・焼土	E A04f				
2010	SN025	FB02	方孔柱穴	E A04e	後期初葉	黄褐色土敷き均し。	134	94
2010	SN054	FB02-焼土	炉跡・焼土	E A04e				
2010	SN051	FB03	方孔柱穴	E A02e	後期初葉	黄褐色土敷き均し。	137	100
2010	SN053	FB03-焼土	炉跡・焼土	E A02e				
2010	SN053	FB04	方孔柱穴	I A25a	後期初葉	黄褐色土敷き均し。	139	102
2010	SN060	FB05	方孔柱穴	E A07m	後期初葉～前葉	PPB 512・519・702・703	141	101
2011	SI101	FB06	方孔柱穴	I A25p	後期初葉～前葉		142	103
2011	SI141	FB07	方孔柱穴	E A09e	後期初葉～前葉	PPB 466・469・480・481	143	103
2011	SI142	FB08	方孔柱穴	E A08f	後期初葉～前葉	PPB 522・568・570・572	144	104
2009	SK001	FD01	土坑	I A21a	中期末葉～後期		145	104
2009	SK002	FD02	土坑	I A22b	中期末葉～後期		145	104
2009	SK003	FD03	土坑	I A22b	早期中葉～中期末葉		145	104
2009	SK004	FD04	土坑	I A22m	早期中葉～中期末葉		145	105
2009	SK005	FD05	土坑	E A10b	後期以降		145	105
2009	SK006	FD06	土坑	E A11f	中期末葉～後期初葉		146	105
2009	SK007	FD07	土坑	E A10f	後期初葉		147	106
2009	SK008	FD08	土坑	E A12f	早期中葉～中期末葉		146	106
2009	SK009	FD09	土坑	E A12f	早期中葉迄	のちに拡張してSI24	147	107
2009	SK010	FD10	土坑	E A11f	早期中葉～中期末葉		147	107
2009	SK011	FD11	土坑	I A22e	中期末葉～後期		147	107
2009	SK013	FD12	土坑	E A02e	中期末葉～後期		148	107
2009	SK014	FD13	土坑	E A01e	中期末葉～後期		148	108
2009	SK015	FD14	土坑	I A25a	早期		149	108
2009	SK016	FD15	土坑	E A08	後期初葉		148	108
2009	SK017	FD16	土坑	E A08e	後期初葉		149	108
2009	SK018	FD17	土坑	E A07f	後期初葉		149	109
2009	SK019	FD18	土坑	E A08e	早期中葉～中期末葉		150	109

1 概要

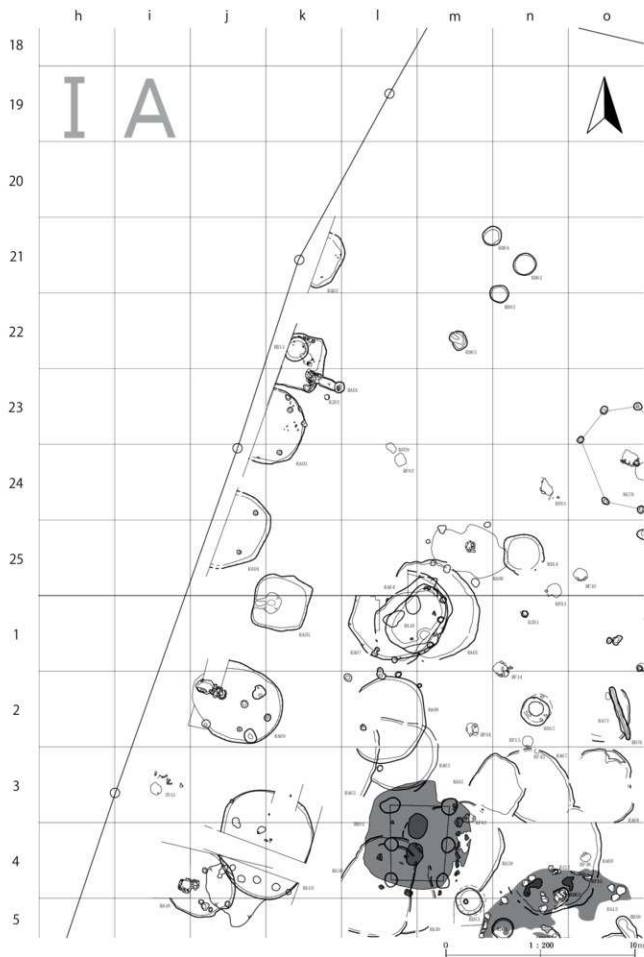
調査年度	遺跡略号 (野保調査)	掲載遺構名	種別	地点	時期	備考	図	写真
2009	SK020	RD19	土坑	B.A06	後期初頭			150/100
2009	SK021	RD20	土坑	B.A10m	後期初頭			150/130
2009	SK022	RD21	土坑	B.A06	後期初頭			151/110
2009	SK023	RD22	土坑	B.A06b	中期末葉～後期初頭			150/110
2009	SK024	RD23	土坑	B.A07a	後期初頭			151/111
2009	SK025	RD24	土坑	B.A08	中期末葉～後期初頭			152/111
2009	SK026	RD25	土坑	B.A06b	早期中葉～前期頃			152/111
2009	SK027	RD26	土坑	B.A09a	早期中葉～前期頃			152/112
2009	SK028	RD27	土坑	B.A08	早期中葉～前期頃			153/112
2009	SK029	RD28	土坑	B.A08	早期中葉～前期頃			153/112
2009	SK030	RD29	土坑	B.A10	早期～前期頃			154/112
2009	SK031	RD30	土坑	B.A09	中期末葉～後期初頭			154/113
2009	SK032	RD31	土坑	B.A10	早期中葉～前期頃			154/113
2009	SK033	RD32	土坑	B.A09	早期中葉			155/113
2009	SK034	RD33	土坑	B.A06b	早期中葉～前期頃			154/113
2009	SK036	RD34	土坑	B.A08	早期中葉～前期頃			155/114
2009	SK037	RD35	土坑	B.A09	早期中葉～前期頃			155/114
2009	SK038	RD36	土坑	B.A06b	早期中葉～前期頃			155/114
2009	SK039	RD37	土坑	B.A08	中期末葉～後期初頭			156/114
2009	SK040	RD38	土坑	B.A06	早期中葉			155/115
2009	SK041	RD39	土坑	B.A06b	早期中葉～前期頃			156/115
2009	SK042	RD40	土坑	B.A06	後期初頭			157/115
2009	SK043	RD41	土坑	B.A08g	中期末葉～後期初頭			156/115
2009	SK045	RD42	土坑	B.A08b	早期中葉～中期末葉			157/116
2010	SK051	RD43	土坑	↑A.23a	中期末葉～後期初頭			157/116
2010	SK052	RD44	土坑	↑A.23a	早期～前期?			157/116
2010	SK053	RD45	土坑	↑A.23a	早期～前期?			157/116
2010	SK054	RD46	土坑	↑A.23a	早期～前期?			157/117
2010	SK055	RD47	土坑	↑A.23a	中期末葉～後期初頭			158/117
2010	SK057	RD48	土坑	↑A.23a	後期初頭			158/117
2010	SK058	RD49	土坑	↑A.23a	後期初頭			158/117
2010	SK060	RD50	土坑	↑A.23g	中期末葉			159/118
2010	SK061	RD51	土坑	B.A06a	後期初頭			159/118
2010	SK063	RD52	土坑	B.A06a	早期～前期?			164/118
2010	SK074	RD53	土坑	B.A05m	後期初頭			159/119
2010	SK081	RD54	土坑	B.A07m	早期中葉～前期頃			158/119
2010	SK083	RD55	土坑	B.A08	早期中葉～前期頃			160/119
2010	SK085	RD56	土坑	B.A07a	中期末葉～後期初頭			160/119
2010	SK086	RD57	土坑	B.A07m	早期中葉～前期頃			160/120
2010	SK087	RD58	土坑	B.A06a	早期中葉～前期頃			160/120
2010	SK096	RD59	土坑	B.A05a	早期中葉～前期頃			161/120
2010	SK100	RD60	土坑	B.A07a	早期中葉～前期頃			161/120
2010	SK101	RD61	土坑	B.A05a	早期中葉～後期前葉頃			161/121
2010	SK107	RD62	土坑	B.A06a	後期初頭			161/121
2010	SK110	RD63	土坑	B.A05b	中期末葉～後期初頭			162/121
2010	SK112	RD64	土坑	B.A01a	早期中葉～後期中葉			162/121
2010	SK113	RD65	土坑	B.A01a	後期初頭			162/122
2010	SK114	RD66	土坑	↑A.25a	後期初頭			163/122
2010	SK115	RD67	土坑	↑A.25a	後期初頭			163/122
2010	SK118	RD68	土坑	B.A06a	後期初頭			164/123
2010	SK119	RD69	土坑	B.A06a	後期初頭			162/123
2010	SK121	RD70	土坑	B.A06a	早期中葉～前期頃			162/123
2010	SK125	RD71	土坑	B.A06g	早期～前期			163/123
2010	SK201a	RD72	土坑	↑A.23r	中期末葉～後期初頭			164/142
2010	SK120	(RD72・73に統合)						
2010	SK201b	RD73	土坑	↑A.23r	中期末葉～後期初頭			164/142
2011	SK303	RD74	土坑	B.A02g	後期初頭?			165/124
2011	SK307	RD75	土坑		後期初頭			165/124
2011	SK306	RD76	炉穴?	B.A02g	早期中葉～前期頃?			165/124
2011	SK308	RD77	炉穴?	B.A02g	早期中葉～前期頃?			169/124
2010	SK070	RD78	陥穴	B.A03a	後期初頭～中葉			166/125
2010	SK108	RD79	陥穴	B.A04g	後期初頭～中葉			166/125
2010	SK109	RD80	陥穴	B.A04a	後期初頭～中葉			167/125
2009	SN003	RF01	炉跡・焼土	↑A.23a	後期初頭?			168/126
2009	SN004	RF02	炉跡・焼土	↑A.23a	後期初頭?			169/126
2009	SN005	RF03	炉跡・焼土	↑A.25a	後期初頭?			169/127
2009	SN006	RF04	炉跡・焼土	B.A02m	後期初頭			170/127
2009	SN011	RF05	炉跡・焼土	B.A03	不明			170/127

IV 芋田沢田IV遺跡の調査

調査年度	遺構略号 (野採調査)	掲載遺構名	種別	地点	時期	備考	図	写真
2009	SN013	FF06	砂埴・焼土	B A06	後期初葉		171	127
2009	SN014	FF07	砂埴・焼土	B A10a	不明		171	128
2009	SN015	FF08	砂埴・焼土	B A08	不明		171	128
2009	SN016	FF09	砂埴・焼土	I A20	不明		169	128(b)
2009	SN017	FF10	砂埴・焼土	I A25a	後期初葉?		178	138
2009	SN022	FF11	砂埴・焼土	B A00	後期初葉		172	129
2009	SN023	FF12	砂埴・焼土	B A08	不明		173	129
2009	SN024	FF13	砂埴・焼土	B A06b	不明		173	129
2009	SN025	FF14	砂埴・焼土	B A01a	後期初葉		173	129
2009	SN036	FF15	砂埴・焼土	B A02a	不明		173	130
2009	SN027	FF16	砂埴・焼土	B A02b	後期初葉?		173	130
2010	SN028	FF17	砂埴・焼土	B A02c	後期初葉		174	130
2009	SN029	FF18	砂埴・焼土	B A02a	不明		174	130
2009	SN033	FF19	砂埴・焼土	B A10	後期初葉		175	131
2009	SN034	FF20	砂埴・焼土	B A10a	後期初葉		175	131
2009	SN035	FF21	砂埴・焼土	B A10a	後期初葉		175	131
2009	SN036	FF22	砂埴・焼土	B A10a	後期初葉?		176	131
2009	SN037	FF23	砂埴・焼土	B A09a	後期初葉?		176	132
2009	SN038	FF24	砂埴・焼土	B A09a	後期初葉?		176	132
2009	SN039	FF25	砂埴・焼土	B A10a	後期初葉?		176	132
2009	SN041	FF26	砂埴・焼土	B A10	不明		177	132
2009	SN042	FF27	砂埴・焼土	B A10a	不明		177	133
2009	SN043	FF28	砂埴・焼土	B A08	後期初葉?		177	133
2009	SN044	FF29	砂埴・焼土	B A09a	不明		178	133
2009	SN045	FF30	砂埴・焼土	B A09a	後期初葉?		177	133
2009	SN046	FF31	砂埴・焼土	B A09b	後期初葉?		177	134
2010	SN055	FF32	砂埴・焼土	B A05c	後期初葉?		178	134
2010	SN059	FF33	砂埴・焼土	I A25a	前期初葉?		178	134
2010	SN060	FF34	砂埴・焼土	I A25c	後期初葉?		179	134
2010	SN062	FF35	砂埴・焼土	B A02p	不明		179	135
2010	SN063	FF36	砂埴・焼土	B A02p	不明		180	135
2010	SN064	FF37	砂埴・焼土	B A02c	後期初葉?		180	135
2010	SN066	FF38	砂埴・焼土	B A04a	後期初葉?		180	135
2010	SN067	FF39	砂埴・焼土	B A01p	不明		181	136
2010	SN068	FF40	砂埴・焼土	B A06p	後期初葉?		181	136
2010	SN069	FF41	砂埴・焼土	B A07a	後期初葉?		181	136
2010	SN070	FF42	砂埴・焼土	B A02a	後期初葉?		181	136
2010	SN071	FF43	砂埴・焼土	B A02a	後期初葉?		182	137
2010	SN072	FF44	砂埴・焼土	B A07a	不明		182	137
2010	SN073	FF45	砂埴・焼土	B A04a	後期初葉?		182	137
2010	SN074	FF46	砂埴・焼土	B A05p	不明		183	137
	SN075	FF47	砂埴・焼土	B A05q	不明		183	
2009	SD001	RG01	溝跡	I A23a-25a	近世		189(b)	144(b)
2009	SD002	RG02	溝跡	I A23a-24a	近世		189(b)	144(b)
2009	SD003	RG03	溝跡	I A21a-22a	近世		189(b)	145
2010	SD004	RG04	溝跡	B A11-4a	近世		189(b)	146
2009	SD005	RG05	溝跡	B A7q-9a	近世		189(b)	147
2009	SD006	RG06	溝跡	B A7q-8a	近世		189(b)	147
2010	SD001	RG07	溝跡	B A11-3a	近世		189(b)	146
2010	SD002	RG08	溝跡	I A24a-25a	近世		189(b)	
2009	SX001	RZ01	礎石土層	B A01a	後期初葉		184	138
2009	SX002	RZ02	礎石土層	I A23a	中期末葉		184	138
2009	SX003	RZ03	礎石土層	B A01	後期初葉		184	139
2009	SX004	RZ04	礎石土層	B A06	後期初葉		185	139(b)
2009	SX005	RZ05	礎石土層	B A06	後期初葉		185	139(b)
2009	SX006	RZ06	礎石土層	B A06	後期初葉		185	139(b)
2009	SX007	RZ07	礎石土層	B A07a	後期初葉		186	140
2009	SX008	RZ08	礎石土層	B A09p	後期初葉		186	141
2010	SX002	RZ09	礎石土層	I A25c	後期初葉		187	141
2011	SX001 (SK36)	RZ10	礎石土層	I A24c	後期初葉-前葉		187	141(b)
2011	SK06 (SK30)	(注10):統合)		I A24c				
2011	SX002	RZ11	礎石土層	I A25c	後期初葉-前葉		188	142
2010	SX004	RZ12	礎石土層	B A04a	後期初葉-前葉	BA13の一部を構成する	42(b)	143
2010	SX005	RZ13	立石	B A08a	後期初葉-前葉		188	143

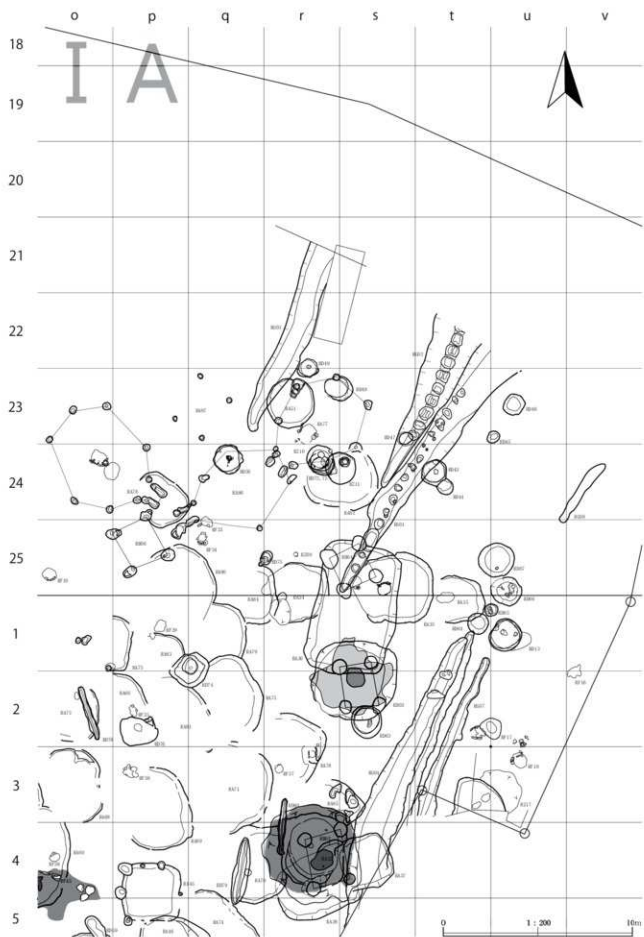


第9図 遺構配置分割図(1)〔分割図配列〕

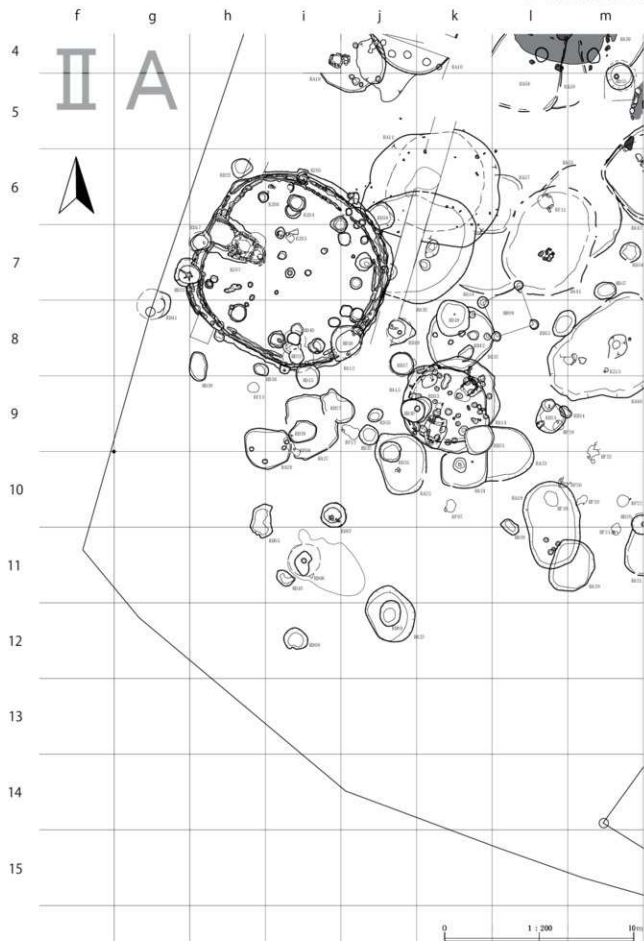


第10図 遺構配置分割図(2)

1 概要

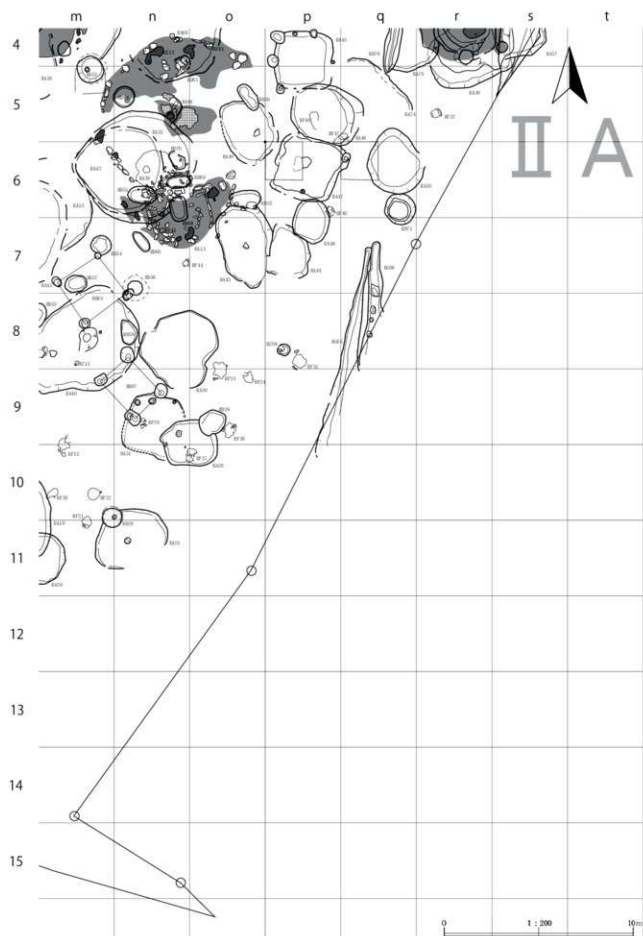


第11図 遺構配置分割図(3)

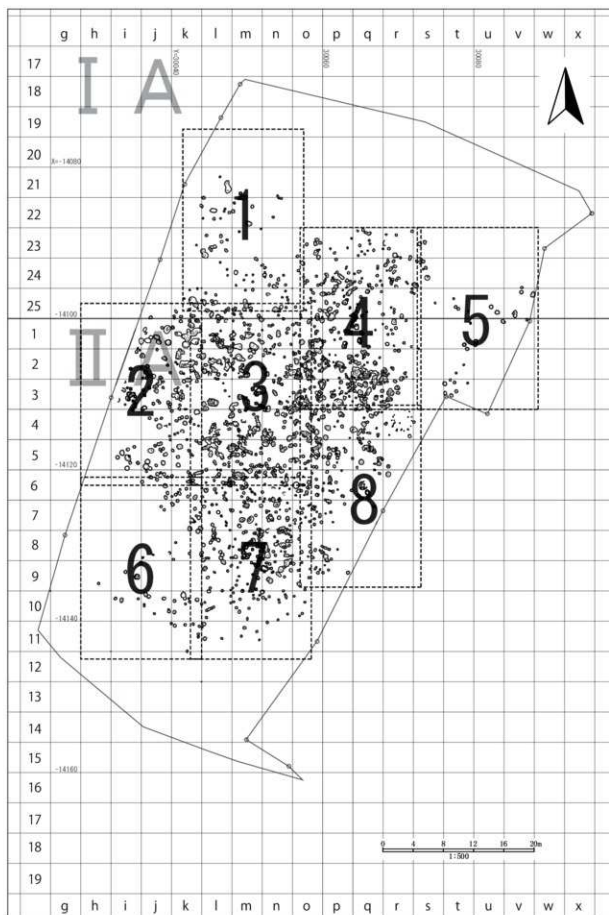


第12図 遺構配置分割図(4)

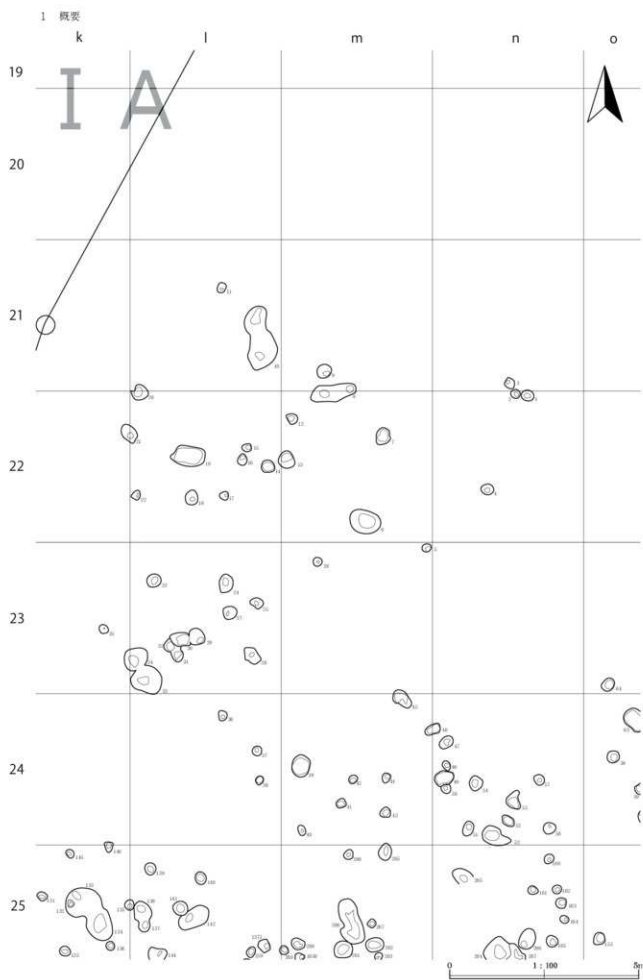
1 概要



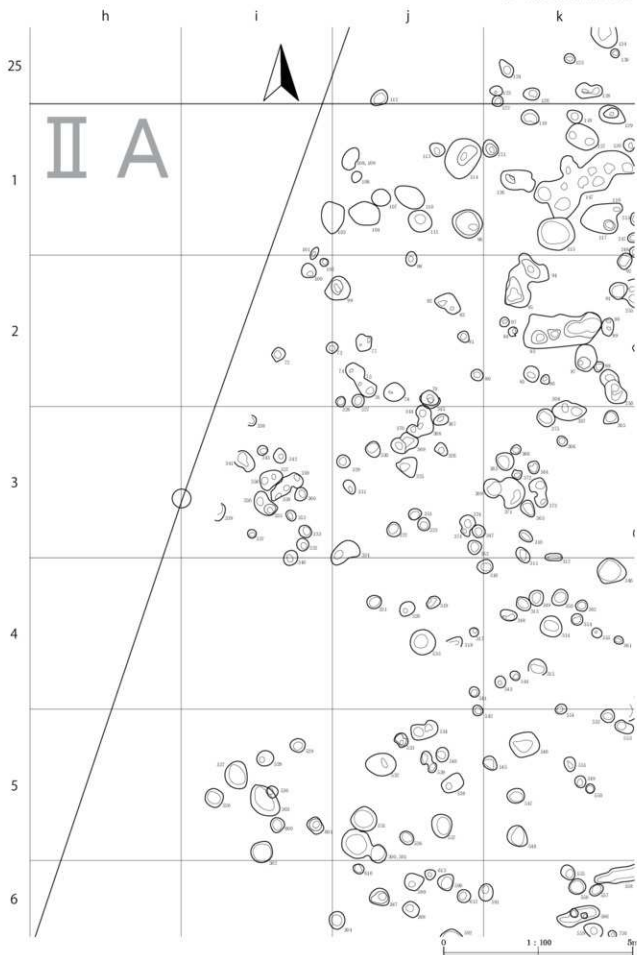
第13図 遺構配置分割図(5)



第14図 個別検出柱穴配置図(1)〔分割図配列〕

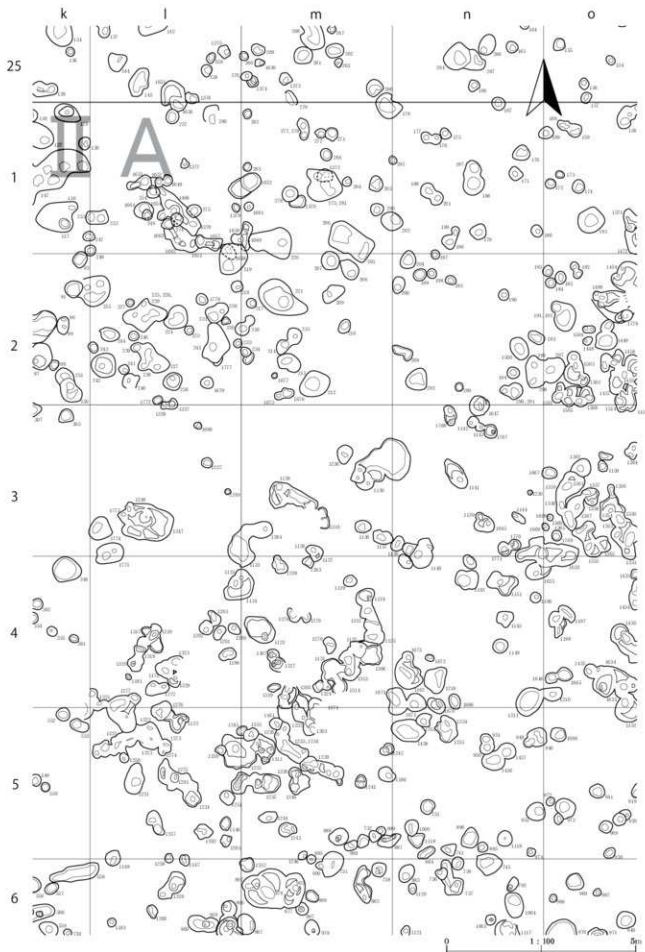


第15図 個別検出柱穴配置図(2)

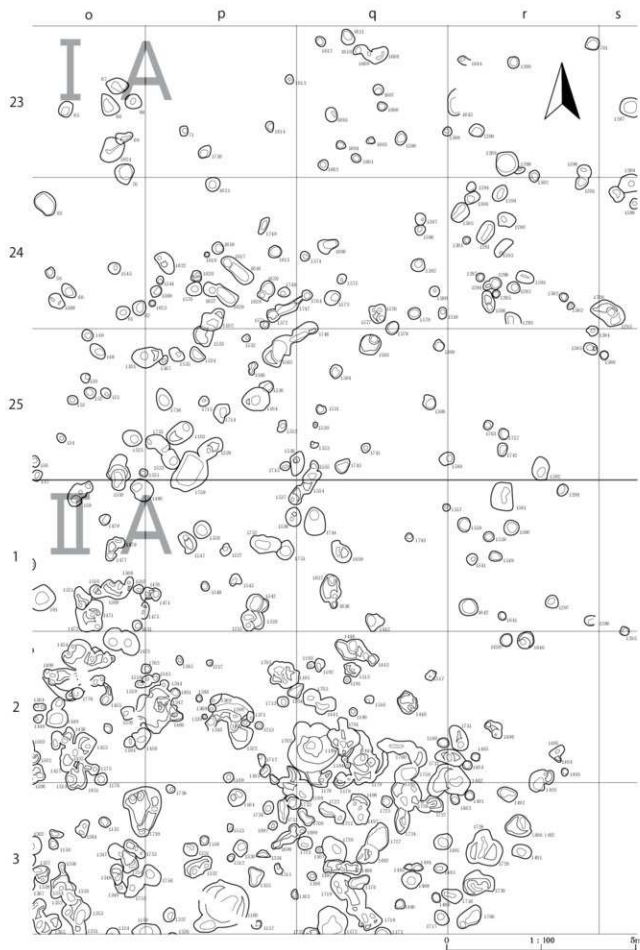


第16図 個別検出柱穴配置図(3)

1 概要

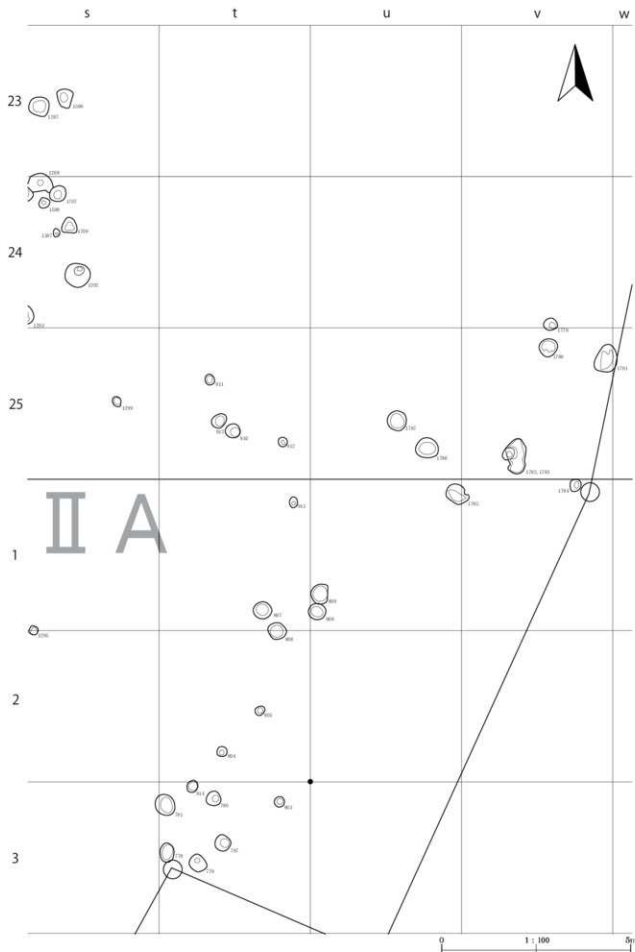


第17図 個別検出柱穴配置図(4)

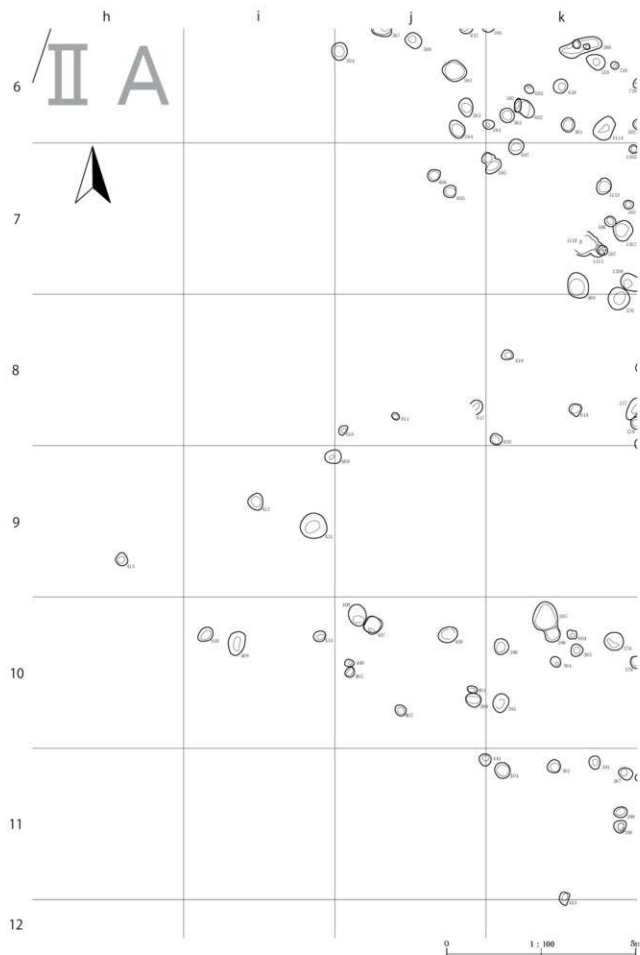


第18図 個別検出柱穴配置図(5)

1 概要

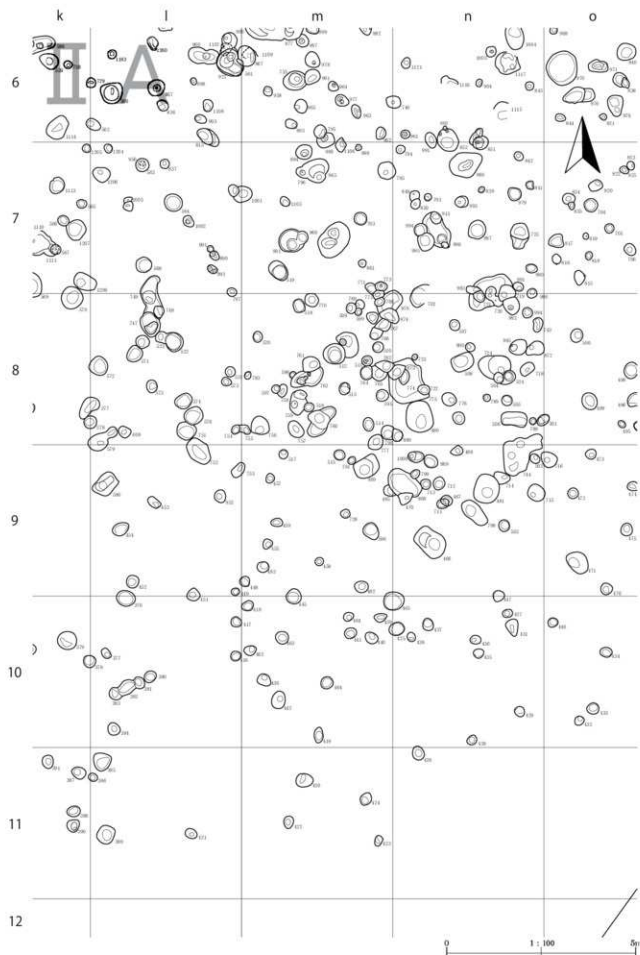


第19図 個別検出柱穴配置図(6)

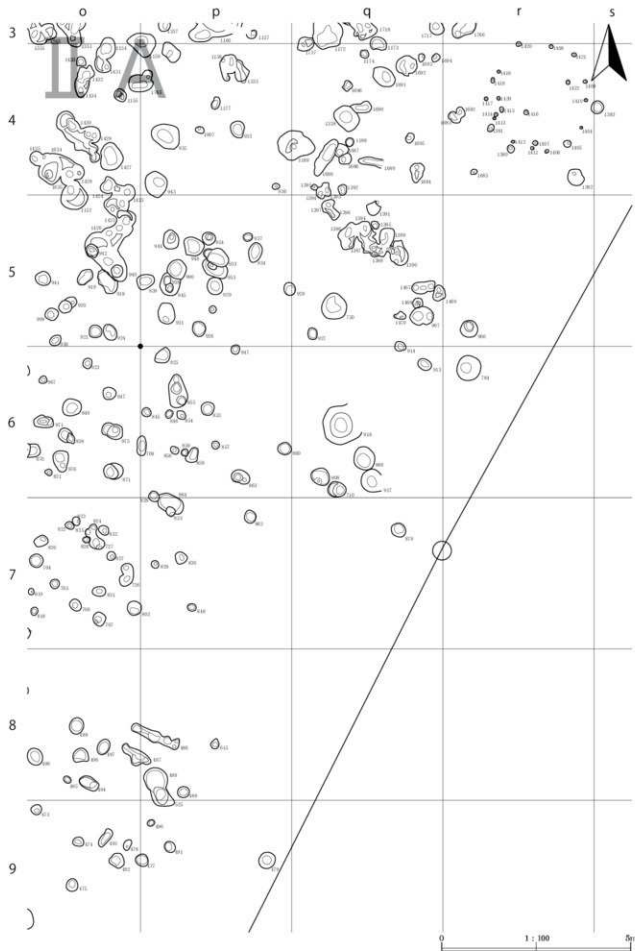


第20図 個別検出柱穴配置図(7)

1 概要



第21図 個別検出柱穴配置図(8)



第22図 個別検出柱穴配置図(9)

2 遺 構

(1) 竪穴住居跡

RA01竪穴住居跡（第23・24図、写真図版3・4）

〔位置・検出状況〕北西部、I A22 k グリッド付近に位置する。調査区西辺に設定したトレンチ内で、灰白火山灰が集中する範囲として認識。トレンチ内では不明瞭だったがVI層上面で方形プランの一部を検出した。土層断面の検討から本来の掘り込み面はIII層上面以上であることを確認した。

〔規模・形状〕西壁側が調査区外にあり全体形状は不明だが、おおむね方形を呈するものとみられる。計測可能な東壁長は290cm、検出面から床面までの残存深度は60cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕（第23図：RA01～03共通断面）床面直上は壁の崩落土とみられるVI層ブロックを含む黒褐色土に覆われている。本層上面には炭化物と焼土が広がることから、廃絶時に焼失・倒壊したのもらしい。この時点で凹地となった内部には、その後周囲からの流入土が堆積している。焼失直後の堆積層である1-3層には十和田 a 火山灰が多量に含まれている。

〔壁・床面・柱穴など〕西壁は調査区外にあり不明だが、確認した壁面はおおむね良好に残存する。下半部（床面から30cm程）ではほぼ直立する壁面が観察されるが、壁上半部には締まりを欠くIII層が露出しており、埋没過程において大きく崩落し外反している。壁溝は認められない。床面は若干の小起伏があるが、概ね平坦で緻密である。主柱穴の特定は困難で、北壁際に並ぶ小穴が認められる飲みである。南東隅のピットは流入土による埋没であり、廃絶直前まで開口していたと考えられるため柱穴とは認め難い。

〔カマド〕東壁南部に設置される。袖部構築礎が一部に残存のみで、大きく破壊されている。カマド本体の規模は80×70cm程度。燃焼部は焼土が失われピット状の凹みとなっていることから、内部の掻き出しが行われたようである。全長約1mの煙道が壁外東側に延び、端部に煙出しのピットを持つ。なお煙道内部にはVI層土とみられる黄褐色土が堆積していた。上部構造の一部にVI層土を用いた部分があった可能性を示唆している。

〔重複〕北壁際床面からRD11が検出された。本住居跡の埋没開始時点にはすでに埋まっていたものであり、本住居より古い。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

〔出土遺物〕土器（1～6）（第194図、写真図版148）。

RA02竪穴住居跡（第23・24図、写真図版5）

〔位置・検出状況〕北西部、I A21 k グリッドに位置する。調査区西辺トレンチ内のVI層上面で、明瞭な黒褐色土の広がりとして検出された。

〔規模・形状〕西側が調査区外にあり全体形状は不明だが、概ね円～楕円形を呈するものとみられる。計測可能な最大長は300cm、調査区西縁土層断面にみる床面までの残存深度は50cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕（第23図：RA01～03共通断面）南壁側で床面を厚く覆うのはVI層土ブロックを多く含む土層である。壁崩落土と思われるが、土層の偏りから人為的な投棄の可能性もある。これより上位には周囲からの流入土（V a 層類似土）が漸次堆積していった様子が観察され、最上位はIV層土に被覆されている。

〔壁・床面・柱穴など〕壁は下半部がほぼ直立し、上半部がやや大きく外傾する。周溝等は確認されなかった。床面は全体に平滑で締まっている。柱穴は検出されなかった。

〔跡〕 精査した範囲からは検出されなかった。調査区外に存在する可能性がある。

〔重複〕 なし。

〔遺構の時期〕 縄文時代中期末葉か。

〔出土遺物〕 土器（7）〈第194図、写真図版148〉。

RA03竪穴住居跡（第23・25、写真図版6）

〔位置・検出状況〕 北西部、I A23 k グリッド付近に位置する。調査区西辺トレンチ内のV b～VI層面で、明瞭な黒褐色土の広がりとして検出された。

〔規模・形状〕 西側が調査区外にあり全体形状は不明だが、概ね円～楕円形を呈するものとみられる。計測可能な最大長は4.0m、調査区西縁土層断面にみる床面までの残存深度は36cmである。

〔埋土・堆積状況〕（第23図：RA01～03共通断面）観察される最も古い土層は3-5層で、VI層土ブロックを多量に含む。壁崩落土と思われるが、北壁側に偏在することから人為的な投棄の可能性もある。これより上位には周囲からの流入土（V層類似土）が漸次堆積していった様子が観察され、最上位はIV層土に被覆されている。

〔壁・床面・柱穴など〕壁は下半部がほぼ直立し、上半部がやや大きく外傾する。周溝等は確認されなかった。床面は全体に平滑で、床面中央部に硬化が認められる。内部からは5個の柱穴状ピット（PPA10～14）が見つかったが、本住居に伴うことが明らかなるものを識別することは難しかった。

〔跡〕 精査した範囲からは検出されなかった。調査区外に存在する可能性がある。

〔重複〕 なし。

〔遺構の時期〕 縄文時代中期末葉か。

〔出土遺物〕 土器（8）〈第194図、写真図版148〉。

笥状石器（2103）、削搔器（2210）。

RA04竪穴住居跡（第26図、写真図版7）

〔位置・検出状況〕 北西部、I A25 j グリッド付近に位置する。V b～VI層上面で明瞭な黒褐色土の広がりとして検出された。

〔規模・形状〕 西側が調査区外にあり全体形状は不明だが、概ね円～楕円形を呈するものとみられる。計測可能な最大長は4.4m、調査区西縁土層断面にみる床面までの残存深度は50cmである。

〔埋土・堆積状況〕 観察される最も古い土層は4層及び3層で、壁から崩落したと思われるV b層土ブロックを多く含む。これより上位には周囲からの流入土（V a層類似土）が漸次堆積していった様子が観察され、最上位はIV層土に被覆されている。

〔壁・床面・柱穴など〕壁は下半部がほぼ直立し、上半部がやや大きく外傾する。周溝等は確認されなかった。床面は全体に平滑で、床面中央部に硬化が認められる。内部からは2個の柱穴状ピット（PPA15・16）が見つかった。

〔跡〕 精査した範囲からは検出されなかった。調査区外に存在する可能性がある。

〔重複〕 なし。

〔遺構の時期〕 縄文時代中期末葉か。

〔出土遺物〕 土器（9）〈第194図、写真図版148〉。

石鏃（1728）、削搔器（2211）。

RA05竪穴住居跡（第27図、写真図版8）

〔位置・検出状況〕中央西部、II A 1 k グリッド付近に位置する。V b 層上面において不整形の黒褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕2.9×2.9mの隅丸方形を呈する。床面までの残存深度は12cmである。

〔埋土・堆積状況〕床面直上を広く覆うのはVI層土を多く含む2層である。土器片・礫等はこの上面から出土する。さらにその上位には周囲から流入したと思われるVa層類似の1層が堆積している。

〔壁・床面・柱穴など〕ほぼ直立して短く立ち上がる壁を全周確認できるが、削平により上部をやや大きく失っている。周溝等は確認されなかった。床面はちいさな凹凸が目立つ。上部からの草木根による攪乱の影響もあると思われる。これらの凹凸には小ピット状に見えるものも含まれるが、柱穴の特定はできなかった。

〔炉跡〕床面中央部のやや西寄りから西壁際に至る範囲にごく浅い掘りくぼみをもつ。この底面には弱く薄った焼土の生成が認められる。住居内の位置や形態は複式炉に似ている。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕縄文時代中期末葉とみられる。

〔出土遺物〕土器 10（第194図、写真図版148）。

石鏃（1518）、敲磨器類（2390）。

RA06竪穴住居跡（第29図、写真図版9）

〔位置・検出状況〕北西部、I A 25mグリッド付近に位置する。V層上面において検出された石囲炉の周囲に広がる不整形で不明瞭な褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕褐色土の広がりは4.2×2.6mの不整楕円形を呈する。ほぼ床面直上まで削平されており、本来のプランだけでなく掘り込みの有無そのものが不明である。

〔埋土・堆積状況〕検出した褐色土は検出を進めるほどに薄く不明瞭になり、堆積状況を断面で観察することはできなかった。隣接するRA07埋土2層に酷似しており、床面直上を覆った埋土である可能性が高い。

〔壁・床面・柱穴など〕壁は不明。炉跡との関係から炉跡断面3層の上面が床面と思われるが、硬化範囲等は認められない。周辺からはPPB262ほか数個の柱穴状ピットが検出されたが、本住居帰属に帰属するものを特定できなかった。

〔炉跡〕褐色土範囲の中央付近に位置する。長さ15～30cmの礫を65×50cmの楕円形に配した石囲炉である。炉内は皿状にくぼみ厚さ10cmほどの焼土の生成がみられる。礫はいずれも裏面まで赤変している。炉内に転落している礫も同様に赤変が認められることから、本来は石囲いの一部を構成するものであったと考えられる。

〔重複〕RD14にわずかに重複するが、先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕縄文時代後期初頭～前葉か。

〔その他の所見〕褐色土範囲の周縁には、褐色土層を上から切りⅢ層土が堆積する小穴状の凹みが点在していた。配石・敷土を伴う遺構（RA13・RB01等）にみられる礫痕跡によく似ており、本遺構においても廃絶後の配石・敷土行為が行われた可能性を指摘しておきたい。RA07・08・10においても類似の現象が観察されている。

〔出土遺物〕石皿（2365）。

RA07竪穴住居跡（第28・29図、写真図版10）

〔位置・検出状況〕中央西部、ⅡA11グリッド付近に位置する。2基並列した焼土（RA07炉a・炉b）の周囲に広がる不整形の褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕5.2×4.6mの概ね円～楕円形を呈する。床面までの残存深度は12cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面は褐色土（2層）に広く覆われている。これを上方から抉る1層は径20～30cmほどの浅い凹みであり、内部に混じりけのないⅢ層土が入る。このピット様の凹みは壁際に沿って分布する傾向にある（関連所見後述）。

〔壁・床面・柱穴など〕床面と想定される褐色土下面は浅皿状を呈し、床と壁との境界が不明瞭のままならに立ち上がる。硬化部は認められない。内部からは複数の柱穴状ピットが検出されている。このうち主に褐色土範囲の周縁付近に位置するPPA17～21等が帰属する可能性が高い。

〔炉跡〕床面中央部から2基の焼土が検出された（炉a・炉b）。炉aは120×70cm、炉bは100×80cmの不整楕円形を呈し、住居の主軸上に並ぶよう北東～南西方向に連なっている。焼土の厚さ15cm前後。上面の硬化は認められない。焼土範囲の直上では上位の褐色土が滲んだように赤変している様子が観察された。この原因は不明である。

〔重複〕RA16と重複し、これを切っている。

〔遺構の時期〕縄文時代後期初頭～前葉か。

〔その他の所見〕今回の調査ではⅣ層上面までの掘り下げに重機を用いている。この際、特に調査区中央部付近では、径20cm前後の礫がⅣ層上面から頭を出すような状態で多く出土した。重機掘削では、礫が完全に持ち上がりてしまってから気がつく場合がほとんどであり、本来遺構に伴っていた礫の一部を失ってしまった可能性が高い。配石を伴うRB01等、プランの周縁に礫を配置する隣接遺構を考慮に入れると、上述のⅢ層土が入る浅い凹みには礫の抜けた痕跡が含まれているものと思われる。

〔出土遺物〕土器（11～19）（第194図、写真図版148）。

石鏝（1582）、敲磨器類（2716）。

RA08竪穴住居跡（第30図、写真図版11）

〔位置・検出状況〕中央西部、ⅡA21グリッド付近に位置する。2基並列した焼土（RA08炉a・炉b）の周囲に広がる不整形で不明瞭な褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕斜面下方の西側壁が流失しており全体形状は不明だが、概ね円～楕円形を呈するものとみられる。計測可能な最大長は4.6m（南北方向）、床面までの残存深度は10cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面は褐色土（2層）に広く覆われている。これを上方から抉る1層は径20～30cmほどの浅い凹みであり、内部に混じりけのないⅢ層土が入る。このピット様の凹みは壁際に沿って分布する傾向にある（関連所見後述）。

〔壁・床面・柱穴など〕床面と想定される褐色土下面は浅皿状を呈し、床と壁との境界が不明瞭のままならに立ち上がる。硬化部は認められない。内部からは複数の柱穴状ピットが検出されているが本住居に帰属するものを識別することは難しかった。主に褐色土範囲の周縁付近に位置するものが帰属の可能性が高いと考えられる。

〔炉跡〕床面中央部から2基の焼土が検出された（炉a・炉b）。炉aは114×82cm、炉bは65×45cmの不整楕円形を呈し、住居の主軸上に並ぶよう東～西方向に連なっている。焼土の厚さ15cm前後。上面の硬化は認められない。焼土範囲の直上では上位の褐色土が滲んだように赤変している様子が観察された。RA07にも認められたこの現象は、本住居跡においてより顕著であり、検出当初は住居内に

堆積する褐色土の上面に生成した焼土と誤認したほどであった。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕縄文時代後期初頭～前葉か。

〔その他の所見〕RA06・07と同様、Ⅲ層土の入る浅い凹みについては礫の抜けた痕跡である可能性を想定しておく必要がある。

〔出土遺物〕土器（20～35）（第194・195図、写真図版148）。

石鏝（1519・1779）、石皿（2366）。

RA09竪穴住居跡（第31図、写真図版12）

〔位置・検出状況〕中央西部、ⅡA2jグリッドに位置する。県教育委員会の試掘により炉の存在が確認されていたものである。周辺のⅤa層土を掘り下げたところ、Ⅴb～Ⅴ層上面において明瞭な黒色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕平面形は4.9×4.0mの楕円形を呈する。西端部を試掘トレンチで壊されている。検出面から床面までの残存深度は20cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面直上を広く覆うのはⅤ層土を多く含む2層である。土器片等の出土はこの上面に多い。さらにその上位には周囲から流入したと思われるⅤa層類似の1層が堆積している。

〔壁・床面・柱穴など〕壁はやや外傾するが立ち上がりははっきりしている。床面は概ね平滑で一部に若干硬化した部分が見られる。内部からはPPA35～40のほか、主に南部壁際に複数の柱穴状ビットが検出されている。本住居に帰属するものを識別することは難しかった。

〔炉跡〕長軸上の西端部に複式炉を持つ。全長170cm、幅70cm。住居内部から西壁に向かって順に、埋設土器を伴う石囲い部（長50×幅50cm）、石囲い部（30×50cm）、浅い掘り込みの前庭部（90×70cm）が連結した構造をもつらしいが、中央～西部をトレンチで大きく破壊されている。埋設された土器は下半部を失った深鉢で、口縁部を下にして、反対側の欠け口が炉内底面から5cmほど上に露出するように設置されている。埋設土器と周囲の礫には被熱痕跡が認められることから、2つの石囲い部が燃焼部と考えられるが、炉内底面に明瞭な焼土の生成は認められなかった。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕縄文時代中期末葉とみられる。

〔出土遺物〕土器（36～38）（第195図、写真図版149）。

石鏝（1841）、甕状石器（2106）。

RA10竪穴住居跡（第32図、写真図版13）

〔位置・検出状況〕中央西部、ⅡA4kグリッド付近に位置する。Ⅴa層上面においてⅣ層類似褐色土の不整形な広がりとして認識。試掘トレンチ内で検出した焼土が中心に位置することから住居跡と推定し精査着手した。

〔規模・形状〕5.6×4.9mの楕円形を呈する。床面までの残存深度は14cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面はⅣ層類似の暗褐色土（2層）に広く覆われている。土器片等の遺物は本層上部に多く、流れ込んだような出土状況を呈する。2層を上方から挟む1層は径30cm前後の浅い凹みであり、内部にⅢ層土が堆積する。このビット様の凹みは壁際に沿って分布する傾向にある（関連所見後述）。

〔壁・床面・柱穴など〕床面と想定される褐色土下面は浅皿状を呈し、床と壁との境界が不明瞭のま

まなだらかに立ち上がる。床面はほぼ平滑だがわずかに西に傾斜する。明瞭な硬化部は認められない。内部からは多数の柱穴状ピットが検出されているが、本住居に帰属するものを特定することは出来なかった。

〔炉跡〕床面のほぼ中央から1基の焼土が検出された。76×64cmの隅丸方形～楕円形を呈する。上面の硬化は認められない。外周の一部に被熱痕跡をもつ礫が残存することから、石囲炉とみられる。なお、この炉跡については調査の不手際により、断面を記録できなかった。

〔重複〕RA18を切っている。

〔遺構の時期〕縄文時代後期初頭～前葉か。

〔その他の所見〕検出段階では、褐色土の広がりや遺構プランの南西部から外側に張り出す様子が認められた。明瞭な掘り込みとして残存するものではないが、本来は全体形状が柄杓形を呈する可能性があり注意を要する。またプラン内部に点在するⅢ層土の凹みについてはRA06～08と同様、礫表痕跡の可能性が考えられる。

〔出土遺物〕土器（39～50）（第195図、写真図版149）。

円盤状土製品（1190～1192）。石鏃（1520）、石皿（2351a）。

RA11竪穴住居跡（第33・34図、写真図版14）

〔位置・検出状況〕南西部、ⅡA6kグリッド付近に位置する。県教育委員会による試掘トレンチ内で検出した焼土の上位に、Ⅳ層に類似する褐色土の堆積が認められた。この土層の平面的な広がりを追ったところ、概ね円形のプランが把握されたことから住居跡と推定し精査着手した。

〔規模・形状〕7.3×6.1mの概ね楕円形を呈する。床面までの残存深度は20cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体は黒褐色土で、南東壁際ではこれに褐色土のブロックを含んだ4層が床面を覆っている。その上位に堆積する褐色土ブロック層（3層）は住居内部の全体を覆う。人為的に投げ込まれた（敷きならされた？）可能性が高い。土器片等の出土は本層上面～2層に多い。その後浅皿状に凹んだ住居跡内部にはⅢ層（1層）が流入し埋没を終えている。なお1層の下面が下位の褐色土ブロック層（3層）を上方から括るように凹んだ部分が点在している。径20～30cmほどの浅いピット様の凹みで、特に壁際に沿って分布する傾向にある（関連所見後述）。

〔壁・床面・柱穴など〕床面と想定される埋土下面は浅皿状を呈し、床と壁との境界が不明瞭のままなだらかに立ち上がる。硬化部は認められない。内部からは多数の柱穴状ピットが検出されているが、本住居に帰属するものを特定することは出来なかった。

〔炉跡〕床面中央部から1基の焼土が検出された。試掘トレンチによって上部を大きく破壊されており、残存形態は北東～南西方向に長軸を持つ楕円形を呈する。規模は200×130cmと大きく、平面形がゲルマ形にも見えることを考慮すると、RA07・08およびRB01と同様、2基の地床炉が隣接し結合したものである可能性が高い。焼土の上面はやや硬化しており、この下位は均質な赤変がみられる。焼土の厚さは15cm前後である。

〔重複〕RA12を切っている。

〔遺構の時期〕縄文時代後期初頭～前葉か。

〔その他の所見〕今回の調査ではⅣ層上面までの掘り下げに重機を用いた。この際、特に調査区中央部周辺では、径20cm前後の礫がⅣ層上面から頭を出すような状態で多く出土した。重機による掘削では、礫が完全に持ち上がってしまった後に気がつくケースがままあり、本来は遺構に伴っていたはずの礫の一部がこの段階で失われた可能性が高い。RB01等、プランの周縁に礫を配置する遺構の存在

を考慮すれば、上述のⅢ層土が入る浅い凹みには配石の礫が抜けた痕跡が含まれる可能性がある。

〔出土遺物〕土器（51～68）（第196図、写真図版149・150）。

円盤状土製品（1193・1194）。石鏃（1521～1524・1797）、石匙（1996）、甕状石器（2108）、石錘（2765）、磨製石斧（2304・2309・2310）、石皿（2352）。

RA12竪穴住居跡（第35～41図、写真図版15～18）

〔位置・検出状況〕南西部、II A 7 i グリッド付近に位置する。Va～VI層上面において、直径約13mの略円形を呈する暗褐色土の広がりとして検出。内側からⅢ層土・Ⅳ層土・黄褐色土の順に同心円状に広がる堆積状況が確認されたことから、レンズ状に自然埋没した大形遺構と推測し精査に着手した。

〔規模・形状〕10.3×10.3mの隅丸方形～八角形を呈する。床面までの残存深度は80～30cmである。

〔埋土・堆積状況〕断面に観察される最も古い土層は、壁面直下の13層である。壁溝底面から壁面に沿って立ち上がる土層であり、木板等、壁面構築材の痕跡とみられる。断面A-A'に顕著にみられるとおり、13層下部は壁下端を外側へと抉り込んでいる。これは壁材が内側に倒れ込み際、床上面との接点を支点に材の下端部が外向きに回転した結果と思われ、本遺構の埋没が上部構造物の倒壊から始まったことを示唆している。

床面直上にはやや多量の炭化木片が分布し、壁から30～50cmほど内側では太さ15～20cm程度の棒状の炭化材が点在する。これらは住居中央に対し求心状、あるいは壁と平行方向に長軸を向けて出土した。上部構造物の倒壊時またはその直後に部材が燃焼した結果とみられる。棒状の形状をこの大形材の周囲には、これを包むように生成した焼土が観察される。周堤等に用いられた若干量の土が、倒壊・燃焼時に同時的に堆積したものと解される。ただしこの時点の土砂の堆積は部分的かつ少量であり、床面の大半が外界に露わとなった状態であった安定したらしい。酸素の遮断（炭化の条件）が限定されたことが、遺構規模のわりに炭化遺存部材の少ない一因と推測される。

このうち住居内部には周囲の地表面から流入したとみられるVa層類似土（9・10層）が堆積する。壁直下を除く床面の大半、そして床面直上に分布する炭化材と少量の遺物は、本層に直接覆われている。斜面上方、北東側からの供給量が卓越する環境にあって漸次埋積が進んだ結果、本住居跡は南西部に最低部をもつ凹地となったらしい。この段階で、南～西側の壁付近、すなわち凹地へ落ち込む肩の部分を選んでフラスコ状土坑（RD16・17・21・23・40・41等）が造られている。また北部では5基の埋設土器（RZ03～07）が本層上面を掘り込んで設けられている。これらは縄文時代後期初頭～前葉とみられる遺構であり、この一時期、凹地となった本住居の跡地が意識的に利用されている。

その後、この凹地を覆ったのはVI層以下の地山土とみられる黄褐色土（5・7層）である。層厚は20cm前後。自然流入土9・10層が薄かったために凹地内で最低部となっていた南西部を埋め均している。明らかに人為による堆積層であり、高低差が生じていた凹地底面が概ね水平に整えられている。この際、壁際に掘り込まれていたRD21・RD40も、同時にこの黄褐色土によって埋め戻されている状況が土層断面で確認されている。この層自体には遺物や礫はほとんど含まれず、精査時に本層上面を床面と誤認したほどガッチリと締まっていた。この黄褐色土層の上には縄文時代後期初頭～前葉を中心とする遺物が多量に投棄されていた。遺物投棄の平面的な範囲は黄褐色土の分布範囲と同様、住居内の南西部に集中している。

これらの遺物分布面は、同時期の遺物を包含するIV層相当の2～4層に被覆され、最終的に生土スコリアが顕著なⅢ層土（1層）の流入によって、本住居跡は埋没を終えている。

〔壁・壁溝〕壁面は全体に直立またはやや外傾している。斜面上方側ほどよく遺存し、北東部で80cm、南西部で20cmほどである。壁直下には一部で断絶しながらもほぼ全周する壁溝を持つ。幅・深さともに10～20cmで、底面に枕状の小穴が点在する。小穴の間隔に規則性は見いだせないが、密度の薄い地点では30～70cmほどの一定の距離を置いた配置への意図が汲み取れそうではある。このような壁溝は床面縁部に最大3重に巡っていることがわかっており、このうち内側を巡る2条は最新期の床面構築土であるⅥ層土ブロック層によって埋め戻されていることから、古段階の壁溝であると判断される。

〔床面〕全体に平滑でよく締まり、上面が硬化している。壁際の一部に低位部を埋め均した貼床土状の客土が観察されるほかは、ほぼ全面が地山を削り出すことによって造られた床面であるとみられる。〔柱穴〕後述する複式炉の長軸を本住居の主軸と仮定すると、主軸と直交方向にそれぞれ対向するよう壁の内側に沿って配置された4組（計8個）の柱穴と、炉が接する壁とは反対側の主軸上の一端に位置する1個の、合計9個が本住居跡の上屋構造を支持する主たる柱穴と考えられる。

主軸を挟んで対向するのはPPA41-42、43-44、45-46、47-48である。PPA41-46はいずれも直径80～100cm、深さ100cm程度と極めて大きくしっかりとした掘方を持っている。土層断面には幅30～40cmの柱痕跡が認められることから、掘方の規模に見合った大形の柱材が用いられたものと考えられる。これに対し炉の両脇に位置するPPA47-48は直径50cm前後と他と比して規模が小さいものの、いずれも80cm前後の深さを有している。

主軸上の一端、炉とは反対側の壁際に位置するのはPPA49である。直径70cm、深さ80cmほどで、上記の大形柱穴に比して若干規模が小さいが、断面には径40cm程度の柱痕跡が認められることから、同規模の柱材が据えられたものと考えられる。

以上は床面上で検出された柱穴であるが、床面構築土の下位から検出されたものも存在する。これらのうちPPA128（同41に切られる）・PPA50（同43に近接）・PPA51（同45に近接）、PPA147（同46に切られる）・PPA133（同48に近接）は、いずれも近接・重複する柱穴と同等のしっかりとした掘方を持つものであり、先記の柱穴よりも古段階に主柱穴として機能したものと推測される。

これらの主柱穴のほかに、壁面上部を外側に向かって斜めに掘り込んだ4個のピットが見つかった（PPA54・55・126・127）。それぞれ主柱穴PPA41～44に近い壁面に位置する。材は住居の中央上方に向かって傾斜するように設置されたと考えられ、垂木など上屋構造の一部を構成したことが推測される。

〔炉跡〕北西側の壁に接するように、いわゆる複式炉が設置されている。全長350cm、最大幅210cmと極めて大規模なものである。住居の内側から順に、土器埋設及び石囲いを伴う燃焼部、石囲部、前庭部の3区画からなる。

住居の中心側に位置する燃焼部は、長さ80cm・幅100cmの半円形を呈し、深さ25cmの枕状に凹んでいる。楕円形・長方形の礫が外縁に長軸に沿わせる形で落ち込みの屑の部分に配置されている。このほか、さらに外側に列状に据えられたもの、内部壁面上部に配された礫も一部残存する。住居中心側に寄った位置には、略完形の深鉢が口縁部が燃焼面から突出するように、内側にわずかに傾けられた状態で埋設されている。焼土は内部全面に生成し、上面の硬化は顕著、厚さ10cmに及ぶ赤変が認められる。埋設土器の内部は流入土が堆積することから廃絶前は空洞であったと推測される。

燃焼部と前庭部の間に位置する石囲部は、長さ120cm・幅150cm・深さ60cmの箱形を呈する。燃焼部側の壁面には、一辺50cm前後・厚さ10cm強の板状の大形礫2つが立てかけたように並べて設置されている。また、両側壁には、長径20cm前後の楕円形・長方形の礫が、小口を内側に向けて俵のように積

み上げられ、ほぼ垂直に立ち上がる整った壁面が構築されている。前庭部に向かって右側手前の壁面では石積み内部に崩落しているが、壁面には礫を据えた痕跡が確認されている。一方、前庭部側では明瞭な壁面は存在せず、底面が緩やかに高まってそのまま前庭部の底面に連続する。底面は主軸上が低く、両脇に向かってやや高くなる。底面直上からは、炭化材が主軸方向に向きを揃えたような状態で出土した。石囲部の内部は全体に被熱痕跡が認められるが、燃焼部のそれと比較してずっと微弱なものである。したがって内部に遺存する炭化材は、炉の機能の行使によるものではなく、住居廃絶後に外的要因（住居本体の焼失）により炭化したものと考えられることから、元々底面に敷き込まれた材（板材か）である可能性が高い。

住居の壁に接する前庭部は、長さ150cm・幅170cm・深さ40cmの箱形を呈する。上述の石囲部と接する側を除く三方は、ほぼ直立する壁面を有しており、このうち石囲部と反対側の面はそのまま住居の壁面と連続している。この3面の直下には住居本体の壁溝に類似する小溝を持ち、方形の底面の各隅部からは柱穴状の小ピットが検出されている（RD17との重複部では残存しない）。このことから、前庭部の内壁は、住居本体の壁面と同様の構造で構築されていたと考えられる。底面はほぼ水平に整えられ、全面に硬化が認められた。

なお、燃焼部と石囲部の境界に立てかけられた板状の礫の裏側から、同様の板状礫とその周囲を補う楕円形礫が出土している。先行段階の炉の構築材の一部とみられることから、住居本体の改築に伴って、炉の再構築も行われたものと推測される。

〔住居中心の小穴〕PPA56は、複式炉から主柱穴PPA49を結んだ主軸上に位置するほか、同じく主柱穴PPA45-48間、同46-47間を対角線で結んだ交点にも位置することから、本住居跡の中心に位置していると言える。PPA56は、開口部径40cmの浅い凹みの底面に、さらに径20cm・深さ10cmほどの落ち込みを持つもので、底面には風化した花崗岩の細片が貼りついていた。地山であり本住居の床面となっているVI層土に花崗岩は含まれないことから、このピットには花崗岩（製の何物か）が据えられていた可能性が高いと考えられる。内部には、住居本体の焼失時に生じた焼土粒や炭化物が床面から連続して流入しており、住居の廃絶時にはすでに取り除かれていたものと考えられる。

〔改築〕壁溝が並走する部分が見られることや、主柱穴が近接・重複すること、炉内に新・古の配石が見られることなどから、本住居は数度の改築を経ていることが理解される。埋土の断面には内側の壁溝から立ち上がる土層の断絶は認められないので、最大化した状態が埋没直前の形態とみられる。古期に位置づけられる柱穴と壁溝の配置から、炉から中央部を向いて左側（北西側）に向かって拡張された可能性が高い。

〔重複〕RA20・RD38を切り、RA11、RD16・17・21・23・40、RZ03～07に切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代中期末葉と判断される。

〔出土遺物〕土器（69～137）〈第196～202図、写真図版150～154〉。

ミニチュア土器（1145）、土偶（1156）、鐸形土製品（1164・1165）、土製耳飾（1175）、円盤状土製品（1195～1244・1390～1395）、尖頭器（1502）、石鏃（1525～1545・1729・1730・1780・1798～1804・1842～1844・1892～1898・1953～1959）、石匙（1997～1999・2060・2072・2083）、籠状石器（2109）、削搔器（2212～2225・2289・2290）、石錘（2766～2774）、石棒（2800）、円盤状石製品（2803～2806）、磨製石斧（2311・2312・2330・2341～2343）、接合剥片（2298）、石皿（2351b・2353）、敲磨器類（2392～2394・2551～2554・2590～2596・2637～2642・2717～2720・2764）、自然礫（2816・2817・2822）。

RA13配石・敷土を伴う住居状遺構（第4表、第42～48図、写真図版19・20）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 5 n グリッド付近に位置する。V a 層上面において大形礫による弧状の配石列が検出されたことから、環状配石遺構に類する何らかの遺構の可能性のあるものと判断し精査に着手した。

〔規模・形状〕8.8mの円環をなす配石（以下、「本体」）の南縁に、方形基調（2.5×3.5m）の配石（以下、「張出部」）が接して、いわゆる柄鏡形住居に類似する平面形態を持つ。これらの配石は、VI層の黄褐色土を用いた盛土（以下、「敷土」）を伴っており、両者によって構成される遺構全体の形状は、全長11.3m・最大幅8.8mの鶏卵形を呈する。ほぼ正円を呈する本体の中心と、張出部南部の先端を通る主軸線は、概ね座標の南北ラインに一致する。

〔配石〕本体には縁部に沿って環状に配された礫が断続的に残存している。斜面上方側に当たる東縁部では大半を失っているが、西縁では弧状に並ぶ配石が比較的良好にのこっている。長径50cm前後の板状または箱形の礫が主だが、楕円形のものも少数含まれる。いずれも長軸を本体外縁に沿わせ、上半部が地表に露出するように埋置されており、板状・箱形の礫は、広い面が本体内部に向くよう、ほぼ垂直に（あるいはわずかに外傾して）立ち上げて据えられている。

張出部は隅丸形状に外縁を区画する配石列と、その内部に点在する礫群からなる。外縁の配石列には、本体のものに比してやや小さい、長径30cm前後の礫が用いられている。埋置の方法は本体と同様で、長軸を連ね、立ち上げられた状態で据えられている。ただし、板状礫が概ね直線的に連続して埋置されるのは東西両辺のみであり、南辺側は敷土の上面に載るような状態（埋置ではなく貼り付けられた状態？）で出土した楕円形礫の断続的な列によって画されている。内部の礫群は、攪乱によるためか本来の配置が判然としない。しかしながら、外縁東辺の内側にはこれと平行して並ぶ配石列が残存しており、周辺に点在する礫の分布と合わせると、外縁と同様の概ね方形の配石列が想定される。よって、張出部の配石は概ね「回」の字に似た配置であった可能性が考えられる。

このほか、張り出し部の南東隅から北東方向に斜めに延びて、本体環状配石の南東縁に接する配石列が認められる。主軸を挟んでこれと対称的な位置に当たる西側では、同様の配石は見られない。しかし、張出部南西隅から本体環状配石の南西縁を結ぶラインには、礫の抜去痕と見られるⅢ層土の入る小ピットが点在することから、西側においても同様の配石列が存在した可能性が高い。後述する黄褐色土による敷土は、張出部においては、南東隅から北東方向、南西隅から北西方向にそれぞれ延びる配石列（またはそれが想定されるライン）の内側に分布することから、この配石列は全体形が鶏卵形を呈する本遺構の南部において、最外縁を区画していたものと考えられる。

なお、張出部では、検出段階には地表に現れていなかった礫が、敷土中、または露出する礫の下位から出土する状況が認められた。これらが列をなし何らかの意匠を形成する状況は認めなかったが、検出面に露出する礫で構成された最終形態に先行する配石行為の存在を示唆している。

本遺構の配石の中で最大の礫は、張出部と本体の接点にあり、かつ本遺構を南北に貫く主軸上に位置するS137である。82×60×18cm・66.0kgの大きな板状礫で、本体配石列の環状配置に長軸に沿わせているが、本体内部に向けて半ば転倒した状態で出土した。検出面においては、この礫の周囲半径1.0mの範囲にⅠ層土の広がり認められ、精査の結果、近世以降に人為的にこの礫の抜去が試みられた痕跡と判断した。結果的に除去には失敗し、転倒させた状態で遺棄されたものとおもわれる。本来は他の板状礫と同様に垂直に立ち上げられ、本遺構内において最も突出した巨礫であったと推測される。

以上に記した配石列は本遺構全体の輪郭を形成するものであるが、これらとは別に、礫を集中配置した集石部が3箇所確認されている。いずれも墓塚である可能性の濃厚な土坑（RD51・62・69）

の上位に位置しており、これらの構築に伴って礎の配置が行われたものと考えられる。

このうち、本体内部北縁際のRD62、本体内部南縁際のRD69と、それぞれに伴う集石は、本遺構の主軸上に位置している。

RD62に伴う礎は、墓塚の埋土上部に径50cm前後の大形礎を集中的に埋め込んだもので、礎の上部が露出するように設置されていた。礎は、本遺構の輪郭を形成する外縁の配石列と同様、敷土（黄褐色土）と同時に埋められている。

またRD69では、長径20～30cmの礎が墓塚の上端周縁に長軸を平行させ、これを取り巻くように概ね2重の配石列を成す様子が看取される。RD69に伴う楕円形の配石列の南縁には、本体と張出部の接点にある巨礎S137が位置するが、先述の通りS137の周囲は後世の攪乱によって乱されており、S137そのものの位置づけは困難となっている。しかし①A-①A'に見られるよう、本土坑の上位は敷土層7層に厚く覆われており、同時に付近の礎設置が行われたことが理解される。

この二者には、本体内部の主軸上の両端に位置し、輪郭を形成する配石列を乱していないという共通点がある。本遺構の全体形状に対して調和的であり、また配石が敷土と同時に進行している点も考え合わせれば、本遺構全体の構築と大きな時間差はないものと考えられる。

これに対し、張出部の方形配石列と本体環状配石列の接点に位置するRD51と集石は、輪郭形成の配石列を乱し、敷土の分布も周囲で途切れていることなどから、本遺構の構築後、いくらかの時間をおいて新たに追加されたものである可能性が高いと判断される。

なお、付属土坑については、後段の〔付属施設〕において追記する。

〔敷土〕本遺構はIV層中～V a層面を構築面としている。よって構築時点においては、暗褐色～黒色を呈する土壌が地表面を形成していたと考えられる。暗調の地表面に対し、対照的な明るさを持つ黄褐色～褐色土（主にVI層土）を敷き均し、あるいは盛り上げることで、配石列とともに本遺構の全体形状を視覚的に表出したものと考えられる。

先述の通り、張出部においては、南東隅から北東方向、南西隅から北西方向にそれぞれ延びる配石列（またはそれが想定されるライン）の内側に敷土が施されている。上面観は三日月形を呈し、中央部では20cm前後の厚さを持つ。用いられた土はよく選別されたVI層土であり、分布範囲の縁部や下面付近を除けば、いわゆる黒ボク土は全く含まれない。また、本体においては、同様の黄褐色土は主に周縁部である環状配石列の掘方によく残存する。本体の内部においてもほぼ全面にわたり類似の褐色土が分布するが、周縁の配石掘方に入る黄褐色土に比してやや暗く濁りがある。

なお、平面図及び写真では、敷土範囲が本体北半に偏って分布するように見えるが、これは精査時の不手際により本体南半部を掘り下げ過ぎ、下位のIV～V a層が露出してしまった故である。敷土の分布範囲については断面図をあわせて参照されたい。

〔付属遺構〕本遺構には上述の楕円形土坑（RD51・62・69）に加え、同じく墓塚とおぼしきRD68・RZ12埋設土器、及び焼土が付属する。

RD68は、主軸上かつ張出部中央に位置する隅丸長方形の土坑である。その配置からみて、主要な付属遺構であることが理解される。敷土上面においてわずかに暗い範囲として認識されたが（埋土の沈縮に伴うか）、断面観察によれば上位を敷土層により完全に覆われていることから、敷土・配石に先行する遺構であることは明らかである。他の土坑は壁面・底面が不安定な長楕円形のものであるのに対し、RD68は壁面がほぼ直立し、水平な底面を持つ整った隅丸長方形を呈するなど、構築時の入念さが際立っている。また底面の南北両端付近からは副葬品と見られる石鏃及び異形石器が出土している。

RZ12は、主軸上かつ本体北端部の配石（S2）の下位に、小形鉢形土器を埋設した遺構である。これもまた、輪郭構成配石列と敷土に上位を覆われていることから、全体形の完成に先行する遺構と判断される。土器内部と掘方には、基本土層に存在しない砂礫（外部から持ち込まれたと考えられる）が意図的に充填されており、特殊な意味を付与された遺構であることを示唆している。

以上の付属遺構の詳細については、本節に後掲の各遺構の記載を参照されたい。

焼土は、環状を呈する本体の中心部に位置する。上位土層の攪乱の影響で残存は断片的であるが、径23mほどの範囲に赤変部の広がりが認められる。生成面は敷土上面である。このほか土層断面では、RD62の北側に接して焼土層の生成が確認されているが、こちらの焼土については平面的な分布は把握できなかった。

〔堆積状況から見た構築過程〕本遺構を南北に縦断するように設定した土層断面（①A-①A'）は、検出面からⅥ層（地山）上面までの堆積状況を記録したものである（第43図）。同様に、張出部を東西に横断する②A-②A'、本体中央付近を横断する③A-③A'を設定し、層名及び注記を相互に共通させた。このほか、張出部と本体の接点付近の断面記録を⑤A-⑤A'で行った（以上、第44図。断面④は欠番）。なお、断面記録時点では、付属遺構のほとんどがその存在を把握できていなかったため、本文記載と図が整合しない部分があるが、再検討の結果を記した本記載を正とする。

①-③の堆積状況を下位から追ってみると、地山Ⅵ層の上位にはⅤb層相当の9層、その上にⅤa層相当の8b層が概ね水平に堆積している様子が確認できる。①A-①A'の断面図右端（本体北縁付近）には、Ⅴa層と8b層、Ⅴb層と9層の境界を破線で示した部分があるが、これは調査者である筆者の、本遺構には堅穴が伴わず、という予断から生じた迷いの証であり、実体が伴わないことを告白しなくてはならない。8b層及び9層の下面に見られる凹凸は、下位に存在する縄文時代早期の遺構群の掘方であることが、後の調査でわかっている。

よって、本遺構を構成するのは7層以上の土層である。7層は、本遺構の本体（環状配石列の内部）に堆積する明るい色調の土層で、人為的に敷き均されたものと考えられる。末端部では基本土層Ⅳ層を覆う部分が確認されていることから、本遺構の構築面はⅣ層下面より上位ということが理解される。同じように張出部では、純粋なⅥ層土を用いた敷土層（盛土層）の6a~6b層が堆積している。7層と6a~6b層の先後関係については層位的な確認ができていないが、輪郭を形成する配石の設置と敷土行為が同時に行われたことが明らかである点（本体・張出部の双方において、配石の掘方は敷土で充填されている）や、張出部の東西縁が本体の外縁に接して一体化した平面形が意識されている点、本体内の敷土がやや暗いのはⅥ層土の純度が若干低いためであると解釈できる点、など考慮すれば、両者の間には大きな時間的断絶はなく、同時的あるいは連続的に構築されたものと理解することに無理はないように思われる。

この敷土層を鍵に、付属遺構の時間的な位置づけを試みると、配石・敷土に先行することが明らかなのは、張出部中央の下位から検出されたRD68、本体内部南縁のRD69、本体内部北縁付近のRD62、本体北縁の下部に埋設されたRZ12である。これらはいずれも主軸上の要所に位置することから、本遺構全体の設計段階において設置が企図されていたはずのものであり、構築工程上は先行するが、配石・敷土との大きな時間差は無かった可能性が高いだろう。

反対に、本体中央部で敷土の上面に生成している焼土は、本遺構の構築後に位置づけられることが明らかだが、やはり、本体中央の主軸上にあることを考えれば、大きな時間差は想定し得ない。構築完了後に、この構造物の内部において為された行為の痕跡と考えられる。

また、敷土層と配石列を切って造られているRD51も、明らかに構築完了後に位置づけられる。だが、

張出部と本体の接点という、本遺構の主要部を志向する意図が汲み取れる配置を見れば、大きな時間差は考えられない。本遺構の有する性格を認識した上ででの配置であり、廃絶以前の構築と考えるのが妥当であろう。

なお、これらの付属遺構のうち、特に墓とみられる土坑は、一定の時間差を持って追加されていったと考えるのが自然であり、そのたびに同様の敷土と配石の方法によって、本遺構に対する変形・加飾が重ねられた可能性は十分に考慮しなくてはならない。張出部と本体内部の敷土の明度に差異が認められる点や、敷土上面より下位に先行する可能性のある配石が存在する点などは、本遺構が数次の変遷を経ている可能性を示唆している。

〔全体構造と上屋の有無〕ここで再び、断面図から取看される本遺構全体の構造に目を向けてみたい。

①A-①A'で敷土層の縦断面を見てみると、張出部中央の敷土上面は、本体内部の敷土面（焼土生成面）から見て約30cm高くなっていることがわかる。本体内部から見ると、張出部はステージ状に高く造られていたと考えられる。

また、東西方向の横断面を③A-③A'でみると、敷土上面は自然傾斜に沿って西側に向かって低くなっている。西縁部ではトレンチによって敷土層の一部が削平されているが、地表に突出していたはずの配石（S159）の頂部と、東縁部の敷土上面との比高は約50cmに及んでいる。このような大きな傾斜を持つ敷土上面を、居住施設の床面と想定するには無理があるように思われる。

竪穴住居のように、上屋構造をもつ施設であるかを検証するため、敷土層の下面（Va層上面）とその下位のVb層上面で柱穴の探索を行ったが、本遺構に帰属すると考えられる柱穴は検出されなかった。明瞭な柱穴を持たない上屋構造を持っていた可能性も否定はできないが、敷土や配石を持つ方形柱穴列（RB01～04等）や柄鏡形を呈するとみられる住居跡（RA76・77・86等）など、本遺構とはほぼ同時期とみられる類似遺構が大形で深いしっかりした柱穴を有することを考えれば、本遺構にのみ柱材の設置に異なった手段が用いられていたとは考えづらい。よって本遺構は、上屋構造を持たない露天の構造物であった可能性が極めて高い、というのが調査者である筆者の見解である。

〔配石に使用された礫〕第4表（第二分冊）には本遺構の配石に用いられた礫の一覧を示した。取り上げ後に計測を行ったため、一部は破砕により測定不能だったものも含まれる。

合計174個の礫が用いられており、総重量は1,990.1kg。最も大きいのは長径81.5cmのS137、最も重いのは85.0kgのS14である。大半が転礫であり、供給源は遺跡に近い北上川が想定される。石質鑑定を依頼した花崗岩研究会によれば、チャート・花崗閃緑岩・花崗岩等の白色系の礫と、安山岩・デイサイト等の黒色系礫が混在するため、配置によってはコントラストが際立ったであろう、とのことである。

〔重複〕付属遺構との関係については上述の通りである。下位からは複数の縄文時代早期遺構が検出されている。遺構配置図を参照されたい。

〔遺構の時期〕縄文時代後期初頭～前葉と思われる。

〔その他所見〕本遺構をRA（住居跡）に含めて報告しているのは、本遺構の視覚的形態がいわゆる「柄鏡形住居」に類似するからであり、廃絶直前段階における本遺構の機能・性格を、居住施設と判断したためではないことを付記する。

〔出土遺物〕土器（138～142）（第202図、写真図版155）。

円盤状土製品（1245）。石鏝（1731・1845）、敲磨器類（2395・2396）。

RA14竪穴住居跡（第49・50図、写真図版21・22）

〔位置・検出状況〕 南西部、II A 9 k グリッドに位置する。V層上面において土器片・礫等が集中する不整楕円形の範囲として認識。この時点で全体のプランは不明であった。これらの遺物を取り上げながら全体を掘り下げたところ、2箇所の焼土を検出し、竪穴住居跡と判断した。

〔規模・形状〕 RA15と同時に掘り下げたため大きく破壊してしまっているが、土層断面の検討によれば、5.3×4.4m程の楕円形を呈するものとみられる。床面までの残存深度は12cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕 黒褐色土を主体とする。IV層類似土ブロックや焼土ブロックを全体に含み、特に上部に土器片・礫等を多量に含んでいた。人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔壁・床面・柱穴など〕 先述の通り、重複するRA15と同時に埋土を掘り下げたため、結果として、精査後に残存した壁は北東部に限られる。立ち上がりはなだらかで床面との境界が判然としない。RA15重複部では、北東部に残る床面から連続するレベルで硬化面や焼土・炭化物の分布面など、床面らしい痕跡を探したが、下位のRA15埋土との境界を面的に識別・検出することはできなかった。土層断面によれば、床面は概ね平坦に広がるが小起伏が点在する。内部からは多数の柱穴状ビットが見ついているが、本来帰属する柱穴を特定するには至らなかった。

〔炉跡〕 床面中央ややや北東側に寄った位置に石囲炉（炉a）、反対に南西側に寄った位置に地床炉（炉c）が設けられている。二つの炉は、住居の軸上（北東-南西方向）に位置している。

炉aは90×70cmの長方形を呈し、住居の中心側（南西側）を除く3辺に礫が配されている。内部は床面より10cm程低く凹んでいる。配石のない南西辺は、住居内側に向けて元々開放されていたらしく、焼土は凹んだ長方形の範囲を南西側に越え約60cm張り出し生成している（この部分を炉bとした）。一方、これと対向する北東辺（壁側）には、50×48×12cmの大きな板状礫が床面から約20cm突出するように立てて埋置されており、その両脇に当たる南東・北西辺には長さ20～30cmの礫が長軸を揃えて直線的に配置されている。炉内に生成した焼土は厚さ10cm強で上面はガリガリに硬化している。また炉内部からは剥片が出土している。

炉cは平面形が長さ68cmの瓢形を呈するが、断面の観察により、直径30cmほどの二つの円形焼土が近接しているものであることがわかった。焼土の厚さは5cm前後。上面にはやや硬化が認められた。

〔重複〕 RA15を切っている。

〔遺構の時期〕 縄文時代後期初頭～前葉とみられる。

〔その他の所見〕 調査終了後に柱穴配置の再検討を行ったところ、北東側壁から外側に延びる2条の溝状（楕円形）ビットの存在に気がついた（PPB577・579）。本来の形状が柄鏡形を呈する可能性があるものとして注意を要する。

〔出土遺物〕 土器（143～148・161・163）〈第202～205図、写真図版155・157〉。

ミニチュア土器（1141）、不明土製品（1187）、円盤状土製品（1246・1247）。石鏃（1546・1548）、石錘（2775・2776）、円盤状石製品（2807）、敲磨器類（2597～2600・2643）

〔RA15との重複部における出土遺物〕

土器（149～160・162・164～176）〈第203～206図、写真図版156～158〉。

ミニチュア土器（1138・1140）。円盤状土製品（1248～1253）。尖頭器（1503）、石鏃（1547・1549～1551・1732・1805・1806・1847・1848・1960・1961）、削搔器（2226～2228・2267）、石錘（2777～2779）、磨製石斧（2305）、石皿（2354）、敲磨器類（2397・2644・2696・2723）、自然礫（2826）。

RA15竪穴住居跡（第51・52図、写真図版23）

〔位置・検出状況〕南西部、II A 9 k グリッドに位置する。V層上面において土器片・礫等が集中する不整楕円形の範囲として認識。この時点で全体のプランは不明であった。これらの遺物を取り上げながら全体を掘り下げたところ、2箇所の焼土を検出し、竪穴住居跡と判断した。

〔規模・形状〕4.4×4.4mの概ね円～隅丸方形を呈する。床面までの残存深度は30cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV a層類似の黒褐色土を主体とする。VI層土小ブロックの混入が壁際にならずにみられるほかは、全体に均質である。周囲からの流入土により自然に埋没したものとみられる。

〔壁・床面・柱穴など〕RA14と重複する北西部で壁の上半部を失っているが、立ち上がりは全周残存する。壁面はわずかに外傾するが直立に近く、しっかりとしている。床面は平坦に整い緻密である。ただし、床面に現れた縄文時代早期の遺構の一部を本住居跡に帰属する柱穴等と誤認して掘り下げた箇所があり、記録時には床面は相当程度荒れた状態となってしまうている。内部からは多数の柱穴状ピットが見つかっているが、本来帰属する柱穴を特定するには至らなかった。

〔炉跡〕南側壁面に接して複式炉1基が設けられている。全長170cm、幅120cm。北側（住居内側）に方形の石囲部（40×60cm）をもち、南側（壁側）に前庭部（130×120cm）が連続する。石囲部は長さ20cm前後の礫を周囲に配したもので、前庭部との境界（南辺）には大形の板状礫（40×24×10cm）が立てて据えられている。前庭部は住居床面より約20cm掘り下げられており、底面は平坦に整っている。前庭部の内部は北半部がやや広く、この部分の壁際には礫が敷かれた痕跡とみられる小穴が観察される。石囲部の礫は全体に被熱赤変が認められるが、底面に赤変部は残存しない。前庭部の北側底面の一部（石囲部との境界付近）にはわずかに焼土生成箇所が認められる。

〔重複〕RA14に切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代中期末葉とみられる。

〔出土遺物〕土器（177～180）〈第206図、写真図版158〉。

錘形土製品（1166）。石鏃（1846）。

※ RA14との重複部における出土遺物については、RA14〔RA15との重複部における出土遺物〕の記載を参照されたい。

RA16竪穴住居跡（第53図、写真図版24）

〔位置・検出状況〕中央西部、II A 1 m グリッド付近に位置する。VI層上面において概ね楕円形を呈する暗褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕3.6×2.8mの楕円～隅丸長方形を呈する。床面までの残存深度は40cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面直上には薄くV a層類似土の堆積が観察される（4層）。斜面上方に当たる北東側の壁際は壁の崩落土とみられるVI層土ブロック層（3層）が堆積し、その上位にはV b層類似土（2層）、V a層土（1層）の順に漸次流入したものと解される。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は概ね平坦に整うが、明瞭な硬化面は認められない。南東壁および北西壁は床面縁部からほぼ直線的に立ち上がり、一方、南西・北東壁は内弯・外傾して床面と自然に連続している。壁際に沿って数個の柱穴状ピットが検出されたが、本住居への帰属が明らかなのは識別できなかった。

〔炉跡〕検出されなかった。

〔重複〕RA07に切れ、RA64・RA65を切っている。ただしRA64は平成23年度調査で本住居跡の外周が掘り広がりたものであり、本来は本住居とRA64が同一遺構である可能性がある。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉～前期初頭を想定したい。

〔出土遺物〕土器（181）〈第206図、写真図版158〉。

石匙（2000）。

RA17竪穴住居跡（第54図、写真図版25）

〔位置・検出状況〕東端部、II A 3 t グリッド付近に位置する。VI層上面においてプラン不明瞭な濁った褐色土の範囲として検出された。

〔規模・形状〕南半部が調査区外にあり、また北東部が攪乱と重複している。このため全体形状は不明であるが、本来は楕円形あるいは隅丸方形のプランを持つものと推定される。計測可能な東西壁間長は2.8m、床面までの残存深度は25cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体はV a層土とみられるが、V b層およびVI層土を多く含むため明るみをもつ。また床面上や壁際にVI層土のブロック層が点在するため、床面や壁面の識別が難しかった。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は概ね平坦に整っており、後述する炉の周辺では若干の硬化が認められた。壁面は床面縁部から自然に連続し内弯・外傾して立ち上がっている。柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕床面上から2基の焼土が検出された（炉a・炉b）。炉aは50×38cm、炉bは50×28cmの不整楕円形を呈し、両者は北東-南西方向に連なっている。焼土の厚さは5cm前後。にじんのような弱い焼成である。上面には周囲の床面から連続して若干の硬化が認められる。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉か。

〔その他の所見〕北東部に重複する「攪乱」はVI層土ブロックを主とするもので、精査段階においては遺構構築以前の自然作用によるものと考えていた。しかしその複数検出された他の早期住居跡において類似する土層が埋土の一部をなすことが判明した。炉の位置等を勘案すれば、本住居跡の本来のプランは、「攪乱」とした範囲も含む楕円形を呈するものである可能性が高い。

〔備考〕東半部を平成21年度に精査し、現道の通行確保のため未着手だった西半部を平成22年度に精査した。

〔出土遺物〕敲磨器類（2601・2645・2710）。

RA18竪穴住居跡（第55図、写真図版26）

〔位置・検出状況〕II A 4 j グリッド付近に位置する。同地点のV層の掘り下げを行ったところ、土器片・炭化物が集中する範囲として認識された。サブトレンチ断面に壁面の立ち上がりが見え、さらにV b層上面で平面プランが把握されたことから、住居跡と認定し精査着手した。

〔規模・形状〕V a層を段階的に掘削するトレンチ調査の際に遺構北西部の壁を失っている。残存部から、本来の形態は概ね3.5m程の円～楕円形を呈するものと思われる。残存状態の良い東壁付近における床面までの深度は30cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体はV a層類似の黒褐色土で、床面を覆う埋土下半部にはVI層土の混入がみられ木炭粒が目立つ。この上位には均質な黒褐色土が堆積している。廃絶後自然の流入土によって埋没したものと理解される。

〔壁・床面・柱穴など〕西に向かって下る周辺の自然傾斜に伴って、東側ほど壁の残りが良く、逆に西側では大きく流失している。断面に観察される壁の立ち上がりは垂直に近くしっかりしているが、精査時には壁面と埋土の境界が判然としなかった。床面はほぼ平坦で、硬化部も散見されるが全体に

小起伏が目立つ。内部からは柱穴状ビットPPA100～104が検出されたが、本住居への帰属が明らかなものとは特定できなかった。

〔炉跡〕西部の壁面に接して複式炉1基が設けられている。全長110cm、幅80cm。東側（住居内側）に方形の石囲部（40×50cm）をもち、西側（壁側）に前庭部（70×80cm）が連続する。石囲部は径15cm前後の礫を周囲に配したもので、南辺部は深鉢胴部（口縁部・底部を欠く）が内部に向けて開口するよう斜めに埋設されている。内部は床面より10cmほど低く全体に被熱赤変している。埋設土器も同様に二次的な被熱が著しい。土器の外面に接する土にも相当程度の赤変がみられ、土器内部には廃絶後に流入したと思われる土が堆積していることから、使用時には土器内は開口した状態にあったと推測される。前庭部は石囲部と同様、床面から10cm前後掘り下げられている。北縁に礫が配されているほか、南縁にも抜石痕とみられる小穴が並ぶことから、周縁を礫に囲まれていた可能性が高い。底面は概ね平坦で、石囲部との境界付近に薄い被熱痕跡が認められた。炉の内部や付近の床面には、埋設土器の一部の破片や炉の構築に用いられたと思われる被熱した礫、焼土ブロックなどが飛散している様子が観察されることから、廃絶に伴い意図的な破壊が行われた可能性がある。

〔重複〕RA10に切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代中期末葉と判断される。

〔出土遺物〕土器（182～190）〈第206・207図、写真図版158〉。

石鏝（1553・1899）。

RA19竪穴住居跡（第56図、写真図版27）

〔位置・検出状況〕南東部、II A10 I グリッド付近に位置する。VI層上面において、V b層類似の褐色土の不鮮明な広がりとして認識。内部に土器片・剥片等の遺物の混入が認められたことから遺構と推定し精査着手した。

〔規模・形状〕4.7×2.9mの長楕円形を呈する。床面までの残存深度は30cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体は黒褐～暗褐色土である。土層断面には、壁際から順に埋没した様子が認められる。上部ほど黒味が強く、逆に壁際や床面付近ではVI層との識別が困難なほどに脱色している（関連所見後述）。南端部埋土中位（3層上面）からは径5～15cmほどの円礫と剥片、そして焼土が壁外から流入したような状態で集中して検出された。住居廃絶後の付近での石器製作行為に関わる痕跡と考えられる。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は概ね平坦だが外側に向かって徐々に高くなり、壁は床面との境界が不明瞭のまま内弯してなだらかに立ち上がる。床上面は緻密で埋土との境界は比較的明瞭だが、著しい硬化部はみられない。床面の南部からは4個の柱穴状ビット（PPA105～108）が検出されたが、本遺構との関わりについては不明である。

〔炉跡〕床面の中央部に住居主軸上に並ぶ2基の焼土が検出された（北側焼土80×40cm、南側焼土35×20cm）。焼土の厚さは5cm弱で、滲んだようなやや弱い赤変である。焼土の付近はわずかに床面よりも低くなっている。炉内とその周辺には微細な剥片の出土が目立ち、付近での石器製作行為を示唆している。また炉内からは炭化したクルミ片が出土している。同様のクルミ片は付近の床面からも出土している。このクルミ片を放射性炭素年代測定（AMS）に供したところ、8030±40yrBPという測定値を得た（→附編1(1)放射性炭素年代測定 試料番号002、測定番号IAAA-92966）

〔重複〕RA29を切り、RF19・RF26に切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉～後葉とみられる。

〔その他の所見〕本遺構の埋土は、特に壁際において、時間の経過とともに色調が徐々に変化（わずかに黒味を帯び始める）現象が認められた。このため一旦壁と判断した面を、翌日には再び掘り広げる必要が生じ、プランの確定には時間を要した。これは縄文時代早期の他の遺構にも共通する現象であり、色調のみでは安易に埋土を識別できないため、他の性状を考慮に入れながら慎重に解釈することが求められた。本住居跡では、壁面下部に表れたVI層下部が埋土に比して密であり、これをもとに見出した立ち上がりプランと認定した。

〔出土遺物〕土器（191～212）〈第207・208図、写真図版159・160〉。

尖頭器（1504）、石鏃（1554～1557・1900）、石匙（2001）、筥状石器（2110・2111）、磨製石斧（2339）、敲磨器類（2398）、敲磨器類（2555・2646～2649・2724・2748）。

RA20竪穴住居跡（第57・58図、写真図版28）

〔位置・検出状況〕南西部、II A 7 k グリッドに位置する。V b 層上面において比較的中明瞭な暗褐色土の不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕図示したプランは直径約6.0m略円形を呈するが、中央部をトレンチで破壊されているため、本来の形状が異なる可能性がある（関連所見後述）。床面までの残存深度は50cm前後。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体は黒褐色土である。断面の観察によれば、壁際から順に堆積が進み埋没したと思われる。上～中部の埋土は黒味が強くV a 層に似ている。土器片等の遺物はその下位暗褐色土層に多い。

〔壁・床面・柱穴など〕住居の内部は碗状に凹み、床面中央から外側に向かって徐々に高くなっている。壁は床面との境界が不明瞭のまま内湾してなだらかに立ち上がる。床上面は緻密で埋土との境界は比較的中明瞭だが、著しい硬化部はみられない。後述する炉付近は一段深くくなっている。プラン内からはPPA109・110をはじめ複数の柱穴状ピットが検出されているが、本遺構にともなう柱穴が否かは不明である。

〔炉跡〕床面のほぼ中央部からいぶき色調の焼土1基が検出されている。平面形は68×50cmのほぼ楕円形を呈する。焼土の厚さは15cm前後。上面の硬化は認められない。焼土上面に散見された炭化物粒を放射性炭素年代測定（AMS）に供したところ、8060±40yrBPという測定値を得た（→附編1(1)放射性炭素年代測定 試料番号001、測定番号IAAA-92965）。断面の検討によれば、焼土付近は一旦掘りくまわれている可能性がある。

〔重複〕RA11・RA12に切られている。また床面からRD38が検出されたが、先後関係は明らかでない。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉か。

〔その他の所見〕炉跡の配置から推定される主軸方向を考慮すると、断面A-A'付近を長軸とする楕円形プラン（RA19に類似か）を想定することができそうである。この場合、断面B-B'に見えるはずの西壁の立ち上がりはトレンチによって失われているため確認できなかった。断面B-B'ではトレンチの東西両脇に渡り3層が連続するような表現となっているが、西側に埋土の類似する住居が重複していて、これを連続して掘り上げてしまった可能性がある。

〔出土遺物〕土器（213～236）〈第209～211図、写真図版160～162〉。

石鏃（1558～1565・1770・1771・1781・1901・1902・1962）、筥状石器（2112）、敲磨器類（2399～2404・2556・2602・2650～2652・2711・2725・2749）、自然礫（2824）。

R A21 竪穴住居跡 (第58・59図、写真図版29)

〔位置・検出状況〕南東部、Ⅱ A11n グリッドに位置する。V b層上面において、概ね楕円形を呈する暗褐色土範囲として認識された。

〔規模・形状〕3.6×3.2mの概ね楕円形を呈するものと思われるが、南東部が木痕等に攪乱され壁を失っている。床面までの残存深度は20cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b層土に類似するにぶい黄褐色土を主体とする。炉の上位にあたる地点では、焼土の赤味が埋土に滲んだような状況が観察された(3層)。

〔壁・床面・柱穴など〕断面観察によれば本来床面はほぼ平坦に整っていたと思われるが、後世の木根攪乱等による凹凸が著しい。斜面上方側に当たる北側の壁はやや外傾して直線的に立ち上がっている。南東部の壁は削平・攪乱により失われている。本遺構に伴う可能性がある柱穴状小穴としては、床面中央の焼土に隣接する位置にPPA111が検出されている。

〔炉跡〕床面中央のやや南寄りの位置に焼土1基が検出されている。平面形は46×40cmのほぼ楕円形を呈する。焼土の厚さは14cm前後。上面の硬化は認められず、赤変もにぶいことから、被熱の度合いが弱いことが推測される。

〔重複〕RD20及び複数の柱穴状ピットに切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉か。

〔出土遺物〕土器(237～242)(第211・212図、写真図版162)。

石匙(2002)。

R A22 竪穴住居跡 (第59図、写真図版30)

〔位置・検出状況〕南西部、Ⅱ A12 j グリッドに位置する。V b～VI層上面において、RD09の周囲に広がるやや濁った褐色土範囲として検出された(関連所見後述)。

〔規模・形状〕3.0×2.4mの概ね楕円形を呈する。床面までの残存深度は最大40cm程度である。

〔埋土・堆積状況〕V b層類似の褐色土が主体である。部分的にVI層のブロックを含む。中央部にRD09とした暗褐色土の堆積部分が重複する(関連所見後述)。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は密で平坦に整っている。硬化部は特に見られない。斜面上方側ではやや外傾して直線的に立ち上がる壁が残存する。柱穴等、付属する他の掘り込みは見られない。

〔炉跡〕なし。

〔重複〕埋土の上部をRD09が切っている(関連所見後述)。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉か。

〔その他の所見〕上述のとおり、本遺構はRD09の周囲に観察された、やや濁った褐色土の広がり精査したものである。RD09の精査では埋土の主体である暗褐色土を掘り上げたところで完掘とみなしているが、RD09と本住居跡の底面が同レベルとなっている点や、RD09の周囲が同心円状に掘り広がったことを考慮すれば、両者が同一遺構である可能性は高いものと考えられる。ただし、本住居跡のプランに対し、RD09とした暗褐色土主体土層の入り方はいささか唐突であり、堆積過程の解釈は難しい。

〔出土遺物〕土器(243)(第212図、写真図版162)。

石鏝(1772)。

R A23 竪穴住居跡 (第60・61図、写真図版31)

〔位置・検出状況〕南西部、Ⅱ A10 l グリッド付近に位置する。V b層上面で不明瞭な褐色土範囲と

して検出された。

〔規模・形状〕概ね楕円形を呈するものと思われるが、西部をRA24など他の遺構に切られ全体の形状は不明となっている。東西に長軸を有する楕円形と見なせば、幅は約2.9m、計測可能な最大値は3.3mである。床面までの残存深度は20cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体はV b層類似の褐色土である。全体に一律な単層であり密に締まっている。重複・近接するRA24・RA25の埋土に比して、柳沢軽石（YP）の混入が少ない点の特徴である。〔壁・床面・柱穴など〕床面は不規則な凹部をもつがおおむね平坦である。目立った硬化部は認められない。残存部の壁は床の縁部から連続し、内湾しながら立ち上がる。プラン内には数個の柱穴状ピットが見られるが、本住居に帰属するものを特定することは出来なかった。

〔炉跡〕検出されなかった。

〔重複〕RD25・RA14・RA15・RA24に切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉か。

〔出土遺物〕土器（244、245）〈第212図、写真図版162〉。

敲磨器類（2557）。

RA24竪穴住居跡（第60・61図、写真図版32）

〔位置・検出状況〕南西部、II A10 k グリッド付近に位置する。V b層上面で不明瞭な暗褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕楕円形あるいは隅丸方形を呈するものと思われるが、北部をRA15やRD25に切られ全体の形状は不明となっている。計測可能な東西長は約2.5m、南北の残存長は2.0mである。床面までの残存深度は18cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体はV層類似の暗褐色土である。壁際の一部に崩落土とみられるVI層土ブロック層が観察されるほかは、全体に一律で密に締まっている。重複・近接するRA23・RA25の埋土に比して堆積土の色調はやや暗く、炭化物粒を含んでいる。

〔壁・床面・柱穴など〕床面はおおむね平坦であるが、中央に位置する炉部分が周囲より一段くぼんでいる。目立った硬化範囲は認められない。壁は床の縁部に連続し、内湾しながら立ち上がる。プラン内には数個の柱穴状ピットが見られるが、本住居に帰属するものを特定することは出来なかった。

〔炉跡〕床面中央に楕円形のくぼみ（80×70cm、深さ10cm）をもち、その底面にごく弱い被熱赤変範囲が認められた。

〔重複〕RA23を切り、RD25・RA15に切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉か。

〔出土遺物〕土器（246～256）〈第212図、写真図版163〉。

石鏃（1903）、笥状石器（2113）、敲磨器類（2727）。

RA25竪穴住居跡（第60・61図、写真図版33）

〔位置・検出状況〕南西部、II A10 j グリッド付近に位置する。V b層上面で不明瞭な暗褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕不整の楕円形あるいは隅丸方形を呈するものと思われる。南北長約3.2m、東西長約2.6m。床面までの残存深度は20cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体はV b層類似のぶい黄褐色土である。柳沢軽石（YP）の混入が顕著

で、固くしまっている。

〔壁・床面・柱穴など〕床面はおおむね平坦である。目立った硬化範囲は認められない。壁は床の縁部に連続して内弯しながら立ち上がる。本住居に帰属する柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕検出されなかった。

〔重複〕PPB396・PPB400に切られている。このほか、床面からRD31が検出されているが、先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉か。

〔出土遺物〕土器（257・258）〈第213図、写真図版163〉。

石鏃（1734）。

RA26竪穴住居跡（第62図、写真図版34）

〔位置・検出状況〕南東部、II A10oグリッド杭付近に位置する。V b層上面で不明瞭な暗褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕不整の楕円形あるいは隅丸方形を呈するものと思われる。東西長約3.0m、南北長約2.4m。床面までの残存深度は18cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体はV b層類似の褐色土が主体である。柳沢軽石（YP）と白色の浮石の混入がみられるが、炭化物は認められない。

〔壁・床面・柱穴など〕遺構内の堆積土と壁面に現れたV b層との識別は難しく不明瞭であった。床面はおおむね平坦である。目立った硬化範囲は認められない。プラン内には数個の柱穴状ピットが見られるが、本住居に帰属するものを特定することは出来なかった。

〔炉跡〕検出されなかった。

〔重複〕RD26・RF27・PPB471に切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期前葉～中葉か。

〔出土遺物〕石匙（1989）、笥状石器（2114）、敲磨器類（2405）。

RA27竪穴住居跡（第63・64図、写真図版35）

〔位置・検出状況〕南西部、II A9iグリッドに位置する。V b層上面において黒褐色土を含む濁った暗褐色土の略円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕RD27・RD28及び木根攪乱により、壁の多くの部分が失われているが、残存部より3.5×2.7mの概ね方形または台形を呈するものとみられる。床面までの残存深度は20cm前後。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体はV b層起源とみられる褐色シルト（⑤層）である。中央部から北側にはやや赤みを帯びている暗褐色シルト層（③層）、ほぼ中央（A-A'中央）には小規模な廃棄焼土層（④層）が確認できる。部分的に床面近くに達する①・②層は、後世の木根攪乱の可能性が高い。

〔壁・床面・柱穴など〕床面には木根等による小規模な凹凸が目立つが、比較的残りの良い北西部では平坦面の広がり認められる。緻密であるが特別に硬化した範囲はみられない。壁は床面に連続しやや内弯してなだらかに立ち上がる。柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕なし。

〔重複〕RD27・RD28に切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期前葉～中葉か。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土していない。

RA28竪穴住居跡（第63・64図、写真図版36）

〔位置・検出状況〕南西部、II A10 i グリッドに位置する。VI層上面において、RA27のプランの南西部に接する褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕2.5×2.2mの隅丸長方形を呈する。床面までの残存深度は24cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体はV b層起源とみられる締まりを欠く褐色土である。根拠攪乱等の作用により、上部には黒褐色土塊の混入が目立つ。

〔壁・床面・柱穴など〕床面はおおむね平坦に整っている。壁は床面から連続し内湾してなだらかに立ち上がるが、斜面下方がわの南西部では大きく流失している。壁際からは4個の柱穴状小ピットが検出された。ピットの埋土はフカフカと柔らかい褐色土の単層である。

〔炉跡〕なし。

〔重複〕RA27・RD28と接するが、重複部分の攪乱により、先後関係は不明となっている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期前葉～中葉か。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土していない。

RA29竪穴住居跡（第65図、写真図版37）

〔位置・検出状況〕南東部、II A11m グリッドに位置する。尖頭器の出土を契機に、VI層上面において周囲より締まりを欠く褐色土の楕円形範囲として認識された。

〔規模・形状〕2.8×2.3mの楕円～隅丸長方形を呈する。床面までの残存深度は40cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体はVI層起源の褐色土である。各層はほぼ水平に堆積しており、堆積過程を解釈することは難しい。3層がやや締まりを欠き下面との層界が比較的把握しやすかったことから床面と推定したが明らかではない。

〔壁・床面・柱穴など〕床面と想定される3層下面は若干の凹凸をもつもののほぼ水平である。壁面は外傾して立ち上がる。本住居に伴うことが明らかな柱穴は検出されていない。

〔炉跡〕なし。

〔重複〕本遺構はRA19の下位から検出されている。検出面と埋土の様相からRA19より古い段階に位置づけられる。

〔遺構の時期〕層位的には縄文時代早期中葉以前に位置づけられる。

〔その他所見〕明確に遺構と認定するには根拠に乏しい事例である。

〔出土遺物〕土器（259）（第213図、写真図版163）。

尖頭器（1499）。

RA30竪穴住居跡（第66図、写真図版38）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 9 o グリッド付近に位置する。V b層上面において不明瞭な暗褐色土の不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕不整の楕円形あるいは隅丸方形を呈するものと思われる。4.0×3.8mの不整な楕円～隅丸方形を呈する。床面までの残存深度は18cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体はV a～V b層類似の暗褐色土である。

〔壁・床面・柱穴など〕床面はおおむね平坦である。目立った硬化範囲は認められない。壁は床の縁部に連続して内湾しながら立ち上がる。本住居に伴うことが明らかな柱穴は検出されていない。

〔炉跡〕なし。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉～前期初頭か。

〔出土遺物〕土器（260～263）（第213図、写真図版164）。

敲磨器類（2406）。

RA31竪穴住居跡（第67図、写真図版39）

〔位置・検出状況〕南東部、II A10n グリッド付近に位置する。V b層～VI層の面的な掘り下げを行った際に、遺構埋土とみられる土層が断面に確認されたことから精査に着手した。

〔規模・形状〕周辺土層の面的な掘り下げの際に、大半の部分を失っている。図示した平面形は土層断面から推測したものである。平面形は1辺3.2m程の隅丸方形を呈すると思われる。床面までの残存深度は約20cmである。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体はV b層類似の褐色土である。V a層土やVI層土のブロックを含む。

〔壁・床面・柱穴など〕床面はおおむね平坦である。目立った硬化範囲は認められない。壁は床の縁部に連続して内湾しながら立ち上がる。北壁及び東壁際に柱穴が検出された、本来帰属するものがどれかは判別できなかった。

〔炉跡〕なし。

〔重複〕南東部にRA26に切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期前葉～中葉か。（放射性炭素年代測定値 9890±50yrBP）

〔出土遺物〕土器（264）（第214図、写真図版164）。

RA32竪穴住居跡（第68図、写真図版40）

〔位置・検出状況〕南西部、II A8k グリッド付近に位置する。V b層上面で不明瞭な暗褐色土の略円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕3.6×3.3mの概ね楕円形を呈する。床面までの残存深度は25cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV a層類似の暗褐色土を主体とする。埋土の中部から床面にかけては、V b層及びVI層土のブロック混入が顕著で黄味が強い。埋土は全体的に締まりを欠き、ボソボソとしている。このため床面及び壁面の判別は比較的容易であった。

〔壁・床面・柱穴など〕床面はほぼ平坦に整っている。壁はやや外傾して内湾しながら立ち上がる。床面からは柱穴状小穴PPA120～125が検出されているが、本来的に本住居に伴うか否かは判然としない。

〔炉跡〕なし。

〔重複〕北壁に重複しているRD18に切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉～前期初頭か。

〔出土遺物〕土器（265～268）（第214図、写真図版164）。

石鏝（1572）。

RA33竪穴住居跡（第69図、写真図版41）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A1t グリッド付近に位置する。V b層上面で比較的明瞭な黒褐色土の不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕4.2×3.8mの楕円形を呈する。斜面下方の西壁側が流失・削平を受けている。床面まで

の残存深度は22cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体はIV層相当の暗褐色土で、床面直上から中部にかけて一様に堆積する。この上部には、Ⅲ層土相当土（1層）が斜面上方側から西壁を削るように堆積している。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は平坦に整っている。東半部はVI層が床面を構成するが、西半部では下に重複するRA36埋土の黒色土が床面に露出している。壁はやや外傾し内湾しながら立ち上がる。上述のとおり斜面下方にあたる西壁は流失し残存しない。柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕床面中央のやや西寄りの位置に1基検出された。平面形は70×62cmの楕円形を呈する。北縁部に長さ20cm弱の板状礫が並べて配された状態で残存していた。床面上からはこれに類する被熱礫が点在しており、本来は全周していた可能性が高い。炉内は床面から5cm程凹み、厚さ12cm前後の焼土が生成している。焼土上面に硬化部は認められない。内部の掻き出しが行われた結果かも知れない。

〔重複〕RA36・RB04を切っている。

〔遺構の時期〕層位的事実及び埋土の特徴等から、縄文時代後期初頭～前葉が想定される。

〔その他所見〕全体的にはRA34に良く似ている。

〔出土遺物〕土器（269～271）〈第214図、写真図版164〉。

鐔形土製品（1169）。石皿（2355・2356）。

RA34竪穴住居跡（第70図、写真図版42）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 1 r グリッド付近に位置する。V b 層上面において焼土が検出され、これが帰属すべき住居跡本体を検索したところ、斜面上方側にプランの一部と思われる黒色土範囲が検出されたことから精査に着手した。

〔規模・形状〕斜面下方が流失しているため全体形状が不明であるが、3.6×3.2mの概ね楕円形の範囲が残存している。床面までの残存深度は5～8cmである。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV a 層土に類似する黒褐色土を主体とする。南西部では床面にVI層土ブロックを含む土層の堆積がみられる。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は概ね平坦に整うが、南半～西端部では後世の根掘乱によって乱され凹凸が目立つ。壁は弱く内湾し外傾して立ち上がる。全体に斜面下方の西側が流失・削平の影響を受けている。遺構内から柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕床面の西寄りの位置に1基検出された。平面形は54×46cmの楕円形を呈する。床面から被熱礫2点が出土しており、本来はこれらが周縁に配された石囲炉だった可能性がある。焼土の厚さは6cm前後。上面に硬化部は認められない。全体的に根掘乱の影響が大きく残存状態は良くない。特に南側は土坑状の落ち込み（掘乱）によって大きく壊されている。

〔重複〕RA36を切っている。

〔遺構の時期〕層位的事実及び埋土の特徴等から、縄文時代後期初頭～前葉が想定される。

〔その他所見〕全体的にはRA33に良く似ている。

〔出土遺物〕土器（272）〈第214図、写真図版164〉。

棒状石製品（2801）。

RA35竪穴住居跡（第71図、写真図版43）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 1 t グリッド付近に位置する。V b 層上面で不明瞭な暗褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕斜面下方が流失しているため全体形状が不明であるが、2.9×2.5mの概ね楕円形の範囲が残存している。床面までの残存深度は10cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はⅣ～Ⅴa層土に類似する暗褐色土の単層である。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は平坦に整っている。縁部がわずかに高まり、壁が不明瞭なまま立ち上がっている。本来の壁面がさらに外側にあった可能性も考慮するべきである。全体に斜面下方の西側が流失・削平の影響を受けている。遺構内から柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕床面の西寄りの位置に1基検出された。平面形は96×54cmの楕円形を呈する。周囲の床面には被熱礫数点が点在しており、本来はこれらが周縁に配された石囲炉の可能性がある。焼土の厚さは10cm前後。上面に硬化部は認められない。焼土範囲の下位に掘方のような再堆積層が認められた。

〔重複遺構〕RD64と重複するが、先後関係を示す層位的事実は確認されていない。

〔遺構の時期〕層位的事実及び埋土の特徴等から、縄文時代後期初頭～前葉が想定される。

〔その他所見〕RA33・RA34に似ている。

〔出土遺物〕土器（273）〈第214図、写真図版164〉。

RA36竪穴住居跡（第72・73図、写真図版44）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 1 s グリッド付近に位置する。Ⅴb～Ⅵ層上面で明瞭な黒色土の長方形範囲として検出された。

〔規模・形状〕7.1×4.5mの長方形を呈する。床面までの残存深度は60cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面直上は広くⅥ層土の崩落流入層（4層）に覆われている。特に斜面上方にあたる北東側に厚い。壁際ではこの下位に、上面が硬化したⅤa層類似黒色土の薄層（5層）が観察される。廃絶前には床面の一部であったと考えられる。その後はⅤa層主体の流入土（2・3層）による堆積が進み、埋没を終えたものとみられる。最上位に部分的に見られる1層は、本遺構に重複する方形柱穴列RB03・RB04に伴う掘り込み（掘方）の可能性が高い。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は平坦に整っている。ほぼ全面的に硬化し地山本来の色調に比して明るく白味を帯びている。壁はわずかに外傾してほぼ直線的に立ち上がり、上部が崩落のため開いている。柱穴については、床面および壁際において入念な検索を行ったが検出されなかった。

〔炉跡〕焼土及び燃焼痕跡は検出されなかった。

〔重複〕RA33・RA34・RB03・RB04、RG01に切られている。

〔遺構の時期〕床面出土木炭粒の放射性炭素年代測定により、5450±30yrBP（縄文時代前期前葉頃）との結果を得ている（→附編1(1)）。測定結果は重複遺構との先後関係や基本層序との層位関係性に矛盾しない。

〔出土遺物〕石匙（2005・2011）、砲状石器（2115）、敲磨器類（2407・2408・2750）、自然礫（2827）。

RA37竪穴住居跡（第74図、写真図版45）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 4 s グリッド付近に位置する。Ⅵ層上面において明瞭な黒褐色土の方形範囲として検出された。

〔規模・形状〕2.8×2.8mの隅丸方形を呈する。床面までの残存深度は45cm前後である。壁・床ともに良く整えられた方形の掘り込みである。

〔埋土・堆積状況〕底面直上はガッチリと締まった黒褐色土の薄層に広く覆われている（4層）。Ⅴa層土みられるこの層は、居住の過程で内部に徐々に堆積し、その上面が床面として踏みしめられたも

のであろう。斜面上方に当たる北・東側では、この上位にVI層土を多く含む壁崩落層が厚く堆積している（3・5層）。その後は主に斜面上方から流入したVa層土（1・2層）の堆積が進み埋没を終えたものとみられる。

〔壁・床面・柱穴など〕上述の通り、4層上面が最終的な床面と思われるが、掘方底面である4層下面においても、削り出された地山土が白色化し堅微な平坦面を形成している。壁はわずかに外傾して直線的に立ち上がっている。全体が整った箱形となっている印象である。柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕焼土及び燃焼行為の痕跡は検出されなかった。

〔重複〕RA38・RA52を切り、RB02・RG04に切られる。

〔遺構の時期〕縄文時代早期末～前期前葉頃を想定したい。

〔その他所見〕全体が整った箱形を呈する点、床面に硬化・白色化が認められる点は、RA36に類似する特徴である。

〔出土遺物〕土器（274～278）〈第214図、写真図版164〉。

石匙（2006）。

RA38竪穴住居跡（第75図、写真図版46）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 5 r グリッド付近に位置する。RA37の精査において西側に連続する不明瞭な暗褐色～褐色土範囲として認識されたものである。

〔規模・形状〕4.5×3.5mの楕円～隅丸長方形を呈するものと思われる。東側でRA37と、北側でRB02と重複し壁を失っている。床面までの残存深度は25cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はVb層土に類似する褐色～にぶい黄褐色土を主体とする。埋土は一様であり、床面及び壁面における層界は不明瞭であった。RA37の埋土から連続する不整形範囲として掘削をすすめたところ、結果的に住居跡と判断するに至ったものである。このため堆積層の、図化・撮影等ができなかった。

〔壁・床面・柱穴など〕床面はほぼ平坦に整い、壁は内湾し外傾して立ち上がる。他の住居と重複する部分は壁が失われ、残存しているのは主に南壁である。本遺構に伴う柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕なし。

〔重複〕RA37・RB02に切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉と思われる。

〔出土遺物〕土器（279）〈第215図、写真図版165〉。

敲磨器類（2409・2654・2655）。

RA39竪穴住居跡（第76図、写真図版47）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 6 n グリッドに位置する。Va～Vb層上面において検出した焼土の周囲に、硬化した略円形範囲が検出されたことから、住居跡の床面である可能性が高いと判断し精査に着手した。

〔規模・形状〕壁が残存しないため、本来の形状は不明である。硬化面の範囲は2.1×2.0mの概ね円形を呈する。炉跡周辺がごくわずかに低くなっている。

〔埋土・堆積状況〕床面はVb層に類似する暗褐色土（一部、下位のRA42埋土上部）が硬化したもので、その上位に、Va層土とみられるごく薄い黒褐色土が堆積している。床面からは縄文時代早期とみられる土器細片とともに微細剥片の散布が認められた。

〔壁・床面・柱穴など〕硬化範囲の上面は概ね平坦に整っている。壁は残存せず、柱穴も検出されなかった。

〔炉跡〕平面形は径34cmの略円形を呈する。焼土の厚さは4cmほどである。上面の硬化は認められない。赤変は鮮やかであるが、全体的に根攪乱の影響を受け残存状態は不良である。

〔重複〕下位のRA42埋土を被覆している。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉～前期前葉頃を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RA40竪穴住居跡（第77・78図、写真図版48）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 9 n グリッド付近に位置する。VI層上面で不明瞭な暗褐色土範囲が確認され、さらにその周囲に褐色土の広がりも認められたことから、この範囲全体が遺構となる可能性のあるものとみなし、精査に着手した。

〔規模・形状〕掘り込みの範囲は6.6×4.8mの概ね楕円形となっているが、東西2棟が重複しグルマ形を呈するようにも見える。床面までの残存深度は16cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面上に初めに堆積しているのはVI層由来の褐色土（2層）である。壁際に厚く、中央部ではやや急に層厚を減じる。この上位にはV a層と見られる黒褐色土（1層）が流入し埋没を終えている。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は西側が低く東側が一段高い。それぞれが整った平坦面となっている。壁は床の縁部から連続し、わずかに内弯してなだらかに立ち上がる。床面上からは複数の柱穴状ピットが検出されているが、本遺構への帰属が明らかなものは特定できなかった。

〔炉跡〕長軸上の西寄り位置から焼土1基が検出されている。平面形は38×32cmの不整形を呈する。焼土の厚さは8cm前後。上面の硬化は認められず、赤変もにぶいことから、被熱の度合いが弱いことが推測される。また、長軸上の中央付近からわずかに東寄りのところからは、不整形円形（120×94cm・深さ6cm）のごく浅い落ち込みが検出された。炉的機能も想定されるが燃焼行為の真跡は見いだされなかった。

〔重複〕RD58と重複するが先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕出土土器の年代観及び堆積状況から、縄文時代早期中葉と思われる。

〔その他所見〕先述のとおり2棟以上の重複が疑われるが、平面形、土層断面、床面の段差を合理的に説明できるプランに分離することは出来なかった。

〔出土遺物〕土器（280～284）〈第215図、写真図版165〉。

石錐（2088）、敲磨器類（2751）。

RA41竪穴住居跡（第79・80図、写真図版49）

〔位置・検出状況〕南西部、II A 7 l グリッド付近に位置する。V b～VI層上面において、明瞭な黒褐色土とその周囲に広がる褐色土からなる楕円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕6.2×4.5mの楕円形を呈する。床面までの残存深度は22cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面上に初めに堆積しているのはVI層由来の褐色土（3層）である。混入物がほとんどないために、地山（VI層）との識別は非常に困難であったが、層中にわずかに土器を含むことやVI層に比して若干締まりを欠く点などから、埋土と判断したものである。壁際に厚く、中央部に向かって層厚を減じており、この上位にV a層と見られる黒褐色土（1・2層）が流入して埋没を終え

ている。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は概ね平坦に整っている。壁は床の縁部から連続し、内湾しながらなかなか立ち上がる。柱穴は床面及び壁面から複数検出され、これらのうち本遺構に帰属する可能性の高いもの24個を抽出した（PPA161～184）。特に、壁面において一定間隔を持って検出された柱穴は、いずれも腕形～掃鉢形の掘方を持ち、開口部を内側に傾けて配置されている。柱穴の底部は急激に狭まるか、または一段深い小穴を有する場合が多く、あたかも基部先端が杭先状に突った柱材を設置した痕跡のように思われる。これらの柱穴は、壁際に厚く堆積する褐色土（3層）の上面で検出されたものが多く、2層の明瞭な黒色土範囲の外側に位置したことから、精査初段階においては住居の壁外に配置されたものと判断していた。その後3層の掘り上げによって、壁面上部を斜めに掘り込んだピットであることが確認された。

〔炉跡〕長軸上、床面中央のわずかに南寄りの位置に焼土1基が検出されている。概ね楕円形のごく浅い掘り込み（68×52cm、深さ5cm）の内部に、厚さ約3cmの焼土が生成している。上面の硬化は認められず、赤変も鈍いことから、被熱の度合いが弱いことが推測される。この焼土を伴う凹部の周縁には径20cm前後の小穴が集中し、礫または杭等の痕跡にも思われるが不明である。なお、この炉跡を3層が覆った後に、ほぼ同じ地点で再び焼土が形成されていることが確認された。床面上の炉跡と直接的な関係はないと思われる。堆積途上に内部で焼土が形成される例や、壁際において床面より一段高い面に焼土が形成される例は、本遺跡においても他に数例が確認されており、これらに類するものと考えられる。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕出土土器の年代観及び土層の堆積状況から、縄文時代早期中葉のものと考えられる。

〔出土遺物〕土器（285～292）〈第215図、写真図版165〉。

鐔形土製品（1170）。石鏃（1573～1576・1773・1807・1904）、笥状石器（2116）、石皿（2357・2358）、敲磨器類（2410）

南西部では壁下部に貼りつくように比較的大きな土器片がまとまって出土している。また、西半部の3層上面では拳大の礫が複数投げ入れられたような状態で出土した。

〔その他の所見〕壁際に厚く堆積するⅥ層土再堆積層が床面中央で極端に薄くなり、Ⅴa層土が中央部を上から切り込んだように直接床面に接する堆積状況は、他のいくつかの住居跡にも共通する特徴である。

RA42竪穴住居跡（第81・82図、写真図版50）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 6 n グリッド付近に位置する。Ⅴb～Ⅵ層上面において、明瞭な黒褐色土とその周囲に不鮮明に広がる褐色土からなる不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕4.5×4.5mの略円形を呈する。床面までの残存深度は20cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面上に初めに堆積しているのはⅥ層由来の褐色土（3層）である。混入物がほとんどなく地山（Ⅵ層）に良く似るが、Ⅵ層に比して締まりを欠いており、壁・床との境界は硬度の差異によって識別が可能であった。3層の上位にはⅤb層類似の暗褐色土（2層）が堆積し、さらに最上部にⅤa層相当の黒色土（1層）が流入して埋没を終えたものと見られる。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は概ね平坦に整っている。壁は床の縁部から連続し、内湾しながらなかなか立ち上がる。柱穴は床面及び壁面から複数検出されている。これらのうち本遺構に帰属するものを抽出することは難しいが、壁際に配置されているもの（PPB731・962・977・978・991・1000・

1003等)は椀形の掘方もちやや内傾して開口する点や、底面に小穴を有する点など、RA41の柱穴に類似しており、可能性が高いものと思われる。

〔炉跡〕床面中央のわずかに西寄りの位置に焼土1基が検出されている。平面形は42×40cmの略円形を呈する。焼土の厚さは4cm前後。上面の硬化は認められず、赤変もにぶいことから、被熱の度合いが弱いことが推測される。

〔重複〕RA55を切り、RD51に切られている。

〔遺構の時期〕出土土器の年代観及び堆積状況から、縄文時代早期中葉と思われる。

〔出土遺物〕土器(293～305)〈第216・217図、写真図版166・167〉。

敲磨器類(2411・2762)。

炉跡に近接した中央付近から土器片と拳大の礫が出土している。床面よりやや浮いており、埋土3層の上面に相当する。

RA43竪穴住居跡(第83図、写真図版51)

〔位置・検出状況〕南東部、II A 7 o グリッド付近に位置する。VI層上面で不明瞭な褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕4.6×2.9mの概ね楕円形を呈するが、全体的に攪乱に侵されており、また精査においてもプランが不明瞭であったため、本来の形状は明らかでない。検出面から床面までの残存深度は14cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b～VI層土に類似する褐色土を主体とする。主に壁際付近の床面上に堆積する3 a層は上位層に比して締まりを欠き、縄文時代早期土器片を包含している。この上位はV a～VI層の再堆積層に被覆され埋没を終えている。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は概ね平坦に整っている。壁は床の縁部から連続し、内弯しながらなだらかに立ち上がる。柱穴は南西部の壁に沿って分布が見られるが、本遺構に帰属するものを特定することはできなかった。

〔炉跡〕なし。

〔重複〕東側でRA44と重複する。先後関係については明らかでない。

〔遺構の時期〕出土遺物の年代観および堆積状況から、縄文時代早期中葉と思われる。

〔出土遺物〕縄文時代早期中葉とみられる土器細片が出土している。

RA44竪穴住居跡(第83図、写真図版52)

〔位置・検出状況〕南東部、II A 7 p グリッドに位置する。VI層上面で不明瞭な褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕2.8×2.3mの不整な隅丸多角形を呈しているが、全体的に攪乱に侵されており、また精査においても終始壁が不明瞭であったため、本来の形状は明らかでない。検出面から床面までの残存深度は14cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b～VI層土に類似する褐色土を主体とする。床面直上に堆積する7層は、露出させた直後は区別がつかないほどVI層に似ている。空気に触れると時間をおいてから色調が暗く変化するため、その分をさらに掘り拡げるといった作業を繰り返した。その結果現れた硬度変換面を壁及び床面と判断した。7層の上位はV b層土に類似する褐色土(6層)が検出面までを埋めている。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は概ね平坦に整っている。壁は床の縁部から連続し、内弯しながらな

らかに立ち上がる。本遺構に帰属させうる柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕なし。

〔重複〕西側にRA43、北東部にRA48が重複する。先後関係については明らかでない。

〔遺構の時期〕埋土の堆積状況等から、縄文時代早期中葉頃を想定したい。

〔出土遺物〕縄文時代早期中葉とみられる土器細片が出土している。

RA45竪穴住居跡（第84図、写真図版53）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 5 p グリッド付近に位置する。VI層上面で不明瞭な褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕3.1×3.1mの隅丸方形を呈する。床面までの残存深度は14cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b～VI層土に類似する暗褐色～褐色土を主体とする。壁際で厚く床面を覆う3層は、露出させた直後はVI層と区別が付かないが、空気に触れると時間をおいて色調が暗く変化するため、その分をさらに掘り拡げるという作業を繰り返した。その結果現れた硬度変換面を壁及び床面と判断した。この上位に堆積するのはやや色調が暗いV b層土類似の暗褐色土（2層）である。本層は流入土と見られ、検出面までを埋めている。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は概ね平坦だが、自然地形に沿ってわずかに西に傾斜している。壁は床の縁部から連続し、内湾しながらならかに立ち上がっている。なお、北西隅・南西隅と南壁・北壁の上端に複数の柱穴が並んで検出された（PPB932・935・936・937・943・944・954・1007等）。竪穴本体との層位的な関係については確認できていないが、配置状況から本住居跡に伴う可能性があることを指摘しておきたい。

〔炉跡〕なし。

〔重複〕南縁部でRA46と重複するが、先後関係は定かでない。

〔遺構の時期〕埋土の堆積状況等から、縄文時代早期中葉頃を想定したい。

〔出土遺物〕縄文時代早期中葉とみられる土器細片が出土している。

RA46竪穴住居跡（第85・86図、写真図版54）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 5 q グリッド付近に位置する。VI層上面で不明瞭な褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕3.8×3.0mの楕円形を呈する。床面までの残存深度は26cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b～VI層土に類似する暗褐色～褐色土を主体とする。床面を最初に覆っているのはVI層土の再堆積層とみられる3層である。斜面上方の東壁側に厚く堆積している。露出させた直後はVI層と区別が付かないが、空気に触れると時間をおいて色調が暗く変化するため、その分をさらに掘り拡げるという作業を繰り返した。その結果現れた硬度変換面を壁及び床面と判断した。この上位に堆積するのはやや色調が暗いV b層土に類似する1～2層である。本層は流入土と見られ、検出面までを埋めている。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は概ね平坦だが、斜面上方にあたる北東側では若干床面が高く、わずかな段差を生じている。北東側では壁面の張り出しも認められることから、廃絶後にやや大きな崩落があったのかもしれない。その他の部分では、壁は床の縁部から連続し内湾してならかに立ち上がっている。内部からは数個の柱穴状ピットが検出されているが、帰属するものは判別できなかった。

〔炉跡〕住居に伴う炉は検出されなかった。なお、住居中央の埋土上部にみられる赤変部は、後世、

上位に形成されたRF46の痕跡であり、本住居とは関係しない。

〔重複〕南縁部でRA47を切っている。また北西部ではRA45と重複するが、先後関係は定かでない。

〔遺構の時期〕埴土の堆積状況等から、縄文時代早期中葉頃を想定したい。

〔出土遺物〕縄文時代早期中葉とみられる土器細片が出土している。

RA47竪穴住居跡（第85・86図、写真図版55）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 6 p グリッド付近に位置する。VI層上面で不明瞭な褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕3.7×3.4mの概ね隅丸方形を呈する。床面までの残存深度は22cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b～VI層土に類似する暗褐色～褐色土を主体とする。床面を最初に覆っているのはVI層土の再堆積層とみられる6層である。堆積範囲は壁付近に限られる。VI層との識別が困難である点は重複するRA46の3層と同様であり、精査の過程で現れた硬度変換面を壁及び床面と判断している。この上位に堆積するのはやや色調が暗いV b層土に類似する3～4層である。本層は流入土と見られ、検出面まで埋めている。西半部では4層上部から3層下面に礫の出土が目立った。西壁側から流入もしくは投棄されたような様相を呈する。

〔壁・床面・柱穴など〕床面はほぼ平坦に整っている。壁は床の縁部から連続し内湾してなだらかに立ち上がる。内部からは数個の柱穴状ピットが検出されているが、帰属するものを識別することは難しかった。帰属の可能性が高いのは、配置からみて北壁両端隅の2個か。

〔炉跡〕床面中央付近に焼土1基が検出されている。西部を攪乱に侵され原形は不明。径46cmの略円形を呈するものと思われる。赤変は鮮やかだが、焼土の厚さは3cm程度とごく薄い。

〔重複〕北縁部がRA46に切られている。また、南縁でRA48と重複するが先後関係は明らかでない。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉頃か。

〔出土遺物〕土器（306～311）（第217図、写真図版167）。

石匙（2007）、磨製石斧（2336）、石皿（2359）、敲磨器類（2412～2414・2728・2729）。

RA48竪穴住居跡（第87図、写真図版56）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 7 p グリッド付近に位置する。VI層上面で不明瞭な褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕2.3×1.9mの不整な楕円形に見えるが、東・西及び南壁が直線状を呈することから本来は方形に近いものであった可能性がある。床面までの残存深度は14cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b～VI層土に類似する暗褐色～褐色土を主体とする。南東側の壁際にVI層土の再堆積層（2層）、その上位にV a類似の暗褐色土（1層）が流入している。

〔壁・床面・柱穴など〕床面はほぼ平坦に整っている。壁は床の縁部から連続し内湾してなだらかに立ち上がる。内部からは数個の柱穴状ピットが検出されているが、帰属するものを識別することは困難である。

〔炉跡〕なし。

〔重複〕北縁部でRA47、南西部でRA44と重複するが、先後関係は明らかでない。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉頃を想定したい。

〔出土遺物〕縄文時代早期中葉とみられる土器細片が出土している。

RA49 竪穴住居跡（第87・88図、写真図版57）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 6 p グリッド付近に位置する。VI層上面で不明瞭な褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕3.5×2.7mの不整な楕円形に見えるが、東・西壁が直線状を呈することから本来は方形に近いものであった可能性がある。床面までの残存深度は16cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面上に初めに堆積しているのはVI層由来の褐色土（2層）である。壁際に厚く、中央部ではやや急に層厚を減じる。露出させた直後はVI層と区別が付かないが、空気に触れると時間をおいて色調が暗く変化するため、その分をさらに掘り上げるといった作業を繰り返した。その結果現れた硬度変換面を壁及び床面と判断した。この上位にはV a層と見られる黒褐色土（1層）が流入し埋没を終えている。

〔壁・床面・柱穴など〕床面はほぼ平滑に整っているが、わずかに西側に向かって傾斜している。壁は床の縁部から連続し内弯してなだらかに立ち上がる。帰属することが明らかな柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕なし。

〔重複〕北壁の一部がRD59に切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉頃を想定したい。

〔出土遺物〕縄文時代早期中葉とみられる土器細片が出土している。

RA50 竪穴住居跡（第88図、写真図版58）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 6 r グリッド付近に位置する。V b層上面で不明瞭な暗褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕壁上端の平面形は3.5×2.9mの不整な楕円形を呈するが、底面縁部は東・西及び北に角を持つように見えることから、本来形状は隅丸方形に近いものであった可能性がある。床面までの残存深度は30cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面全体がVI層土類似の黄褐色土（2層）に覆われ、その上位にやや暗いV b層相当土（1層）が流入している。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は概ね平滑に整うが、自然地形に沿って西側に向かって傾斜している。壁面は内弯しながら外傾して立ち上がっている。内部からは柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕なし。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉頃を想定したい。

〔出土遺物〕縄文時代早期中葉とみられる土器細片が出土している。

RA51 竪穴住居跡（第89図、写真図版59）

〔位置・検出状況〕北東部、I A 23 r グリッドに位置する。V b層上面において明瞭な暗褐色土の円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕2.7×2.6mの略円形を呈する。床面までの残存深度は30cmである。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体はV a層土と見られるが、VI層土の混入によって全体にやや明るい印象となっている。下半部にVI層土のブロックが顕著で、その後、その上位にV a層が流入したものとみられる。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は平坦に整い、炉の周辺のみわずかに低くなっている。壁は斜面下方の北西側が大きく削られているが、南東側ではやや外傾して直線的に立ち上がる壁が残存している。内部から柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕いわゆる複式炉をもつ（106×64cm）。床面中央付近には一辺一個の板状礫を埋置した方形の石囲部（36×26cm）をもち、そこから台形状に延びて北壁に接する前庭部の両側にも列状に配置されている。石囲部および前庭部に配置された礫はいずれも被熱による赤変が認められるが、底面における焼土の生成は確認できなかった。

〔重複〕RA77の柱穴、PPB1289・PPB1290に切られている。

〔遺構の時期〕炉の形態及び埋土の様相から、縄文時代中期末葉と判断される。

〔出土遺物〕土器（312）〈第217図、写真図版167〉。

削搔器（2229）。

RA52竪穴住居跡（第90図、写真図版60）

〔位置・検出状況〕中央東部、IIA5sグリッド付近に位置する。VI層上面において比較的良好な暗褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕壁上端の平面形は5.2×3.3mの楕円～隅丸方形を呈する。南壁側が張り出し、棚状の段となっている。壁下端の平面形（床面範囲）は3.0×2.6mの楕円形。検出面から床面までの残存深度は34cmである。

〔埋土・堆積状況〕壁際にVI層土の再堆積層（5層）が堆積した後、床面は広くVa層相当の暗褐色土（4層）に覆われている。周囲からの流入土であろう。この上には再びVb～VI層土類似の明るい土層（1・2層）が堆積し検出面までを埋めている。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は皿状を呈し中央部が最も深くなっている。木根による微小な凹凸がやや目立つが、全体的に滑らかに仕上げられ、上面には若干の硬化が認められる。壁は、縁部に向かって徐々に高まる床面からそのまま連続し、内湾・外傾して立ち上がる。内部からは複数の杭状小ピット（径10cm前後）が検出されており、底面縁部をめぐるように分布する傾向が認められた。

〔棚状施設（？）と焼土〕上述の通り、南縁部では壁が張り出し中段に棚状の段が認められた。奥行は40cm前後で、南壁から西壁南部にかけて連続している。上面は平坦でなく、内側に向かって緩く傾斜する。この段の東部では上面に焼土の生成が認められた。平面形は62×40cm程の楕円形で、厚さは6cm前後。被熱赤変はごく弱い。なお、この段は地山を削り出したものではなく、主にVI層土の再堆積土（7層）によって形成されている。上面に焼土の生成が認められたこと、南壁際に連続して観察されたことから、住居に付属する施設の可能性があるものとして扱っているが、東壁際等に認められるVI層再堆積層（5層）にも良く似ており、廃絶後の崩落土層である可能性は否定できない。その場合、上面に生成した焼土は廃絶後の凹地内部における燃焼行為の痕跡と考えられる。

〔重複〕RD80、RB02に切られ、RA85を切る。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉～前期初頭を想定したい。

〔その他所見〕床面より一段高い面に生成した焼土を壁際にもつ住居跡は、本遺跡では本例以外にも複数検出されている。大半は残存状態が悪く詳細を明らかにできていないため、類似の住居跡を考察する上で本例は有用であると思われる。

〔出土遺物〕土器（313～322）〈第217・218図、写真図版167〉。

尖頭器（1505）、石鏃（1774）、筈状石器（2107）、削搔器（2296）、敲磨器類（2415・2582・2656・

2752)。

RA53竪穴住居跡 (第91図、写真図版61)

〔位置・検出状況〕南西部、II A 7 m グリッド付近に位置する。VI層上面において、RA41とRA55の間に広がる不明瞭な三日月状の褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕重複遺構に大きく壊されているため原形は不明だが、残存する壁から概ね径4.7m程度の円～楕円形を呈するものと推測される。検出面から床面までの残存深度は4 cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b～VI層土に類似する褐色土を主体とする。全体に柳沢軽石 (YP) の細片を含む。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は概ね平滑だが、後世の柱穴等が密に重複する北側では底面の識別が難しく、結果的に低くなってしまった。本来はほぼ水平の床面が連続していたものと思われる。縁部に向かってなだらかに高まりそのまま立ち上がっている。全体に壁の残存状態は不良で、わずかに南東部で内弯・外傾する部分が認められる。内部には多数の柱穴が分布するが、多くは埋土を切って重複するか、帰属そのものが判別できないものであった。配置からPPB1001・1105～1108・977・978等、壁際に位置するものが本住居跡への帰属の可能性が考えられる。

〔灰跡〕検出されなかった。床面の多くをRA41に切られているため本来の存否自体が不明である。

〔重複〕中央部から南西部にかけて大きくRA41に切られている。また、多数の柱穴状ビットに切られる。北東縁部にはRA55が重複するが先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕埋土の様相等から、縄文時代早期中葉を想定したい。

〔出土遺物〕土器 (324・325) (第218図、写真図版167)。

RA54竪穴住居跡 (第92・93図、写真図版62)

〔位置・検出状況〕南西部、II A 7 1 グリッド付近に位置する。VI層上面において、RA20とRA41の間に広がる不明瞭な暗褐～褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕東西をRA20・RA41に大きく壊され、また北部は精査時にRA57の埋土と共に掘り上げてしまったため、原形は不明となっている。残存範囲の最大値から径3.8m以上の円～楕円形を呈するものと推測される。検出面から床面までの残存深度は5 cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b～VI層土に類似する褐色土 (2層) を主体とする。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は平坦に整っている。上述の事情により壁が残存するのは南縁のみだが、RA57の埋土を切ってなだらかに立ち上がる北縁部の様相が土層断面A-A'に観察される。内部及び周辺には多数の柱穴状ビットが分布するが大半は帰属を判別できない。配置からPPB581・564・581・729・1110・1111等、壁際に位置するものが本住居跡への帰属の可能性が考えられる。

〔灰跡〕検出されなかった。

〔重複〕RA57を切り、RA20・RA41に切られている。

〔遺構の時期〕埋土の様相等から、縄文時代早期中葉を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RA55竪穴住居跡 (第94・95図、写真図版63)

〔位置・検出状況〕南東部、II A 6 n グリッド付近に位置する。VI層上面において、RA42東半部外周に広がる不明瞭な暗褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕5.9×5.7mの略円形～隅丸方形を呈する。床面までの残存深度は16cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕先行調査したRA42によって埋土の大半を失っており、残存するのは東・南・北壁際のみである。V b層土に類似する褐色土を主体とし、この上位に部分的にV a層相当の黒褐色土の堆積が認められる。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は重複するRA42によって多くの部分が壊されているが、東部ではRA42のそれより一段高い平坦部が残存しており、縁部に向かって次第に高まり緩く内湾して立ち上がる壁へと連続する様子が観察できる。過年度調査で検出したものも含め、内部からは多数の柱穴が確認されている。本住居に帰属するものを抽出することはできなかったが、他例に照らせば、壁際に位置するものがそれに該当する可能性が高い。

〔炉跡〕検出されなかった。床面の多くを失っているため、本来の存否自体が不明である。

〔重複〕RA42に切られている。

〔遺構の時期〕埋土の様相等から、縄文時代早期中葉を想定したい。

〔その他所見〕本住居のプランはRA42の東・南・北壁が掘り広がったように見えるが、床面の段差や柱穴配置等から、別の住居と判断したものである。ただし、本住居跡の残存率は限定的であり、もとより埋土の判別が困難であったことから、さらに複数の住居跡が複雑に重複している可能性を考慮する必要がある。

〔出土遺物〕土器（326～328）（第218図、写真図版167）。

石鏝（1775）。

RA56竪穴住居跡（第96図、写真図版64）

〔位置・検出状況〕中央西部、II A 5 1 グリッド付近に位置する。VI層上面において、不整形で不明瞭な褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕5.0×3.8mの概ね楕円形を呈する。南西部の一部は先行調査のトレンチによって失われている。床面までの残存深度は10cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b～VI層土に類似する褐色土を主体とする。この上位に部分的にV a層相当の黒褐色土の堆積が認められる。なお、RA59との重複部においても土層の断絶（壁の立ち上がり）を見いだすことができなかったため、断面図では両者に埋土が連続した表現となっている。

〔壁・床面・柱穴など〕重複する多数の柱穴状ピットにより、床面は広い範囲で乱されているが、残存する部分においては概ね平坦に整っている様子が観察される。壁の立ち上がりは微小な段差として認識される程度であり、本来の形状について詳細は不明である。また、上述の通り、重複するRA59との境界部においても明確な立ち上がりは認識できなかった。内部からは多数の柱穴状ピットが検出されているが、多くは本住居の埋土を上方から切っているものであり、明らかに本住居に帰属する柱穴を識別することはできなかった。

〔炉跡〕床面中央のやや南寄りの位置に被熱範囲1箇所を検出した（断面A-A'南半床面）。上方から切り込むピット群の狭間に残存したもので、平面形は不明となっている。ごく弱い被熱痕跡であったため精査時のクリーニングで消滅してしまい、断面の記録はできなかった。

〔重複〕RA58・RA59と重複するが先後関係は確認できなかった。RA59に伴う可能性をもつ柱穴状ピットが床面を切っている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉頃を想定したい。

〔出土遺物〕土器（329～332）（第218図、写真図版167）。

石鏝 (1905)、石錐 (2095)、削搔器 (2268)、敲磨器類 (2604)。

RA57竪穴住居跡 (第92・93図、写真図版65)

〔位置・検出状況〕南西部、II A 7 1 グリッド付近に位置する。VI層上面において、RA20とRA41の間に広がる不明瞭な暗褐～褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕重複遺構に大きく壊されているため原形は不明である。対向して残存する壁間長は3.1mで、おそらく隅丸方形を呈するものと推測される。検出面から床面までの残存深度は6cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b 層土に類似するにぶい黄褐色土を主体とする。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は平坦に整っている。壁はわずかに内湾してごくだらかに立ち上がっている。内部及び周辺には多数の柱穴状ピットが分布するがこれらの帰属は明らかでない。配置からPPB1183・1204・1205等、壁際に位置するものが本住居跡への帰属の可能性が考えられる。

〔炉跡〕検出されなかった。

〔重複〕RA11・RA20・RA54に切られる。

〔遺構の時期〕埋土の様相等から、縄文時代早期中葉を想定したい。

〔出土遺物〕土器 (333) (第218図、写真図版167)。

RA58竪穴住居跡 (第97・98図、写真図版66)

〔位置・検出状況〕中央西部、II A 4 n グリッド付近に位置する。VI層上面において、不整形で不明瞭な褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕北東部に弧状に残存する壁から概ね円形を呈するものと見られる。推定される径は5.4m、床面までの残存深度は5cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b 層土に類似するにぶい黄褐色土を主体とする。この上位に部分的にV a 層相当の黒褐色土の堆積が認められる。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は滑らかに整っているが、斜面下方の北西方向に緩く傾斜している。壁は北東部に残存し、縁部で高まる床面に連続して緩く内湾してなだらかに立ち上がっている。内部には柱穴が多数分布するが、本住居に帰属するものを抽出することは困難である。配置から、北東部壁際に位置するもの等が本住居への帰属の可能性が考えられる。

〔炉跡〕なし。

〔重複〕RA59と重複するが先後関係は明らかでない。

〔遺構の時期〕埋土の様相等から、縄文時代早期中葉を想定したい。

〔出土遺物〕土器 (334・335) (第218図、写真図版168)。

RA59竪穴住居跡 (第96図、写真図版64)

〔位置・検出状況〕中央西部、II A 5 m グリッド付近に位置する。VI層上面において、不整形で不明瞭な褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕RA56との重複により本来の全体形状は不明となっているが概ね楕円形を呈するものと推測される。計測可能な南北壁間は5.1m、床面までの残存深度は8cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b～VI層土に類似する褐色土を主体とする。この上位には部分的にV a 層相当の黒褐色土の堆積が認められる。なお、RA56との重複部においても土層の断絶 (壁の立ち上

がり)を見いだすことができなかったため、断面図では両者に埋土が連続した表現となっている。

〔壁・床面・柱穴など〕本住居の床と見られるのはRA56東～北壁外側に広がる一段高い面である。RA56床面との比高は5cm前後で、概ね平坦に整っている。壁の立ち上がりは微小な段差として認識される程度であり、本来の形状について詳細は不明である。また、上述の通り、重複するRA56との境界部においても明瞭な立ち上がりは認識できなかった。内部からは列状・弧状に並ぶ多数の柱穴状ピットが検出されているが、本住居に帰属する柱穴を識別することは難しい。

〔炉跡〕検出されなかった。床面の多くを失っているため、本来の存否自体が不明である。

〔重複〕RA56・RA58と重複するが先後関係は確認できなかった。本住居に伴う可能性をもつ柱穴状ピットがRA56の床面を切っている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉頃を想定したい。

〔出土遺物〕土器 (336) 〈第218図、写真図版168〉。

RA60竪穴住居跡 (第99・100図、写真図版67)

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 5 o グリッド付近に位置する。VI層上面において、不整形で不明瞭な褐色～暗褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕北西部の壁が残存しないため全体形状が不明だが、残存部から概ね6.0×4.3m程の楕円形を呈するものと推測される。床面までの残存深度は20cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕斜面上方に当たる北西側の壁際では床面直上にVI層土の崩落流入土の堆積が観察される(4層)。埋土は全体的にV b～VI層土類似の褐色土を主体としており、これを上方から切って落ち込むV a層相当土が部分的に認められる。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は全体的に平坦に整っているが中央付近がわずかに低くなっている。壁はやや内湾してなだらかに立ち上がる。内部及び周辺には多数の柱穴状ピットが分布するがこれらの帰属は明らかでない。配置からPPB951・1355・1435・1670等、壁際に位置するものが本住居跡への帰属の可能性が考えられる。

〔炉跡〕検出されなかった。

〔重複〕RA67・RA68と重複するが、先後関係は明らかでない。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉頃を想定したい。

〔出土遺物〕土器 (337～340) 〈第218図、写真図版168〉。

敲磨器類 (2558・2605)。

RA61竪穴住居跡 (第101図、写真図版68)

〔位置・検出状況〕中央西部、II A 3 n グリッド付近に位置する。VI層上面において、概ね方形を呈する不明瞭な褐色～暗褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕平面形は方形を基調とするが、壁際に列状に並ぶ複数のピットにより南壁上端は判然としない。残存部から2.8m四方程度の規模を有するものとみられる。床面までの残存深度は14cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b～VI層土に類似する褐色土を主体とする。この上位には部分的にV a層相当の黒褐色土(1層)の堆積が認められる。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は概ね平坦に整うが、東隅のピット(PPB1141)付近が高まっている。壁はやや内湾し外傾して立ち上がる。北～東壁の上部はやや開きステップ状となる。斜面上方側に当

たことから、廃絶後の崩落によるものであろう。内部及び周辺には多数の柱穴状ピットが分布するがこれらの帰属は明らかでない。壁際あるいは隅部に位置するPPB1136～1138・1140・1141等が本住居跡に伴うものである可能性がある。

〔炉跡〕 検出されなかった。

〔重複〕 RA67を切っている。

〔遺構の時期〕 縄文時代早期中葉頃を想定したい。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

RA62竪穴住居跡（第102図、写真図版69）

〔位置・検出状況〕 中央西部、II A 3 mグリッド付近に位置する。VI層上面において、不整形で不明瞭な褐色～暗褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕 西部をRA63に切られ、また南西部の壁上端が流失しているため全体形状が不明だが、残存部から概ね4.5×3.7m程の楕円形を呈するものと推測される。床面までの残存深度は20cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕 埋土はV b層土に類似する褐色土を主体とする。やや暗い層と崩落層が交互に堆積している状況から、自然流入土によって埋没したものと推測される。

〔壁・床面・柱穴など〕 床面は概ね平坦に整い、壁はやや内湾しながら外傾して立ち上がる。北部壁際に位置するPPB1675・1676・1777等が本住居に伴う可能性がある。

〔炉跡〕 検出されなかった。

〔重複〕 RA08・RA63に切られている。

〔遺構の時期〕 縄文時代早期中葉頃を想定したい。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

RA63竪穴住居跡（第103図、写真図版70）

〔位置・検出状況〕 中央西部、II A 3 1グリッド付近に位置する。当初V b層上面でV a層相当の黒褐色土範囲を検出し土坑と判断して精査着手したが、その後周囲に広がる褐色土も埋土であることが判明した。

〔規模・形状〕 過年度調査において認識できなかった西半部がすでに失われており、全体の形状と規模は不明となった。東半部の床面及び東壁の一部が残存する。床面までの残存深度は20cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕 埋土はV b層土に類似する褐色～にぶい黄褐色土を主体とする。南東部では埋土の上部にV a層類似黒褐色土の堆積が認められる（当初土坑と誤認した部分）。

〔壁・床面・柱穴など〕 上述の通り、過年度調査で認識できなかった西半部を失っているため、残存状態はきわめて悪い。残存範囲にみる床面は概ね平坦に整い、やや内湾し外傾して立ち上がる壁を有する。残存する東壁際とその延長上、及び対向する西側の壁が想定される地点に複数の柱穴が位置するが、いずれが帰属するかについて判別することは困難である。

〔炉跡〕 検出されなかった。多くの部分を失っているため本来の存否自体が不明である。

〔重複〕 東部でRA62を切っている。

〔遺構の時期〕 縄文時代早期中葉頃を想定したい。

〔出土遺物〕 土器（341）（第218図、写真図版168）。

RA64 竪穴住居跡 (第104・105図、写真図版71)

〔位置・検出状況〕中央西部、II A 1 mグリッド付近に位置する。過年度調査において精査したRA16住居跡の周囲に広がる不明瞭な褐色～ぶい黄褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕過年度調査のトレンチにより北東側の一部を失っているが、北東-南西方向に長軸を持つ、4.4×3.2mの概ね楕円形を呈するものと思われる。床面までの残存深度は14cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b層土に類似する褐色～ぶい黄褐色土を主体とする。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は平坦に整い、壁は内弯しながら外傾して立ち上がる。壁際には複数の柱穴状ピットが分布し、これらが本住居跡に帰属する可能性がある。

〔炉跡〕南西部壁際にごく弱い赤変部が認められた。精査の過程で消失してしまい図示できなかった。

〔重複〕RA65を切っている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉頃を想定したい。

〔出土遺物〕土器 (342・343) (第218図、写真図版168)

RA65 竪穴住居跡 (第104・105図、写真図版71)

〔位置・検出状況〕中央西部、II A 1 mグリッド付近に位置する。VI層上面において不明瞭で不整形な褐色～ぶい黄褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕西半部にRA64が重複し壁の一部が失われているが、5.5×4.7mの円～楕円形を呈するものと思われる。床面までの残存深度は16cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b～VI層土に類似する褐色土を主体とする。埋土上部はやや暗く、壁際及び床面にはVI層類似の褐色土が分布する。

〔壁・床面・柱穴など〕西部では床面及び壁の一部が失われているが、残存部において床面は概ね平坦に整い、壁は内弯しながら外傾して立ち上がる。柱穴は、壁直下や壁の内側1 mほどの位置及び壁外周に分布が認められるが、本住居跡への帰属が明らかなものを判別することは困難である。

〔炉跡〕検出されなかった。床面の多くの部分がRA64に切られているため、本来の存否は不明である。

〔重複〕西部をRA64に切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉頃を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RA66 竪穴住居跡 (第106図、写真図版72)

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 2 pグリッドに位置する。VI層上面において不明瞭で不整形な褐色～ぶい黄褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕斜面上方にあたる北東部の壁のみが残存し全体の形状は不明であるが、床面と思しき平坦面の広がり概ね3.0×4.0mの範囲で確認されており、本来は楕円形に近い形状であったことが推測される。床面までの残存深度は8cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b～VI層土に類似する褐色土を主体とする。埋土上部はやや暗く、壁際及び床面にはVI層類似の褐色土が分布する。

〔壁・床面・柱穴など〕上述の通り、壁は北東部にのみ残存し、やや内弯しながら外傾して立ち上がる。壁直下から一定の広がりを見せる平坦面が床面とみられるが、柱穴状ピットや土坑等の重複が著しく、残存状況は良好でない。北東壁から1.5～2.0mほど内側の位置(およそ床面中央部と推定される)には、周面より一段低い不整形な落ち込みが認められる。径100×130cm、床面からの深さは約20cmで、床面

直上の埋土（3層）が連続して流入している様子が確認されることから、本遺構の埋没開始段階にすでに存在した落ち込みであると判断できる。本住居跡への帰属が明らかな柱穴を抽出することは難しいが、壁際に位置するPPB1345・1346等がその可能性が高いと考えられる。このほか床面中央の落ち込みの周縁を巡るように分布する小穴（PPB1343・1344・1458・1460・1461・1518～1520）が確認されている。

〔炉跡〕炉跡と判断できる焼土は検出されなかった。本遺跡検出の類似住居跡の例に照らせば、床面中央の落ち込みがその機能を有していた可能性がある。

〔重複〕周辺にはRA72・RD78・RD76・RF35等が位置する。層的事実からRD78（陥し穴）・RF35は本住居跡より新しい。RD76は本住居床面で確認されたものだが、本住居埋土との先後関係は明らかでない。RA72との関係についても埋土の重複部を観察できていないことから同様に新旧不明である。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉を想定したい。

〔出土遺物〕土器（344・345）（第219図、写真図版168）。

尖頭器（1500）。

RA67竪穴住居跡（第107図、写真図版73）

〔位置・検出状況〕中央西部、II A 3 n グリッド付近に位置する。VI層上面において不明瞭で不整形な褐色～にぶい黄褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕4.5×3.5mの楕円形を呈すると思われるが、西部にRA61が重複し、また南東部には柱穴状ビット群が密集するため壁が判然としない。床面までの残存深度は10cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b～VI層土に類似する褐色土を主体とする。

〔壁・床面・柱穴など〕壁は緩く内湾し外傾して立ち上がる。床面は平坦に整っている。柱穴は壁外縁または壁直下に分布するもの（PPB1142・1143・1647・1667～1669・1767・1768・1770・1771等）が帰属の可能性が高いとみられる。

〔炉跡〕検出されなかった。

〔重複〕西部をRA61に切られている。また南東部にRA60が重複するが先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RA68竪穴住居跡（第108図、写真図版74）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 3 o グリッドに位置する。VI層上面において不明瞭で不整形な褐色～にぶい黄褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕斜面下方にあたる西半部の壁が流失（あるいは他遺構の重複）によって失われており、全体形状が不明であるが、残存部から概ね楕円形を呈するものと推測される。対向して残存する南北壁間は4.1m、東西長は床面の残存部から2.6m以上とみられる。床面までの残存深度は8cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b～VI層土に類似する褐色土を主体とする（5層）。断面A-A'の右端および同B-B' 両端に観察される1～3層は、本住居の埋土を上方から切るビット群の埋土である。

〔壁・床面・柱穴など〕残存する壁は内湾しやや外傾して立ち上がっている。床面は主に東半部に面的な広がりをもって残存し平坦に整った様子が観察できる。一方で西半部は上述の新期ビット群によ

り大きく乱されている。床面および周辺には多数の柱穴状ピットが分布するが、本住居に帰属するものを抽出することは困難である。

〔竪跡〕 検出されなかった。

〔重複〕 RA60・RA67に近接するが、重複部を確認できなかったため先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕 縄文時代早期中葉を想定したい。

〔出土遺物〕 土器 (346・347) (第219図、写真図版168)。

尖頭器 (1506)。

RA69竪穴住居跡 (第109図、写真図版75)

〔位置・検出状況〕 中央東部、II A 4 q グリッド付近に位置する。VI層上面において不明瞭で不整形な褐色〜にぶい黄褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕 北西部の壁が失われているため全体形状が不明となっているが、残存部から概ね4.4×3.7mの楕円形を呈するものと思われる。床面までの残存深度は14cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕 埋土はV b〜VI層土に類似する褐色土を主体とする (5・6層)。壁際および床面直上に堆積する6層は上位の5層に比してやや暗い。

〔壁・床面・柱穴など〕 壁はやや内湾し外傾して立ち上がる。床面は全体的に平坦に整っている。床面中央には土坑状の落ち込み (PPB1160) を持つ。開口部径136×120cm、床面からの深さは45cm。この落ち込みの外縁には杭穴状の小穴が複数認められた。住居内部には複数の柱穴状ピットが分布するが、本住居跡に帰属する柱穴を抽出することは難しい。壁際に位置するPPB1163・1177・1331・1336・1337・1511・1513・1737等がその可能性が高いと考えられる。

〔竪跡〕 床面中央の落ち込みの壁面にはごく弱い比熱痕跡が認められ、埋土の下部には焼土が混入することから、この落ち込みが竪の機能を有していた可能性がある。ただし住居本体の埋土を切るように堆積する4層の解釈が難しい。この落ち込みがどの段階で設けられたものか慎重な検討が必要である。

〔重複〕 なし。

〔遺構の時期〕 縄文時代早期中葉を想定したい。

〔出土遺物〕 土器 (348・349) (第219図、写真図版168)。

石鏃 (1735)。

RA70竪穴住居跡 (第110図、写真図版76)

〔位置・検出状況〕 中央東部、II A 5 r グリッド付近に位置する。VI層上面において概ね方形に広がるやや暗い褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕 重複遺構の影響で西壁及び東壁の一部が失われ全体形状は不明となっているが、概ね楕円〜隅丸方形を呈するものと推測される。残存する南北壁間は4.2m。床面と思しき平坦面の分布範囲から推定される東西長は3.0m以上とみられる。床面までの残存深度は24cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕 南北方向の堆積状況を記録した断面A-A'をみると、南壁際では崩落土とみられるVI層土類似層が床面直上に薄く覆い、その後3層→2層の順に周囲からの流入土によって埋没した様子がうかがえる。これらを上方から切り込むように堆積する1層はV a〜V b層土に類似するもので、住居の中央部及び壁際付近に散見される。

〔壁・床面・柱穴など〕 上述の通り、西壁及び東壁の一部を失っている。残存部に観察される壁面は

ごく緩く内弯し外傾して立ち上がっている。壁の立ち上がりは本遺跡検出の他の楕円形住居に比して急であり、方形基調の住居跡のそれによく似ている。床面は緻密で概ね平坦に整うが、中央部に向かって緩やかに低くなっている。柱穴状ピットは、床面上にPPB1682～1684、壁面に同1685・1691～1694等が検出されている。

〔炉跡〕検出されなかった。

〔重複〕RB02、RD79、RD80に切られる。東壁側でRA38、RA52と重複するが先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉～前期初頭か。

〔出土遺物〕土器（350・351）〈第219図、写真図版168〉。

RA71 壁穴住居跡（第111図、写真図版77）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 3 r グリッド付近に位置する。VI層上面において不明瞭で不整形な褐色～にぶい黄褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕斜面下方に当たる西側が失われているため全体形状は不明となっているが、残存部から円形基調のものであったことが推測される。残存部にみる南-北長は4.9m、床面と思しき平坦面の分布範囲から推定される東西長は2.6m以上とみられる。床面までの残存深度は8cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土の主体はV b～VI層土に類似するやや濁った褐色土である（2層）。壁際の不整な落込みにはVI層土類似土の堆積がみられる。

〔壁・床面・柱穴など〕壁はやや内弯し外傾して立ち上がる。東半部では平坦な床面が広がるが、これに比してわずかに低い面が西半部に認められることから、把握できなかった別の遺構（住居）が重複している可能性がある。内部及び周辺には多くの柱穴状ピットが分布しており、これらのうちから本住居に帰属するものを抽出することは難しいが、壁際のPPB1481・1483・1489・1724、壁面の同1185・1716・1717・1727等がその可能性が高い。

〔炉跡〕検出されなかった。

〔重複〕RA75・RA78等と近接するが、先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉を想定したい。

〔出土遺物〕土器（352）〈第219図、写真図版168〉。

RA72 壁穴住居跡（第112図、写真図版78）

〔位置・検出状況〕中央西部、II A 2 o グリッドに位置する。VI層上面において不明瞭で不整形な褐色～にぶい黄褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕斜面下方に当たる西側が失われているため全体形状は不明となっているが、残存部から楕円～隅丸方形であったことが推測される。残存部にみる南-北長は2.8m、床面と思しき平坦面の分布範囲から推定される東西長は2.5m以上とみられる。床面までの残存深度は10cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV a～V b

層土に類似する暗褐色土を主体とする。

〔壁・床面・柱穴など〕壁はやや内弯し外傾して立ち上がる。内部及び周辺は多数の柱穴状ピットが重複しており床面は著しく乱されているが、これらの空白部には平坦に整えられた平坦面が観察される。上記の状況から本住居跡に帰属する柱穴を抽出することはきわめて困難である。

〔炉跡〕北壁際において床面よりも一段高い面に生成した焼土が検出されている。被熱の度合いは弱く、周囲を柱穴状ピットや不整形な落込みに切られて残存状態は良くない。北壁東部は他の壁面に比し

で立ち上がりが緩やかであり、本来はRA52のような棚状の高まりを有し、その上面に生成した焼土である可能性が考えられる。

〔重複〕 検出状況からRA66を切っていると思われる。

〔遺構の時期〕 縄文時代早期中葉～前期初頭か。

〔出土遺物〕 土器（353・354）〈第219図、写真図版168〉。

RA73竪穴住居跡（第113図、写真図版79）

〔位置・検出状況〕 中央東部、II A 1 p グリッド付近に位置する。VI層上面において不明瞭で不整形な褐色～にぶい黄褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕 トレンチ等により西半部を失っているが、残存部から概ね隅丸方形を呈するものと推測される。南北の壁間長は2.9m、床面と思しき平坦面の分布範囲から推定される東西長は2.8m以上とみられる。床面までの残存深度は12cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕 床面直上に堆積するのはVI層の再堆積土とみられる5層である。5層が薄い壁際の一部と中央部では、この上をVa～Vb層類似の4層が覆っている。

〔壁・床面・柱穴など〕 上述の通り、西半部では壁が失われているが、残存部ではやや内弯し外傾して立ち上がる壁面が観察される。床面は全体的に平坦に整っている。南西部には複数の柱穴状ピットや落ち込みが分布するが、本住居跡に帰属するものを抽出することは難しい。

〔炬跡〕 南壁際において床面よりも一段高い面に生成した焼土が検出されている。径40cmほどの不整形円形で赤変深度は3cm程度、被熱の度合いはごく弱い。床面よりも高い位置に生成したものであり、竪穴本体埋土の5層上面がこれに相当する可能性がある。RA52・RA72等、壁際に焼土を持つ住居跡に類似するものと考えられる。

〔重複〕 先後関係の明らかな重複遺構はない。

〔遺構の時期〕 縄文時代早期中葉～前期初頭か。

〔出土遺物〕 土器（355）〈第219図、写真図版168〉。

RA74竪穴住居跡（第114図、写真図版80）

〔位置・検出状況〕 中央東部、II A 5 q グリッド付近に位置する。VI層上面において三日月状の褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕 斜下方の南西側を重複する他の住居跡に切られ全体形状が不明となっているが、残存部から概ね楕円形を呈するものと推測される。残存する北東側壁及び床面とみられる平坦面の分布範囲から推測される平面規模は、長軸（北西-南東）が4.4m以上、短軸（北東-南西）が2.1m以上である。床面までの残存深度は16cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕 埋土はVb層土に類似する褐色土（4層）を主体とする。壁際ではこの下位にVI層の再堆積層（壁崩落土か）が観察される。

〔壁・床面・柱穴など〕 残存部にみる壁面は内弯し外傾して立ち上がっている。床面は概ね平坦に整うが、不整形な落ち込み（住居埋土を切る）の集中する中央部がやや乱されている。内部及び周辺には多くの柱穴状ピットが分布しており、これらのうちから本住居に帰属するものを抽出することは難しいが、壁際に位置するPPB1391～1394・1468・1469等がその可能性が高い。このうちPPB1391は壁面に位置し、内傾する特徴を持っている。

〔炬跡〕 検出されなかった。床面の多くの部分が重複遺構等に切られているため、本来の存否は不明

である。

〔重複〕 RA45・RA46・RA50に切られている。

〔遺構の時期〕 縄文時代早期中葉と思われる。

〔出土遺物〕 敲磨器類 (2753)。

RA75竪穴住居跡 (第115図、写真図版81)

〔位置・検出状況〕 中央東部、II A 2 q グリッド付近に位置する。VI層上面において不明瞭で不整形な暗褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕 斜面下方に当たる南西側を失っており本来の形状は不明となっている。北部では直線な壁面が交差し隅部を形成する一方で、南部には弧状に展開する部分も認められる。このため方形基調及び楕円形の、複数の住居跡が重複しているものである可能性も考慮しなくてはならない。残存する北東側の壁及び床面とみられる平坦面の分布範囲から推測される平面規模は、長軸(北西-南東)が4.3m以上、短軸(北東-南西)が2.8m以上である。床面までの残存深度は10cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕 床面直上を覆うのはV b層土に類似する暗褐色～褐色土(2層)で、この上位からV a層相当土の落ち込みが切り込んでいる(1層)。上記したように複数等の重複の可能性があるが、土層断面には埋土の断絶(不整合)は認識できない。

〔壁・床面・柱穴など〕 残存部にみる壁面は内弯しながら外傾して立ち上がっている。床面は概ね平坦に整っているが、南部及び西部がわずかに低くなる様相が認められる。この床面の段差は複数の住居の重複によるものである可能性がある。柱穴状ピットは、特に壁が失われている南西部に集中して分布するが、本住居跡に帰属するものを識別することはできなかった。

〔炉跡〕 検出されなかった。

〔重複〕 西部にRA81、RD81が重複して位置するが、埋土の重複部を確認できなかったため、先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕 縄文時代早期中葉を想定したい。

〔出土遺物〕 土器 (356・357) (第219図、写真図版168)。

RA76竪穴住居跡 (第116・117・168図、写真図版82)

〔位置・検出状況〕 北東部、I A 25 p グリッド付近に位置する。平成21年度調査で検出された炉a及び炉bの周辺に分布する柱穴の配置を検討し住居跡と認定したものである。

〔規模・形状〕 炉aを中心に長軸5.6m、短軸5.0mの環状に配置された柱穴の内側が住居本体に相当するものと考えられる。南東部では一対の溝状の掘り込みが平行して外側に延び、その周囲が浅い凹地となっており、全体形は柄鏡形を呈するものとみられる。炉跡検出面、すなわち床面まで削平されているため、住居本体の埋土は残存せず、深度は計測できない。

〔埋土・堆積状況〕 上述の通り床面付近まで削平されているため、住居本体の埋土は観察できなかった。炉a及び炉bは表土直下で検出され、V b層に相当する暗褐色土の平坦面に構築されていた。柱穴埋土はIV層土及びV a層土ブロックを含む。

〔壁・床面・柱穴など〕 壁面は残存しない。炉a及び炉bの周囲に展開する床面は平滑で、炉の周囲では硬化が顕著だが周縁部は流失しており、その範囲は判然としない。住居本体に帰属するとみられる柱穴はPPB58・60・62・64・65・68・1570・1618・1621等。開口部径はいずれも30～40cm、残存深度は40～50cmで、周辺に分布する他の柱穴に比して大きくしっかりした掘り方が特徴的である。

〔張り出し部〕南東部から外側に張り出す溝状の掘り込み（長さ100cm・幅40cm・深さ20～25cm）は、70cmの間隔をもって対をなす（PPB1616・1628）。溝状掘り込みは住居本体側で底面に一段深いピットをもつ（PPB1617・1627）。溝状掘り込みの周囲では、3.0×2.4mの楕円または隅丸方形の範囲で、深さ5cm弱の浅い凹地となっている。底面はやや凹凸があり硬化も認められない。V b～VI層土塊が堆積しており、一般的な住居床面の下位にみられる掘り方埋土に似た様相を呈していた。

〔炉跡〈第168図〉〕炉 a は、環状に配された柱穴列のほぼ中心に位置する。概ね隅丸方形を呈する80×70cmの範囲に焼土の生成がみられ、赤変深度は8cm前後を測る。南東縁部に深鉢が埋設され、また南西側の一辺には列状に配された礫が残存していた。本来はこの石列が全周する石囲炉であった可能性が高い。埋設された深鉢は下半部を欠いており、口縁が床面よりもわずかに高く出るように正位に据えられていた。一方、炉 b は、炉 a の南東縁に接して、90×85cmの略円形の焼土を生成している。赤変深度は8cm前後。炉 a との接点において、炉 a の埋設土器掘り方が炉 b の焼土層を切っているように見えることから、両者は同時存在ではない（炉 b がより古い）可能性がある。

なお、編集の都合上、住居本体と別に第168図に平面・断面図を掲載せざるを得なかった。ご理解を賜りたい。

〔重複〕RA86住居跡に重複するが、先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕縄文時代後期初頭とみられる。

〔出土遺物〕土器（358～360）（第219図、写真図版168）。

RA77竪穴住居跡（第118・119図、写真図版83）

〔位置・検出状況〕北東部、1A24 s グリッド付近に位置する。単独で検出された炉跡の周辺に分布する柱穴の配置を検討し住居跡と認定したものである。

〔規模・形状〕炉の周囲に長軸5.0m、短軸4.5mの環状に配置された柱穴の内側が住居本体に相当するものと考えられる。南西部では一対の溝状の掘り込みが平行して外側に延びており、全体形は柄鏡形を呈するものとみられる。炉跡検出面、すなわち床面まで削平されているため、住居本体の埋土は残存せず、深度は計測できない。

〔埋土・堆積状況〕上述の通り床面付近まで削平されているため、住居本体の埋土は観察できなかった。炉はほぼ表土直下で検出され、V b 層に相当する暗褐色土の平坦面に構築されていた。柱穴埋土はIV層土及びV a 層土ブロックを含む。

〔壁・床面・柱穴など〕壁面は残存しない。炉の周囲に展開する床面は平滑で、炉の周囲では硬化が顕著だが周縁部は流失しており、その範囲は判然としない。住居本体に帰属するとみられる柱穴はPPB701・1268・1280・1289・1290・1300・1589等。開口部径は30～60cm程度、残存深度は40～70cmで、周辺に分布する他の柱穴に比して大きくしっかりした掘り方が特徴的である。

〔張り出し部〕南西部から外側に張り出す溝状の掘り込み（長さ60cm・幅40cm・深さ60cm）は、90cmの間隔をもって対をなす（PPB1281・1595）。住居本体側には近接してPPB1280・1300が位置しているが、これはRA76の溝状掘り込みにおいて本体側底面が陥凹状に一段深くなることと構造上共通するもの解される。

〔炉跡〕炉は、環状に配された柱穴列のほぼ中心からは張り出し部側に寄った位置に設けられている。概ね隅丸方形を呈する100×80cmの範囲に焼土の生成がみられ、赤変深度は15cm前後を測る。両側面及び張り出し部側の一辺には、列状に配された礫が部分的に残存していた。本来はこの石列が全周する石囲炉であった可能性が高い。残存する礫はいずれも表面に被熱による赤変が認められる。

〔重複〕 柱穴PPB1289・1290がRA51を切っている。PPB701がRD48に切られている。またRZ10・RD72・RD73が重複する地点には本住居に帰属する柱穴の存在が想定されるのであるが、これらの遺構によって壊されている（すなわち本住居の方が古い）可能性がある。

〔遺構の時期〕 縄文時代後期初頭とみられる。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

RA78竪穴住居跡（第120図、写真図版84）

〔位置・検出状況〕 中央東部、II A 3 r グリッド付近に位置する。VI層上面で不明瞭な褐色土土範囲として検出された。

〔規模・形状〕 南西部が流失しているため全体形状は不明であるが、壁の残存部から概ね隅丸方形を呈するものと考えられる。残存長は東辺3.0m、北辺2.8m。床面までの残存深度は10cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕 埋土はVI層土の再堆積層とみられる褐色土が主体である。

〔壁・床面・柱穴など〕 残存部にみる床面は概ね平坦に整っているが、壁際では不整な凹凸が断続的にみられる。東壁際にはテラス（マウンド）状の高まりがみられる。壁はやや内湾しながら外傾して立ち上がる。柱穴はプランの隅部にみられるPPB1401・1493～1496等が帰属する可能性がある。内部にはその他複数の柱穴状ピットが分布するが根拠に乏しく抽出し得ない。

〔炉跡〕 東壁際のテラス状の高まりの上面に、径30cmほどの範囲に微弱な焼土が生成している。

〔重複〕 多数の柱穴状ピットが重複するが先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕 縄文時代早期中葉か。

〔出土遺物〕 土器（361）（第219図、写真図版169）。

RA79竪穴住居跡（第121図、写真図版85）

〔位置・検出状況〕 中央東部、II A 1 q グリッド付近に位置する。VI層上面で不明瞭な褐色土土範囲として検出された。

〔規模・形状〕 西部が流失しているため全体形状は不明であるが、残存部から概ね楕円～隅丸方形を呈するものと考えられる。残存長は東-西2.5m、南-北2.8m。床面までの残存深度は10cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕 埋土はV b 層土及びVI層土の再堆積層とみられる褐色土が主体である。

〔壁・床面・柱穴など〕 残存部にみる床面は概ね平坦に整っているが、壁際では不整な凹凸が断続的にみられる。壁はやや内湾しながら外傾して立ち上がる。柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕 検出されなかった。

〔重複〕 RA74・RA75・RA80・RA86が重複するが、先後関係は把握できなかった。

〔遺構の時期〕 縄文時代早期中葉か。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

RA80竪穴住居跡（第122図、写真図版86）

〔位置・検出状況〕 中央東部、II A 1 q グリッド付近に位置する。VI層上面で不明瞭な褐色土土範囲として検出された。

〔規模・形状〕 西部が流失しているため全体形状は不明であるが、残存部から概ね楕円形を呈するものと考えられる。残存部からおおよそ東-西4.0m・南-北4.8m程度の規模と推定される。床面までの残存深度は10cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はV b層土及びVI層土の再堆積層とみられる暗褐色～褐色土が主体である。
 〔壁・床面・柱穴など〕残存部にみる床面は概ね平坦に整っているが、北東壁際では不整な凹凸が認められる。壁はやや内弯しながらごく緩く外傾して立ち上がる。柱穴は壁際に位置するPPB1530・1531・1714・1743・1751等が帰属する可能性が高い。
 〔炉跡〕検出されなかった。
 〔重複〕RA79が重複するが、先後関係は把握できなかった。
 〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉か。
 〔出土遺物〕土器（362・363）〈第219図、写真図版169〉。
 石錐（2096）。

RA81竪穴住居跡（第123図、写真図版87）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 2 q グリッド付近に位置する。VI層上面で不明瞭な褐色土土範囲として検出された。
 〔規模・形状〕南西部が流失しているため全体形状は不明であるが、楕円形または隅丸方形を呈するものと考えられる。残存範囲から4.7m（北西-南東）×3.5m（北東-南西）ほどの規模と推定される。床面までの残存深度は12cm前後である。
 〔埋土・堆積状況〕埋土はV b層土及びVI層土の再堆積層とみられる暗褐色～褐色土が主体である。
 〔壁・床面・柱穴など〕残存部にみる床面は概ね平坦に整っているが、西部はそれ以下まで流失している。壁が残存するのは東側の一部であり、やや内弯しながら緩く外傾して立ち上がる。内部及び周辺には多数の柱穴状ピットが分布するが、根拠に乏しく帰属を明らかに出来なかった。北東壁際に位置するピットと、それに対向する壁が想定される位置に分布するいずれかが、環状（楕円状）に配置されていた可能性がある。
 〔炉跡〕検出されなかった。
 〔重複〕ほぼ全局にわたって複数の他遺構と重複するが、先後関係は把握できなかった。
 〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉か。
 〔出土遺物〕土器（364・365）〈第219図、写真図版169〉。
 削搔器（2297）。

RA82竪穴住居跡（第124図、写真図版88）

〔位置・検出状況〕北東部、I A 24 s グリッド付近に位置する。VI層上面で不明瞭な褐色土範囲として検出された。
 〔規模・形状〕概ね4.3×3.7mの楕円形を呈するものと思われるが、北西部の壁が失われているため、全体形状は不明である。床面までの残存深度は12cm前後である。
 〔埋土・堆積状況〕床面直上にはVI層土の再堆積層、その上位にV a～V b層土に類似する暗褐色～褐色土が堆積している。
 〔壁・床面・柱穴など〕床面は全体に平坦に整っている。壁は弱く内弯しながら緩く外傾して立ち上がっている。柱穴は壁際に位置するPPB1292・1293・1581・1582・1587・1588・1590～1592・1707～1709等が帰属する可能性が高い。
 〔炉跡〕検出されなかった。炉の設置が想定される床面中央部がRZ10・RZ11・RD72・RD73に壊されている。

〔重複〕RA77・RZ10・RZ11・RD72・RD73に切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉か。

〔出土遺物〕土器(366)〈第219図、写真図版169〉。

石錐(2097)。

R A83竪穴住居跡(第125図、写真図版89)

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 2 p グリッド付近に位置する。VI層上面において不整形な褐色土土範囲として認識され、この土層の面的な掘り下げをすすめる過程でプランを把握したものである。

〔規模・形状〕南西部が流失しているため全体形状は不明であるが、壁の残存部から概ね隅丸方形を呈するものと考えられる。残存範囲は南北長2.0m、東西長2.2mほどである。床面までの残存深度は6cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はVI層土の再堆積層とみられる褐色土が主体である。完掘後にプランを把握したものであり、土層断面の記録は行っていない。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は概ね平坦に整っているが、残存するのは北東部のみである。壁の立ち上がりはきわめて不明瞭で、北東縁部がごく緩くわずかに高くなっている。内部には複数の柱穴が分布しているが、本住居への帰属が明らかなのは抽出し得なかった。

〔炉跡〕北壁際の一部に径30cmほど微かな焼土が検出された。最終的に床面と同レベルまで掘り下げたから記録したが、検出面においてはより鮮明な赤変がみられたので、本来の燃焼面は床面より高い位置にあったものと推測される。壁際の一部にテラス(マウンド)状の高みを持ち、その上面に焼土が生成される例に類するものだろう。

〔重複〕RD74に切られている。

〔遺構の時期〕縄文時代早期中葉か。

〔出土遺物〕土器(367)〈第219図、写真図版169〉。

R A84竪穴住居跡(第126図、写真図版90)

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 1 r グリッド付近に位置する。VI層上面において不整形な褐色土土範囲として検出された。

〔規模・形状〕西半部がトレンチと流失によって失われているため全体形状は不明であるが、壁の残存部から概ね隅丸方形を呈するものと考えられる。残存部に見る南北長は3.2m、東西長は3.0mほど、床面までの残存深度は15cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土はVI層土の再堆積層とみられる褐色土を主体とする。西半部は上方からの攪乱が著しい。

〔壁・床面・柱穴など〕床面は概ね平坦に整っているが、西半は根攪乱によって小規模な凹凸が目立つ。壁は東半部に残存しており、わずかに内湾しながら外傾して立ち上がっている。内部及び周辺にはいくつかの柱穴が分布しているが、本住居への帰属が明らかなのは抽出し得なかった。

〔炉跡〕精査の過程で南壁際の一部に径30cmほど微かな焼土が検出された。生成面はVI層土ブロックによるマウンド状の高まりの上面である。精査時には、さらに下位に本来の燃焼面が存在するものと考え、このブロック層を掘り下げたところ、結果的に消失してしまい記録できなかった。他の複数の住居跡にもみられる、壁際の一部にテラス(マウンド)状の高みを持ち、その上面に焼土が生成される例に類するものだろう。

〔重複〕 RD34・RD79・RD89と重複するが、先後関係は明らかでない。

〔遺構の時期〕 縄文時代早期中葉か。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

RA85竪穴住居跡（第127図、写真図版91）

〔位置・検出状況〕 中央東部、II A 3 s グリッド付近に位置する。VI層上面において不整形な褐色土土範囲として認識された。

〔規模・形状〕 流失と他遺構の重複により西側を大きく失い全体形状は不明となっているが、壁の残存部から概ね3.0m四方ほどの隅丸方形を呈するものと考えられる。床面までの残存深度は14cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕 埋土はV b～VI層土とみられる褐色土が主体である。

〔壁・床面・柱穴など〕 床面は全体的に平坦に整っているが、壁際には不整形な落ち込みが点在する。東側のコーナー付近のみ残存する壁は、弱く内弯し外傾して立ち上がっている。柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕 南東壁際のテラス状の高まりの上面に、径50×36cmの微弱な焼土が生成している。

〔重複〕 RA52・RB02に切られる。

〔遺構の時期〕 縄文時代早期中葉か。

〔出土遺物〕 尖頭器（1507）。

RA86竪穴住居跡（第128図、写真図版92）

〔位置・検出状況〕 北東部、I A 25 q グリッド付近に位置する。V b～VI層上面において、平行する2条の溝状ビットが検出されたことから、張出部をもつ住居跡の一部と判断、周辺に分布する柱穴の配置を検討し住居跡と認定したものである。

〔規模・形状〕 長軸5.7m、短軸4.5mの環状に配置された柱穴の内側が住居本体に相当するものと考えられる。南西部では一対の溝状の掘り込みが平行して外側に延びており、全体形は柄杓形を呈するものとみられる。内部に炉跡が残存しないことから、すでに床面以下まで削平（流失）されていたと考えられる。したがって住居本体の埋土は残存せず、深度は計測できない。

〔埋土・堆積状況〕 上述の通り床面以下まで流失・削平されているため、住居本体の埋土は観察できなかった。張出部の溝状ビット内の埋土はV a層土が主体であった。

〔壁・床面・柱穴など〕 壁面及び床面は残存しない。住居本体に帰属するとみられる柱穴はPPB1294・1309・1563・1593・1600・1746・1764等である。開口部径は30～50cm、残存深度は40～70cmである。周辺には同規模の柱穴も複数分布することから、これらのほかに本住居に帰属するものが存在する可能性が高い。

〔張り出し部〕 南西部から外側に張り出す溝状の掘り込みは80cmの間隔をもって対をなし、それぞれ両端に一段深いビットを持つ。また、溝状掘り込みの埋土最上部には、径20cm程度の礫が立てた状態で据えられていた（写真図版92下段参照）。この礫の設置がどの時点（廃絶の前・後）で行われたかについては不明である。

〔炉跡〕 検出されなかった。削平により失われた可能性を考慮する必要がある。

〔重複〕 RD50iに重複するが、先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕 縄文時代後期初頭～前葉とみられる。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

R A87 竪穴住居跡（第129図、写真図版77）

〔位置・検出状況〕 北東部、I A 23 q グリッド付近に位置する。VI層上面において検出された柱穴の配置を検討し竪穴住居跡の可能性があると判断した。

〔規模・形状〕 柱穴が径3.0mほどの概ね環状に配置されている。床面以下まで削平されたものとみられ、竪穴本体は残存しない。

〔埋土・堆積状況〕 上述の通り、削平により竪穴本体の埋土は残存しない。柱穴埋土はいずれもV a層土を主体としている。

〔壁・床面・柱穴など〕 壁・床面ともに残存しない。本遺構に伴う柱穴としてはPPB1601～1603・1606・1607・1612～1614等を想定した。

〔炉跡〕 検出されなかった。削平により失われた可能性を考慮する必要がある。

〔重複〕 なし。

〔遺構の時期〕 縄文時代中期～後期が想定される。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

R A88 竪穴住居跡（第130図、写真図版93）

〔位置・検出状況〕 中央東部、II A 5 n グリッドに位置する。VI層上面において不整形な褐色土土範囲として認識された。

〔規模・形状〕 東端部のみ残存しているため全体形状は不明であるが、南東及び北東向きの直線のな壁が交わり隅部を形成することから、概ね隅丸方形を呈するものと考えられる。残存範囲は北東-南西長1.1m、北西-南東長0.8mときわめて狭小である。床面までの残存深度は8cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕 埋土はVI層土の再堆積層とみられる褐色土を主体とする。完掘後にプランを把握したものであり、土層断面の記録は行っていない。

〔壁・床面・柱穴など〕 残存部にみる床面は概ね平坦に整っている。壁はやや外傾して短く立ち上がる。柱穴は検出されなかった。

〔炉跡〕 南東向き壁の内側に径30cmほど微弱な焼土が検出された。生成面はVI層土ブロックによるマウンド状の高まりの上面である。比較的鮮やかな焼土で赤変深度は8cmほどだが、周囲を根掘りに乱されている。

〔重複〕 RA13・RA55に切られている。

〔遺構の時期〕 縄文時代早期中葉か。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

S-1/50

RA01・02・03共通断面(調査区北端部)



基本土層

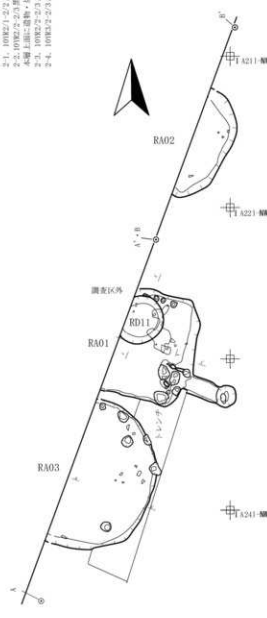
- I. 1000以上の厚褐色、小石多、粘状土、土質硬、フカクテ、石籠多量、φ100mm程度の土塊(埋設物?)、埋設物多量
- II. 1000以上の厚赤褐色、小石多、粘状土、土質硬、フカクテ、石籠多量、φ100mm程度の土塊(埋設物?)、埋設物多量
- III. 1000以上の厚赤褐色、小石多、粘状土、土質硬、フカクテ、石籠多量、φ100mm程度の土塊(埋設物?)、埋設物多量
- IV. 1000以上の厚赤褐色、小石多、粘状土、土質硬、フカクテ、石籠多量、φ100mm程度の土塊(埋設物?)、埋設物多量
- V. 1000以上の厚赤褐色、小石多、粘状土、土質硬、フカクテ、石籠多量、φ100mm程度の土塊(埋設物?)、埋設物多量
- VI. 1000以上の厚赤褐色、小石多、粘状土、土質硬、フカクテ、石籠多量、φ100mm程度の土塊(埋設物?)、埋設物多量

RA01・02・03共通断面(調査区北端部)

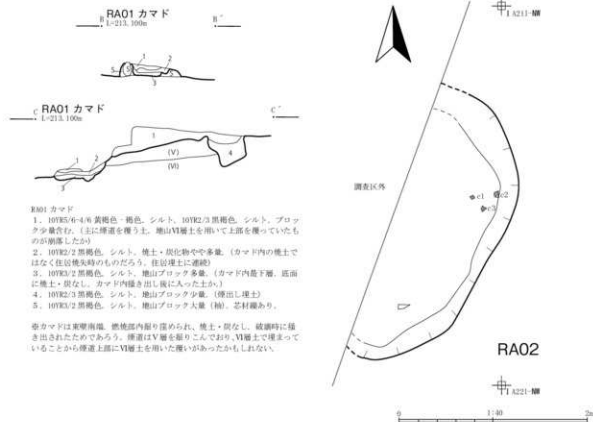
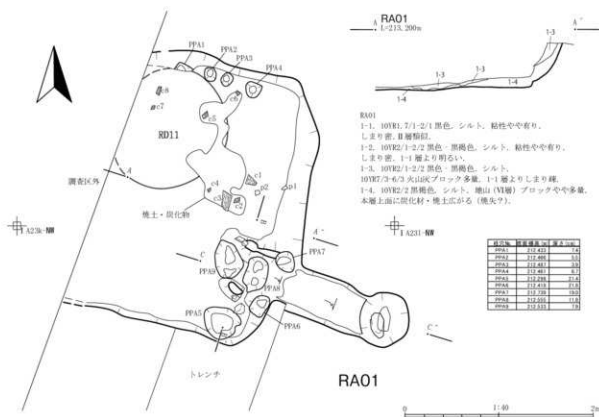


RA02RA01～RA03共通断面(南寄り)

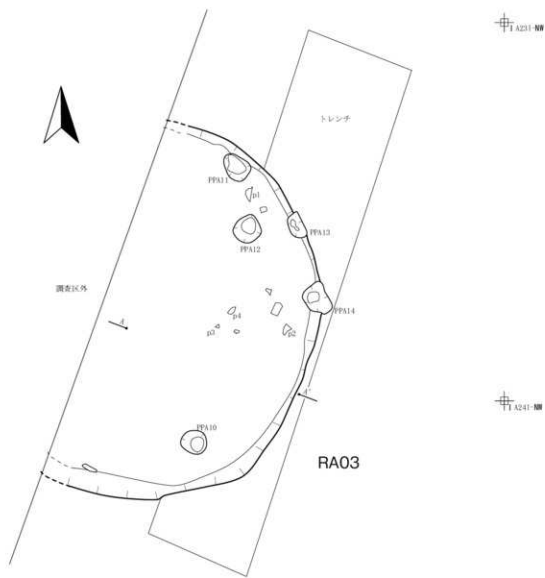
- 2-1. 1000以上の厚赤褐色、小石多、粘状土、土質硬、フカクテ、石籠多量、φ100mm程度の土塊(埋設物?)、埋設物多量
- 2-2. 1000以上の厚赤褐色、小石多、粘状土、土質硬、フカクテ、石籠多量、φ100mm程度の土塊(埋設物?)、埋設物多量
- 2-3. 1000以上の厚赤褐色、小石多、粘状土、土質硬、フカクテ、石籠多量、φ100mm程度の土塊(埋設物?)、埋設物多量
- 2-4. 1000以上の厚赤褐色、小石多、粘状土、土質硬、フカクテ、石籠多量、φ100mm程度の土塊(埋設物?)、埋設物多量



第23図 RA01～03共通断面(兼基本土層)



第24図 RA01・02

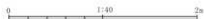


目次地	数量(個)	深さ (cm)
PPA10	212,162	11.4
PPA11	211,732	44.6
PPA12	212,211	25.0
PPA13	212,183	42.1
PPA14	211,790	38.5

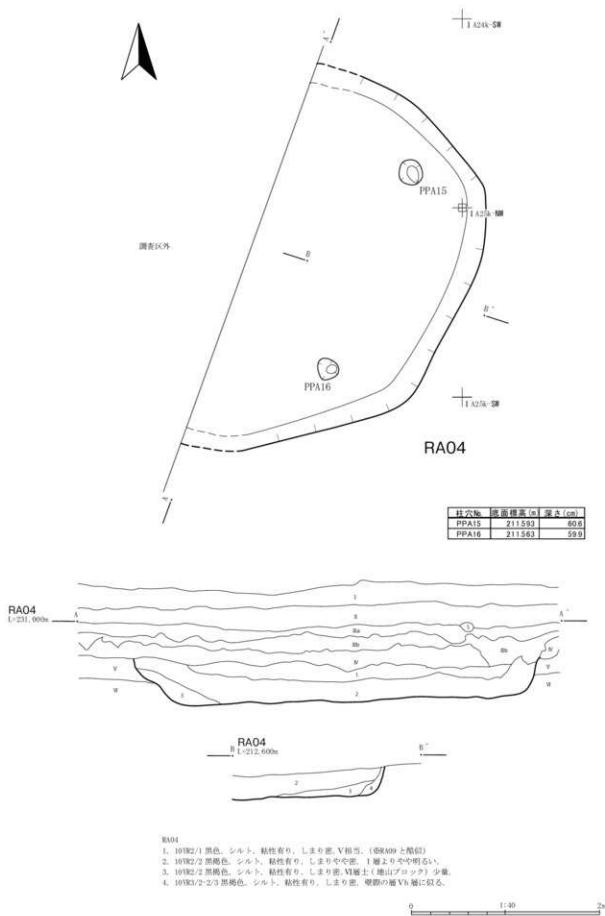


RA03

- 3-1. 101R2/1-2/2 黒色・黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまり密。(2-1層に分布)
 3-2. 101R2/2 黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや密。地山ブロック多。
 3-3. 101R2/1-1/2 黒色・黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまり密。
 3-4. 101R2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまり密。3-1・3-3より明るい。
 3-5. 101R2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまり密。地山ブロック多量。

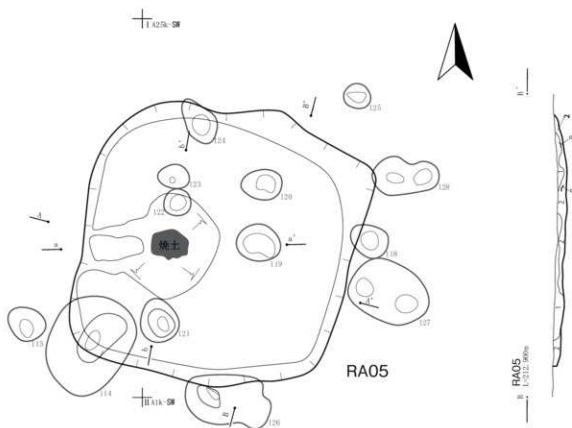


第25図 RA03



第26図 RA04

2 遺構



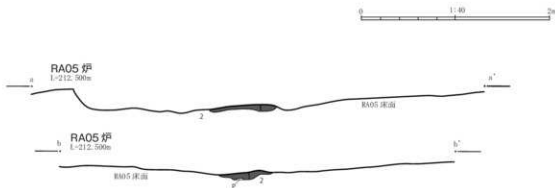
RA05
1/212,900m



RA05

1. 10192/1 棕色、シルト、粘性有り、しまり密、Y P 細片散在、V₃ 層に似る。
2. 10192/2 黒褐色、シルト、粘性やや有り、しまりやや密、V₃ 層(地山)土を次々1層より明るく粉っぽく、赤土混片(大粒10 深黒片?)、磁等は 2 層上面から出土。

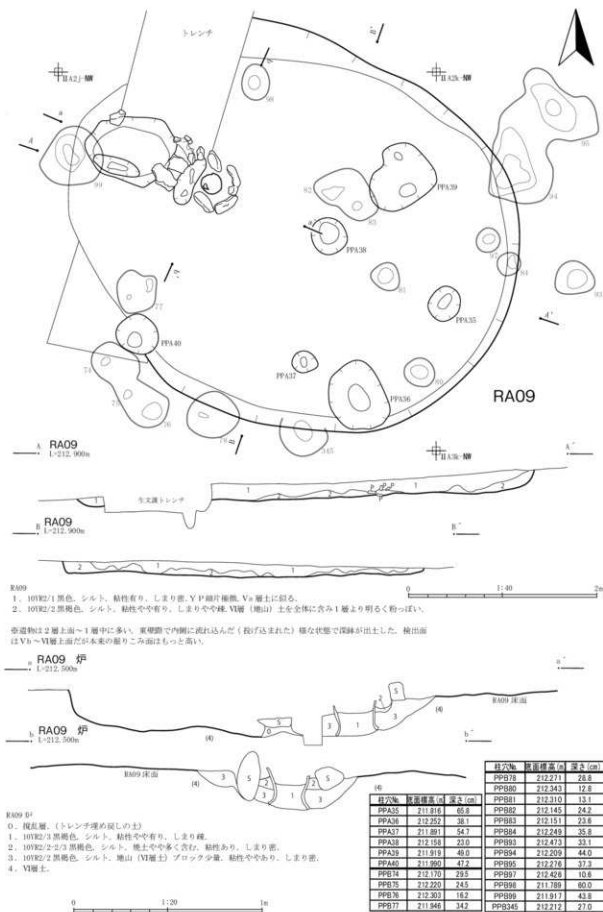
柱穴No	断面積高(m)	深さ(cm)
PP0113	212.081	20.8
PP0114	212.841	60.8
PP0118	212.483	22.2
PP0119	212.376	9.9
PP0120	212.278	18.7
PP0121	212.184	35.3
PP0122	212.306	13.6
PP0123	212.017	40.5
PP0124	212.283	18.9
PP0125	212.526	14.7
PP0126	212.111	48.7
PP0127	212.461	25.5
PP0128	212.509	22.1



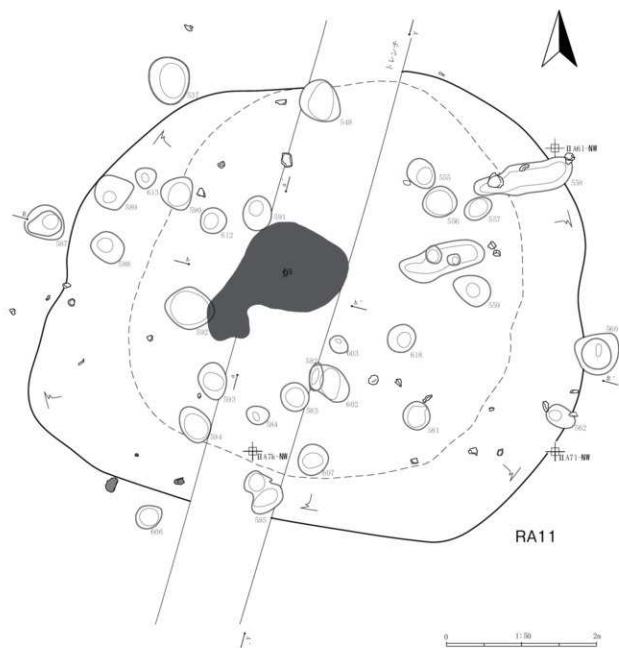
RA05 炉

1. 0194/0-3/4 褐色-緑褐色、シルト、礎土、粘性やや有り、しまりやや密、根拠瓦がひびく。
2. V₃ 礎土。

第27図 RA05

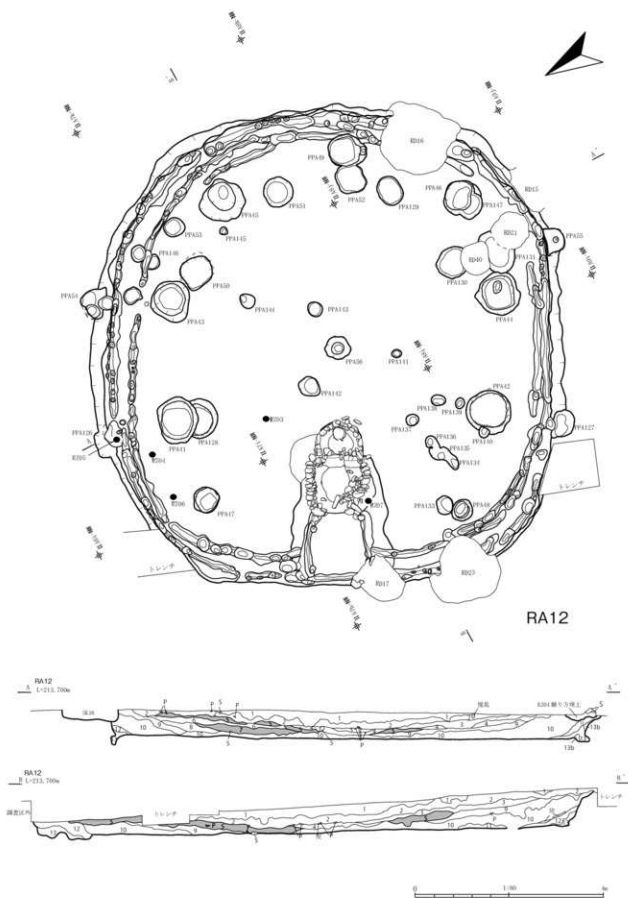


第31図 RA09

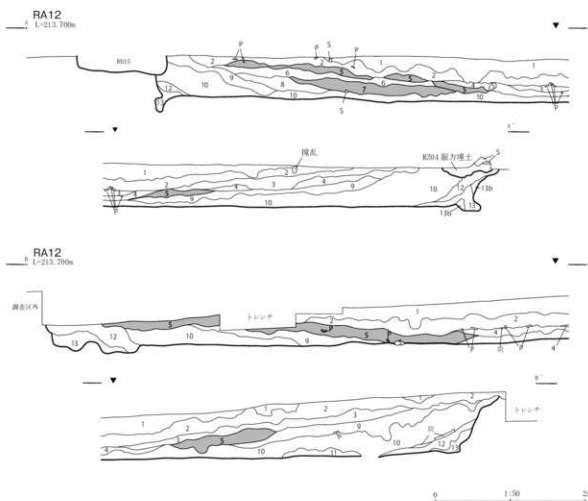


柱穴物	底面標高 (m)	深さ (cm)	柱穴物	底面標高 (m)	深さ (cm)	柱穴物	底面標高 (m)	深さ (cm)
PPB537	212.521	54.8	PPB582	212.983	14.5	PPB593	212.933	36.0
PPB548	212.688	45.3	PPB583	212.908	14.8	PPB594	213.126	16.4
PPB555	212.899	40.0	PPB584	212.814	21.2	PPB602	212.937	63.5
PPB556	213.204	11.5	PPB585	212.805	22.9	PPB603	212.792	91.1
PPB557	213.208	12.6	PPB586	213.088	26.9	PPB606	212.585	46.1
PPB558	213.085	25.7	PPB587	212.953	76.5	PPB607	212.642	32.5
PPB559	212.688	87.5	PPB588	212.906	26.9	PPB612	212.844	16.5
PPB560	213.039	37.6	PPB589	212.801	33.1	PPB613	212.827	22.8
PPB562	213.242	19.5	PPB590	212.953	20.8	PPB618	212.938	44.3
PPB581	212.723	40.8	PPB591	212.667	51.5	PPB554	212.955	13.6
			PPB592	213.066	15.2			

第33図 RA11 (1)



第35図 RA12全体図



RA12

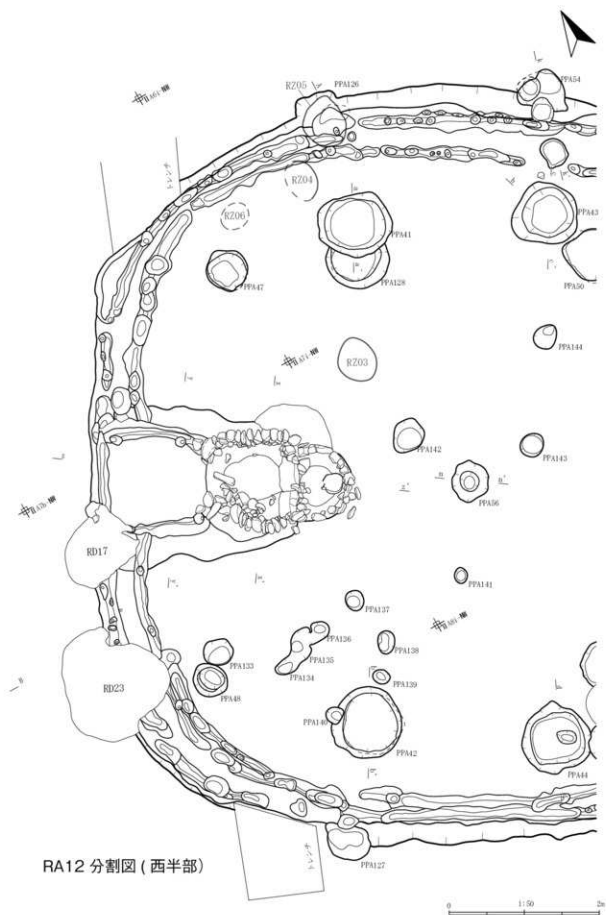
- 10R2/2-2 黒色・黒褐色。シルト、粘性やや有り、しまりやや弱、褐色粘土入る。最層相当層。ザラザラしている。
- 10R2/2-2/3 黒褐色。シルト、粘性有り、しまりやや弱。10R3/3-2/4 暗褐色シルトのブロックを多数含む。IV層に相当。
- 10R2/2 黒褐色。炭粒散見。粘性有り、しまりやや弱。2・4層に比して第1層。
- 10R3/3-2/3 暗褐色・黒褐色。シルト。堆土。炭粒を微量に含む。3層に比して非常に。 (堆土中位の出土遺物はこの層に埋蔵される。)
- 10R5/5 黄褐色。シルト。粘性やや有り、ガツナリとしまっている。褐色～淡黄色のVPを含む。VI層土に似ている。人為的整地層だろう。
- 10R3/3-2/3 暗褐色・黒褐色。シルト。堆土。粘性やや有り、しまりやや弱。炭粒ごく散見。
- 10R5/5 黄褐色。シルト。5層と同じ。一部5層よりさらにしまってガツナリとしている。
- 10R2/2 黒褐色。シルト。粘性有り。しまりやや弱。VI層土と類似の黄褐色土ブロック少量。
- 10R2/2 黒褐色。シルト。粘性有り。しまりやや弱。10層に比して第1層。炭粒の混入は目立たない。
- 10R2/2 黒褐色。シルト。粘性やや有り、しまりやや弱。6.5-10mm 炭粒を全体に含む(目立つ)。埋土下を降さない範囲で住居表面直上を覆う。住居内の炭化材・焼土は本層の下面に接する。
- 10R2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有り、しまりやや弱。VI層土ブロック少量。床面直上に部分的にみられる層。10層にIV層ブロックが混ざった上。
- 10R2/1-2 黒色・黒褐色。シルト。粘性有り、しまりやや弱。埋土に限定してみられる。埋没長相段の層。
- 10R3/3 暗褐色。シルト。粘性やや有り、しまりやや弱。埋土小ブロック多量。全体の黄色味が強い。壁下部を外側にえぐり込んで入る。例外的に埋土構成材内層に埋蔵されるのが特徴で示されたのではない。
- (13)層はさらにVI層ブロック大量。(13層ブロック層)

柱穴No	底面標高(m)	深さ(cm)
PPA41	211.620	102.0
PPA42	211.840	86.0
PPA43	211.660	104.0
PPA44	211.780	100.0
PPA45	211.340	138.0
PPA46	211.680	106.0
PPA47	211.762	98.4
PPA48	211.969	76.1
PPA49	211.990	77.0
PPA50	211.700	100.0
PPA51	211.880	87.0
PPA52	212.560	22.0
PPA53	212.500	22.0

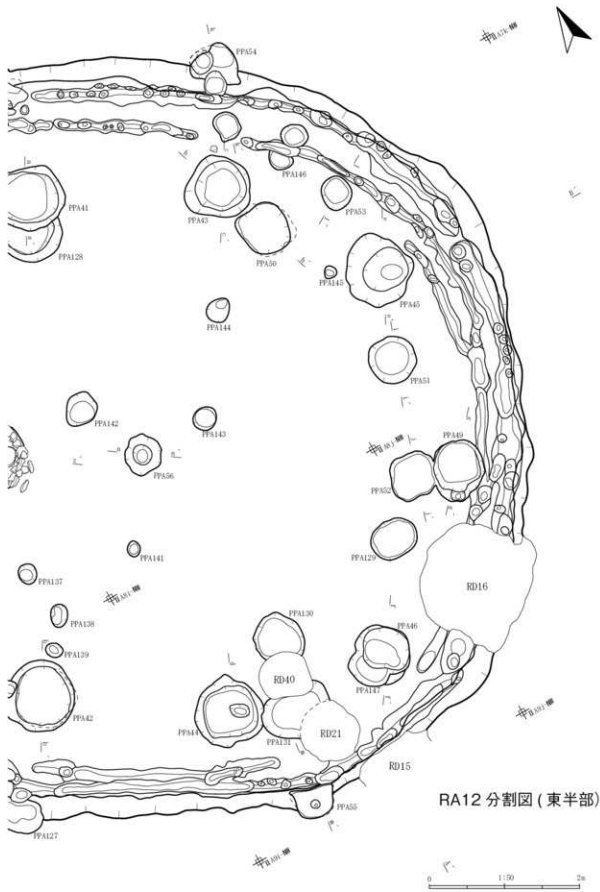
柱穴No	底面標高(m)	深さ(cm)
PPA54	212.580	78.0
PPA55	212.900	40.0
PPA56	212.480	18.0
PPA126	212.706	59.4
PPA127	212.708	42.4
PPA128	211.828	92.6
PPA129	212.769	8.2
PPA130	212.701	16.3
PPA131	212.530	33.4
PPA133	211.926	50.8
PPA134	212.186	25.1
PPA135	212.188	9.4
PPA136	212.320	0.6

柱穴No	底面標高(m)	深さ(cm)
PPA137	212.244	19.8
PPA138	212.197	26.5
PPA139	212.079	38.3
PPA140	212.229	23.3
PPA141	212.420	7.3
PPA142	212.156	32.9
PPA143	212.374	15.5
PPA144	212.342	20.6
PPA145	212.362	20.7
PPA146	212.389	16.1
PPA147	211.998	86.3

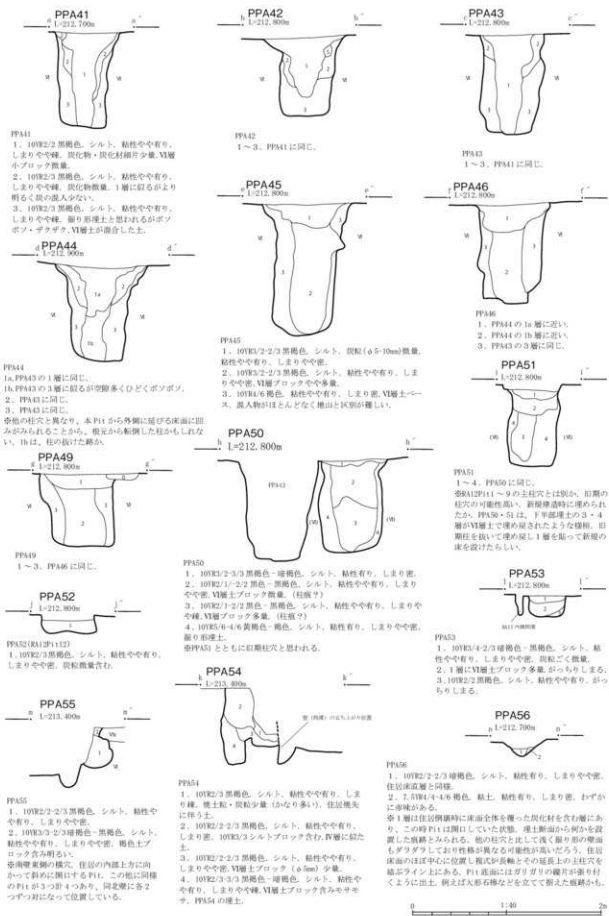
第36図 RA12断面



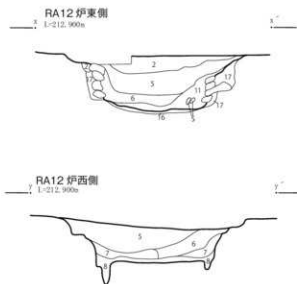
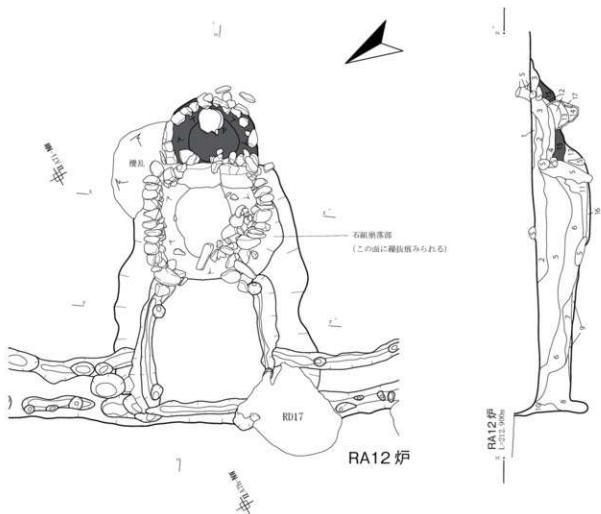
第37図 RA12分割図 (西半)



第38図 RA12分割図(東半)



第39図 RA12柱穴断面

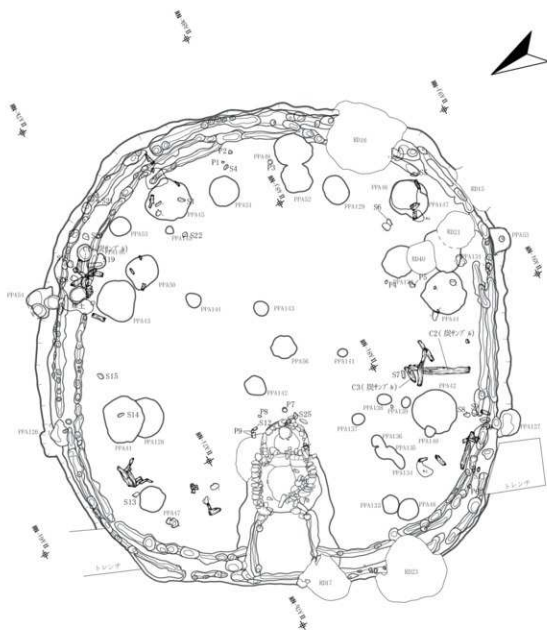


RA12 炉

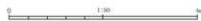
1. 10YR2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性有り。しまりやや密。10YR3/3-3/4 粘土質シルト硬質焼土ブロックを全体に含む奇味をもつ。
2. 10YR2/1-2/2 黒色-黒褐色。シルト。粘性有り。しまりやや密。φ10mm 程度ごく微量含む。
3. 1層に長く回る。1層より焼土ブロック多くφ10mmの程度を微量含む。(2層より多い)
4. 2層に長く回る。
5. 10YR2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性有り。しまりやや密。VI層小ブロック(φ10-20mm)やや多量。炭片(φ10-20mm)少量。焼土ブロック(φ10mm)微量。炭灰は均等ではない。炭片がある。焼土塊面に付着しもの。
6. 10YR2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性有り。しまりやや密。VI層小ブロック(φ10-20mm)微量。炭片(φ10-20mm)微量。焼土ブロック(φ10mm)ごく微量。焼土塊面に付着しもの。
7. 10YR4/6 褐色。シルト。粘性有り。しまりやや密。ブロック層。
8. 10YR2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性有り。しまりやや密。VI層ブロック(φ5-10mm)少量。5・6層よりVI層ブロックの径が小さく少ない。
9. 10YR2/3-3/4 灰褐色-暗褐色。シルト。粘性やや有り。しまり密。上面ツリツリ。踏み跡めによる軽北面が。
10. 10YR4/6 褐色。シルト。ブロック層。
11. 10YR2/2 黒褐色。シルト。炭片大量。(住居焼失時の灰と思われる)
12. 7.5YR3/3-3/4 暗褐色粘土質シルト。粘性有り。しまりやや密。やや奇味。
13. 7.5YR2/2 暗褐色。粘土質シルト。粘性有り。しまりやや密。両側い層。
14. 10YR4/6 褐色。シルト。17層に長く回る。
15. 5YR4/6-4/8 赤褐色。粘土質シルト。粘性有り。しまり密。焼土。良く生成した焼土。
16. 5YR4/4に近い赤褐色。粘土質シルト。粘性有り。しまり密。やや弱い奇味。
17. 10YR4/6 褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや密。縄の跡が認められ、VI層とベース。

0 1:40 2m

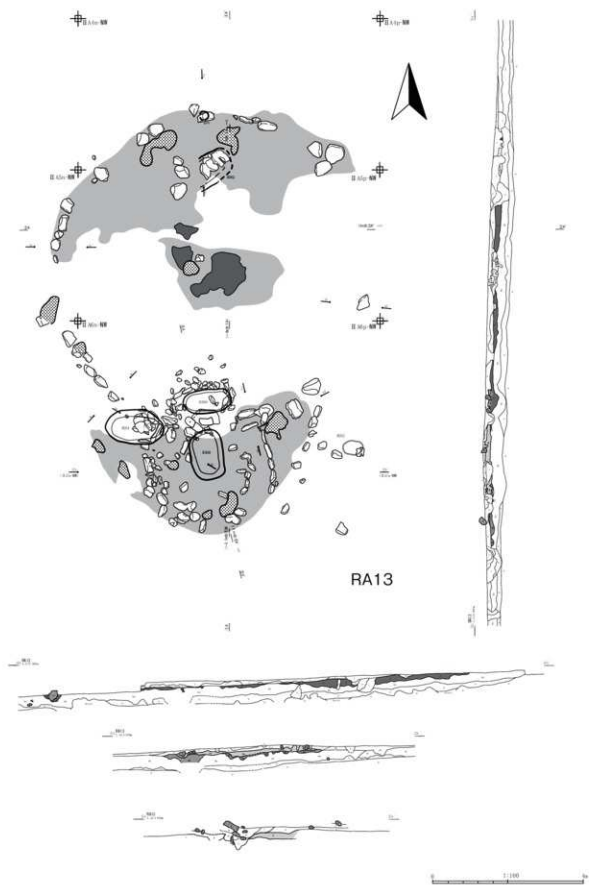
第40図 RA12炉



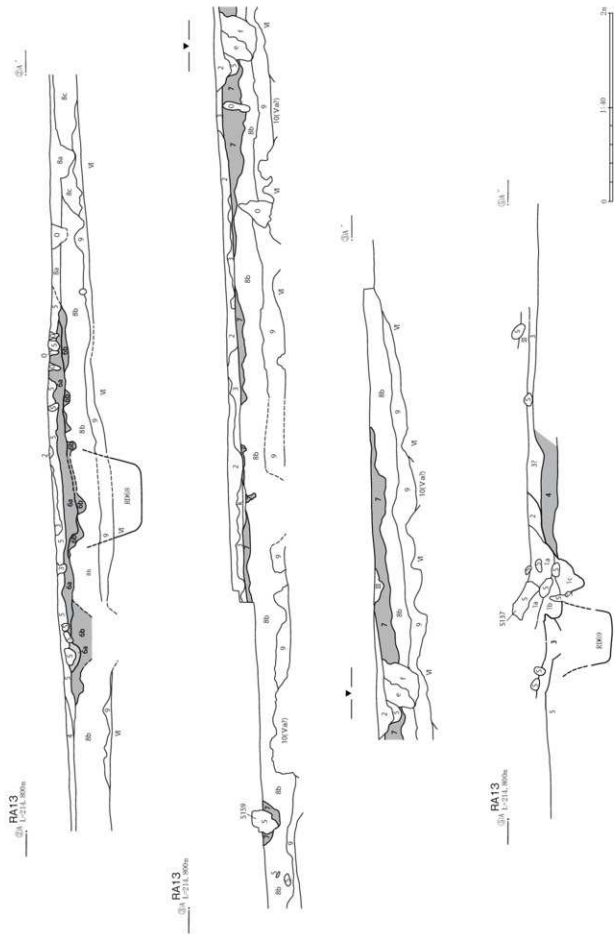
RA12 床面での遺物等出土状況



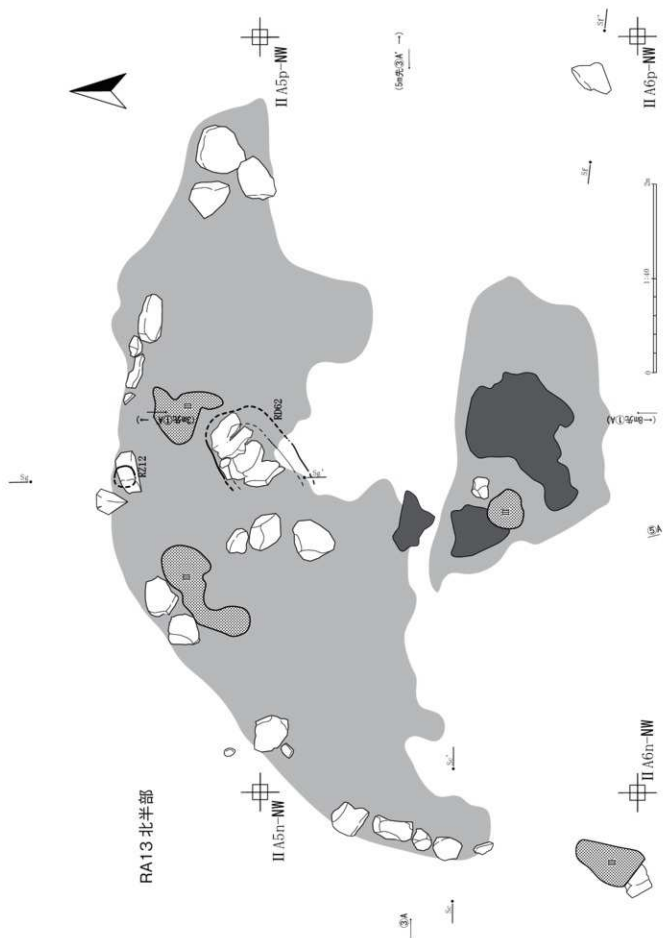
第41図 RA12遺物等出土状況図



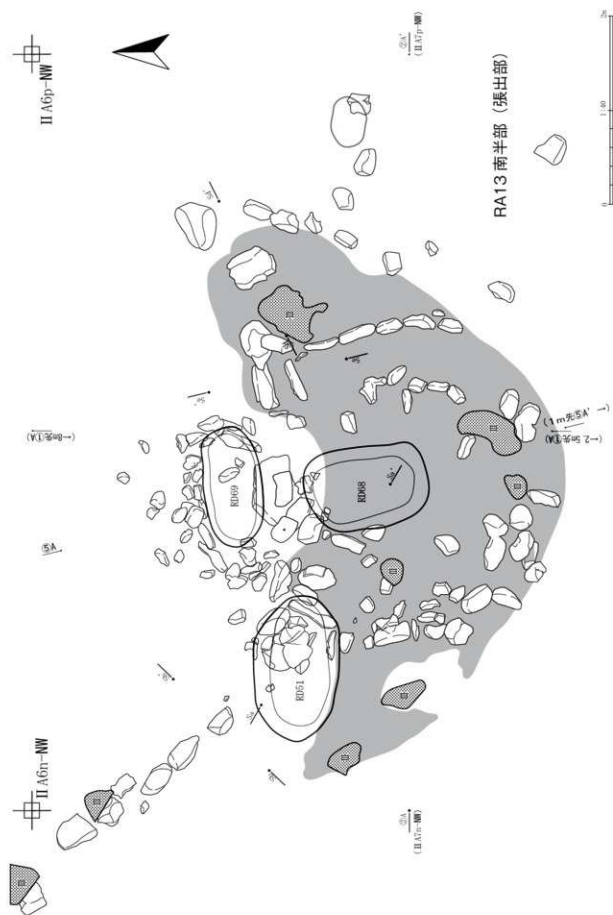
第42図 RA13全体図



第44図 RA13断面②③④⑤



第45図 RA13分割平面図（北半）



第46図 RA13分割平面図 (南半)

2 遺構



RA13 配石断面 $se=sa^2$
 1. 10YR4/6 黒色 シルト、粘性ややや、締まり密、RA13 表出部内部に敷かれた黄色土。
 2. 10YR3/3-3/4 暗褐色 シルト、粘性ややや、締まりやや密、土圧埋土すべりに伴う層土ブロックを少量含む3層より粗い。
 (3). 10YR2/1-2/2 黒-黒褐色 シルト、粘性ややや、締まり密、V/a 層相当分。



RA13 配石断面 (S14B) $sb=sh^2$
 1. 10YR4/4-3/4 暗-暗褐色 シルト、粘性ややや、締まりやや密、RA13 横成線に伴う黒褐色土。
 2. 10YR3/3-2/3 暗褐色 シルト、粘性ややや、締まりややや疎、IV層土に似る。
 (3). $Se=sa^2$ の3層に同じ。

密1層は黄褐色土、RA13 本体の内側に敷かれている。礎 (S14B) は本体の礎状配石を構成するもの、2層下面にのっている、掘り方は認識できない。



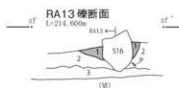
RA13 配石断面 (S137) $se=sa^2$
 1. $sb=sh^2$ の1層に同じ。
 2. $sb=sh^2$ の2層に同じ。
 3. $se=sa^2$ の3層に同じ。
 4. 10YR3/3 暗褐色 シルト、粘性ややや、締まり密、V/b 相当。



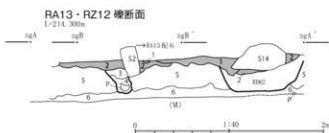
RA13 礎状配石横成線 (S29) S4-S4'
 0. 粗粒乱石 (クラックに埋り入り礎が埋砂している)。
 1. 10YR4/4-6 黒色 シルト、粘性有、締まりやや密、表出部や本体縁取り方に用いられる黄色土。
 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト、主体よりやや明るい10YR2/3 黒褐色 シルトブロックを全体に含む (IV層に似る)、粘性ややや、締まりやや密。
 3. 10YR3/3-3/4 暗褐色 シルト、粘性ややや、締まり密、V/b 層分。



RA13 礎状配石横成線 (S32) $Se=Se^2$
 1. S4-S4' の1層に同じ。(黄色土)
 2. 10YR3/3-3/4 暗褐色 シルト、粘性ややや、締まり密、1より粗い、主に RA13 本体内部に分布する暗褐色土。
 3. S4-S4' の2層に同じ。
 4. S4-S4' の3層に同じ。
 ※S32 (RA13 の礎状配石を構成)を配置した後、表出部の黄色土の敷き均しが行われている。

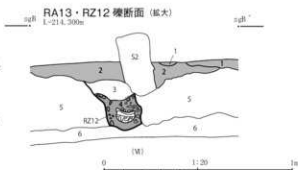


RA13 礎状配石横成線 (S16) S1-S1'
 1. $Se=Se^2$ の2層に同じ。
 2. S4-S4' の2層、 $Se=Se^2$ の3層に同じ。(IV層分)
 3. S4-S4' の3層、 $Se=Se^2$ の4層に同じ。(V/b 層相当分)

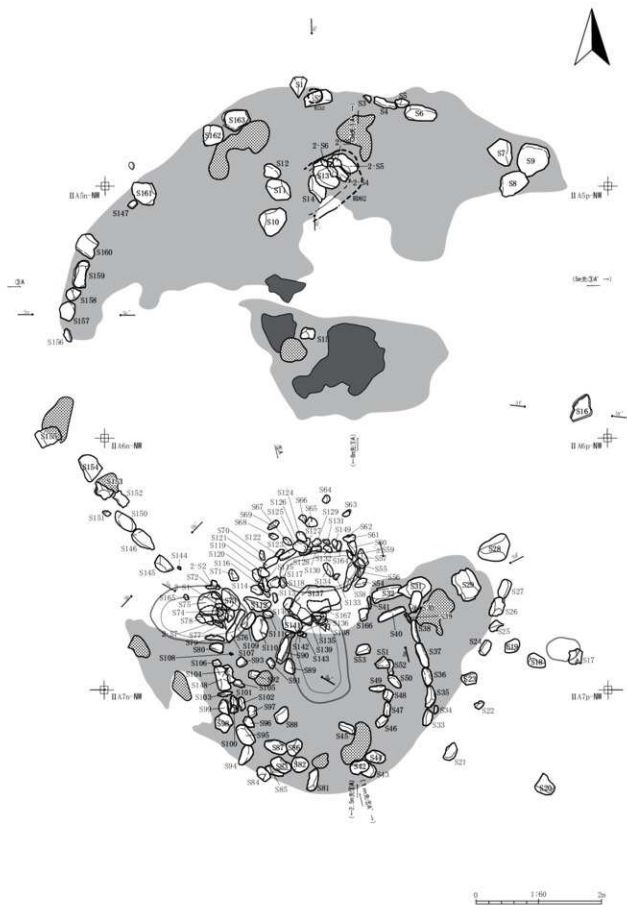


RA13 礎状配石横成線 (S2・S14) $Se=Se^2$
 1. S4-S4' の1層に同じ。
 2. $Se=Se^2$ の2層に同じ。
 3. 10YR2/1-2/2 黒-黒褐色 シルト、粘性有、締まりやや密。
 4. 10YR2/2 黒褐色 シルト、粘性有、締まりやや密、小礎 (径10~15mm) と粗砂を多量に含む、土部の内部及び周囲に詰め込まれている。
 5. S4-S4' の2層、 $Se=Se^2$ の3層に同じ。
 6. S4-S4' の3層、 $Se=Se^2$ の4層に同じ。

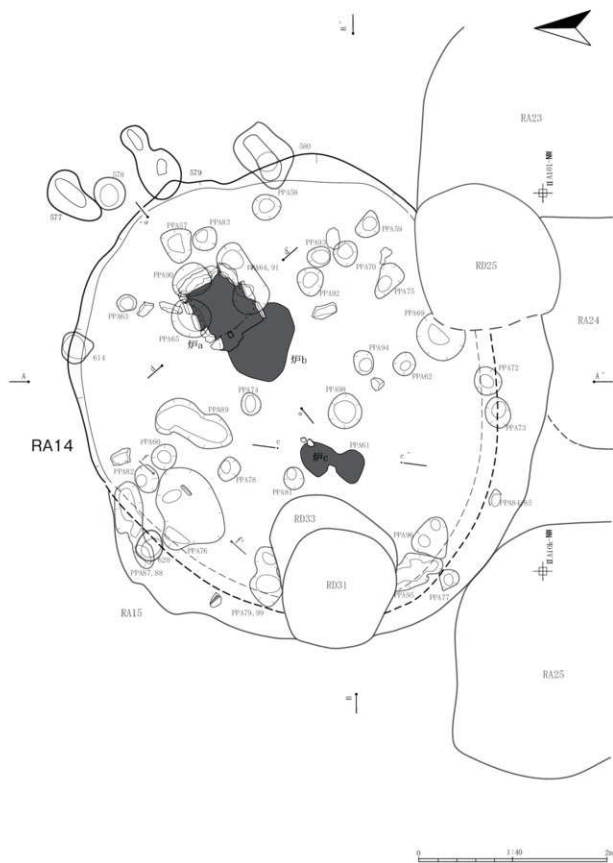
※S14 (RA13 内部北部に位置する土坑 (R062) に入っている礎、この土坑は1層に埋り込んでいる。
 S2 は RA13 礎状配石北縁の礎、土部の埋置後に礎が倒れている。



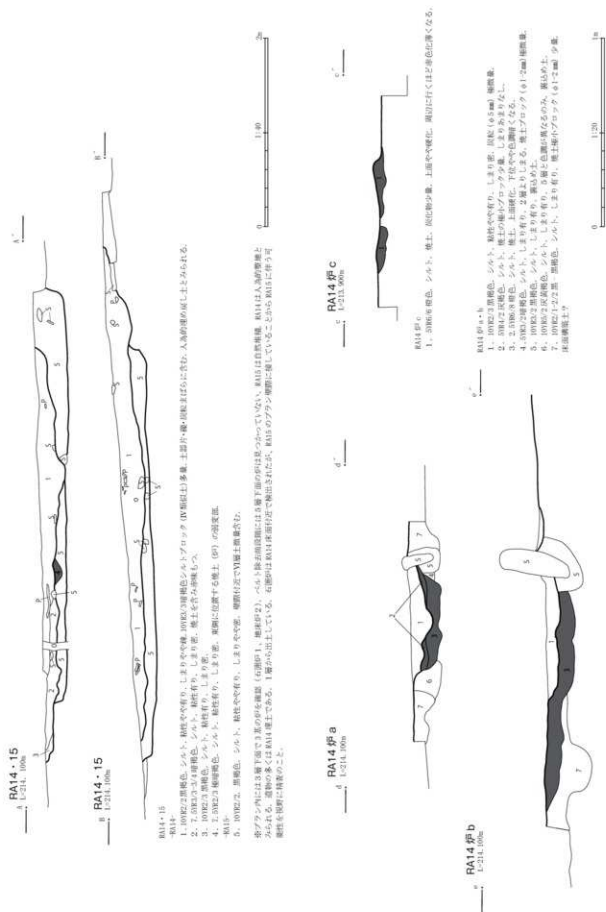
第47図 RA13構成礎個別断面



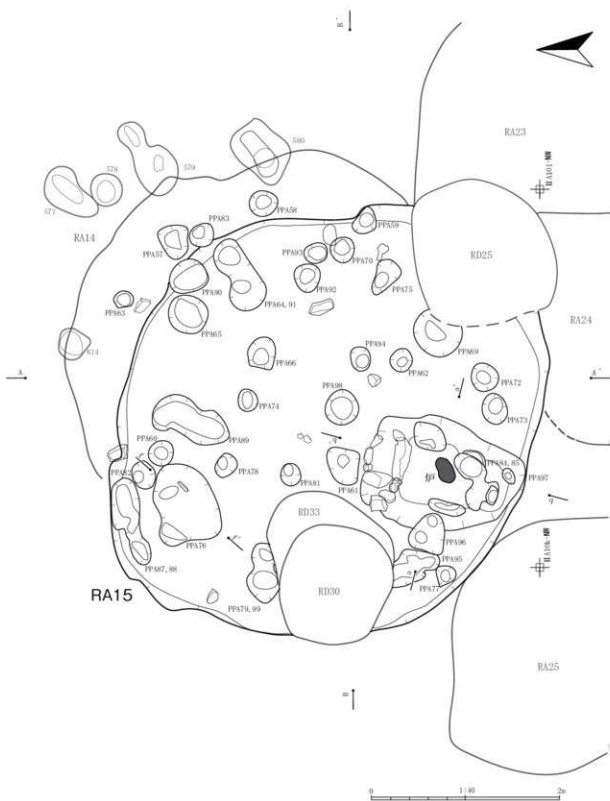
第48図 RA13構成塚名称



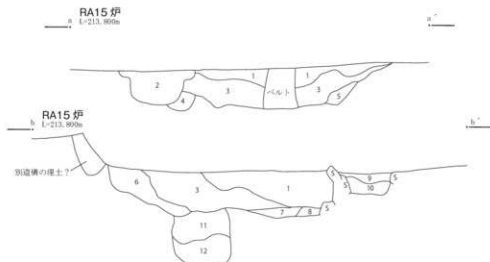
第49図 RA14



第50図 RA14・15共通断面、RA14炉断面



第51図 RA15



RA15 龍式切

- 101K2 黒褐色。シルト。粘性あり、しまり有り、Y P20%、炭化物約 3% (ともにφ1-3mm) 含む。
- 101K3 2 黒褐色。シルト。粘性有り、しまりやや弱、1層より密度が低くツツカ、Y PやV層ブロックを合わせて30%含むためやや黄色く見える。
- 101K3 3 黒褐色。シルト。2層よりしまり有り、V層ブロックを20%含んでおり1層より色調は暗い。
- 101R1 7/1 棕色。シルト。粘性やや弱、しまりやや弱、堆土粒 (φ1mm) 3%含む。
- 101R5 4/6/4 に近い黄褐色。に近い黄褐色。シルト。粘性やや弱、しまり有り、礫面崩落土と考えられ、やや粘土質。
- 101R4 2 褐色。シルト。しまりやや有り、Y P15% (φ1-2mm) 含む。
- 101R3 2 黒褐色。シルト。粘性やや有り、源和跡をほとんど含まない。
- 101R3 3 黒褐色。シルト。101W7 6 黄褐色土ブロック 80%含む、7層にブロックが含まれた層。
- 101R2 2 黒褐色。シルト。しまり有り、粘性有り、Y P20%、炭化物約 3% (ともにφ1-3mm) 含む。
- 101R3 3 黒褐色。シルト。堆土粒 (φ1-2mm) 10%含む若干強い。
- 101R3 2 黒褐色。シルト。粘性弱、しまりやや弱、黄褐色ブロック (φ1-5mm) 20%含む、3・5層よりしまり弱くツツカ。
- 101R4 3 に近い黄褐色。シルト。炭化物などは1層と同じだがよりしまりがなくなる。

- ※1～8層が前庭埋土、9・10層が石置埋土、11・12層が柱穴埋土。
3・5層の底面付近には8層の抜け残があるが、その部分の埋土の質は土位と変わらない。



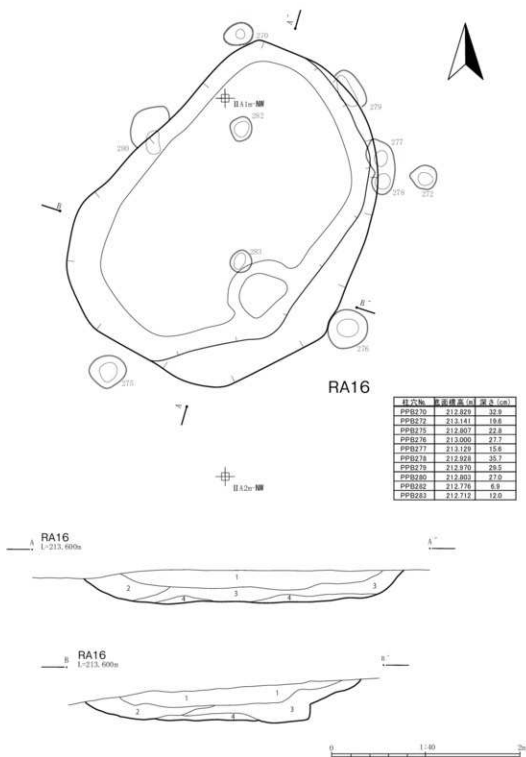
PPA76(RA15P120)

- 101R2 2 黒褐色。シルト。粘性中、しまり有り、φ3-5mm Y P 5%、φ5mm に近い黄褐色土 10%含む。
- 101R5 4 に近い黄褐色。シルト。しまりやや弱、礫面付近に黄褐色埋土ブロック含む、φ1-3mm Y P 3%含む。
- 101R5 4/6/3 に近い黄褐色。に近い黄褐色。シルト。しまり有り、1・2層と異なる泥人跡ほとんど無し。

0 1:20 1m

柱穴No.	掘削高さ(m)	深さ(cm)	柱穴No.	掘削高さ(m)	深さ(cm)
PPA57	213.682	12.2	PPA78	213.474	24.9
PPA58	213.589	28.9	PPA79	213.442	24.6
PPA59	213.581	34.1	PPA80	213.204	46.3
PPA60	213.478	26.2	PPA81	213.485	21.3
PPA61	213.457	24.4	PPA82	213.471	25.3
PPA62	213.486	23.4	PPA83	213.636	27.7
PPA63	213.630	24.6	PPA84	213.148	42.2
PPA64	213.150	67.6	PPA85	213.374	19.6
PPA65	213.492	29.3	PPA87	213.580	21.8
PPA66	213.609	13.4	PPA88	213.580	21.8
PPA67	213.132	56.3	PPA89	213.628	10.7
PPA68	213.346	30.7	PPA90	213.653	14.0
PPA69	212.092	63.9	PPA91	213.150	67.6
PPA70	213.600	17.9	PPA92	213.644	9.7
PPA71	213.324	40.8	PPA93	213.652	10.4
PPA72	213.370	15.2	PPA94	213.556	7.4
PPA73	213.529	21.0	PPA95	213.619	5.8
PPA74	213.626	10.0	PPA96	213.466	21.0
PPA75	213.581	17.3	PPA97	213.515	14.6
PPA76	213.010	70.3	PPA98	213.676	4.5
PPA77	213.466	24.0	PPA99	213.442	24.6

第52図 RA15伊・柱穴断面

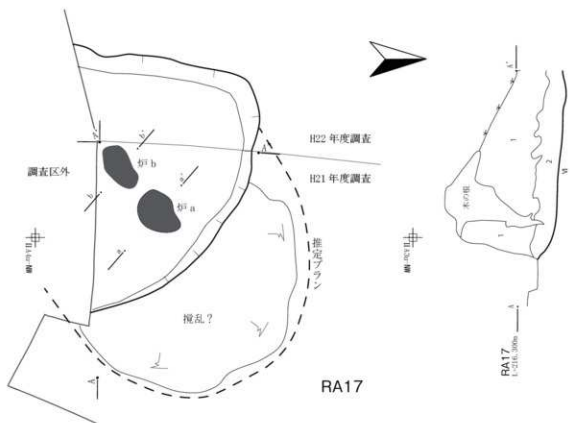


RA16

- 109W2/1 黒色、シルト、粘性やや有り。しまりやや密。奥の部Va層土相と、粘土ブロックむずかを含む。
- 109W2/2-2/3 黒褐色、シルト、粘性やや有り。しまり密。1層より明るくVa層に類似。
- 109W2/2-2/3 黒褐色、シルト、粘性やや有り。しまり密。VI層土ブロックやや多量（層間ほど多い）、炭片（φ10-20mm）種散見。
- 109W2/1 黒色、シルト、1層に良く似る。

※VI層面で検出。東・西壁が直線的で平行するように見える。長方形・楕円形が、壁の立ち上がりは東・西ではっきり、北・南はグラダツ。床面は平滑でしつかりしているが、目立った硬化部はなし（全体同じ感じ）。

第53図 RA16



RA17

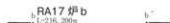
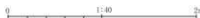
0. 複乱乱。

1. 103K/3-2/3 暗褐色・黒褐色、シルト、粘性やや有り、しまり密。可成スコリアを含みザラザラ。現代路面・路肩の上。

2. 103K/3-3/4 暗褐色、シルト、粘性やや有り、しまりやや密。VI層上全体に含まれる。炭粒極微量。先述スコリアは含まないためV a層トーンと見られる(Y-P片含む)。

3. 103K/6 褐色シルトブロック層。壁際の堆積土。

※2・3層はRA17埋土。

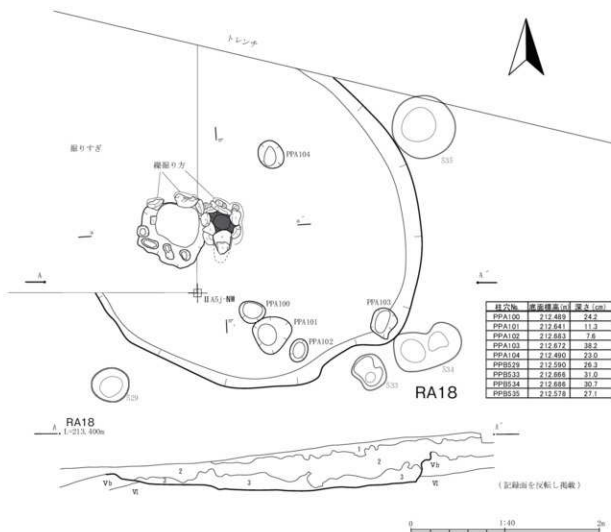


RA17 炉 a (a・b共通)

0. 複乱乱。

1. 103K/3-4/6 明赤褐色・赤褐色、シルト、微土、粘性やや有り、しまり密。

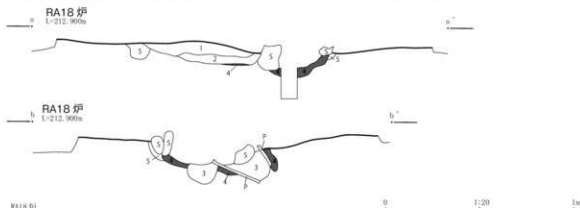
2 遺構



RA18

- 101K2/3 黒褐色。シルト、粘性やや有り。しまりやや有り。101K3/4 暗褐色。シルト、ブロック多く含む明るい（IV層土に似る）。焼土ブロック・炭少量。
3. 101K2/3 黒褐色。シルト、粘性やや有り。しまりやや有り。炭化腐敗線粒片含む。いぼの形Vを呈。
3. 101K2/3 黒褐色。シルト、粘性やや有り。しまりやや有り。V層土に炭層土少量含むやや明るい。φ5-10mmの炭粒目立つ（炭土層上）。

南東面は、ほぼ水平だが小起伏目立つ。傾化面が点在するが一律ではない。西側寄りに石壁と土器埋設面をもつがあり、おそらく儀式がたつ。埋設土器の土器が壊れて周囲に広がる石製の礫も残っており、ことから他の住居と同様意図的に壊されている可能性が高い。

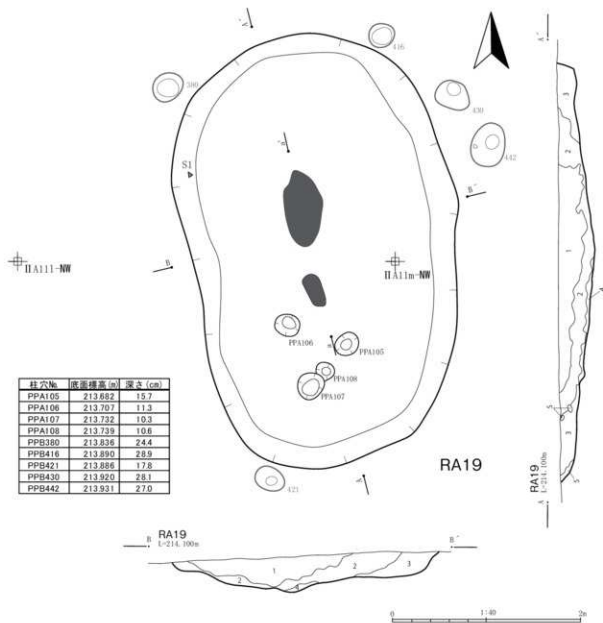


RA18 炉

1. 101K3/4 暗褐色。シルト、粘性やや有り。しまりやや有り。V層土含む明るい土。
2. 101K2/3 暗褐色。シルト、粘性やや有り。しまりやや有り。炭化腐敗線粒片を含む。炭土層表面を覆う層じり気のない黒土。
3. 101K2/3 黒褐色。シルト。2層に炭・焼土粒散見含む。
4. 炭層土。焼褐色。シルト。焼土。
5. 101K3/4 暗褐色。シルト、粘性やや有り。しまりやや有り。右崩り方。焼土。

炉土器は全体に二次焼熟で真っ赤に焼け、土器に接する周囲の土が焼土化している。

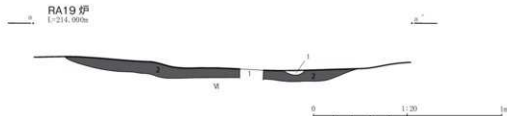
第55図 RA18



RA19

- 100K3/2 黒褐色。シルト。粘性やや有り、しまり有り。暗褐色土小ブロック、及び炭化物粒をわずかに含む。
- 100K3/3 暗褐色。シルト。粘性有り、しまり有り。炭化物粒、(φ5mm前後)をまばらに含む。
- 100K3/4 暗褐色。シルト。粘性やや有り、しまり有り、1・2層より黒味ぬける。オレンジパミを含む。
- 100K4/4 褐色。粘土質シルト。粘性やや有り、しまり有り。黒り過ぎか? 炭塵?
- 100K4/4 褐色。シルト。粘性やや有り、しまり有り。地山崩落土。(黒り過ぎ?)

※中央部に焼けの悪い地床あり。ベルト除去後残存土器土器口縁部出土。床面は中央部ほど深くなっており全体に起伏が大きい。

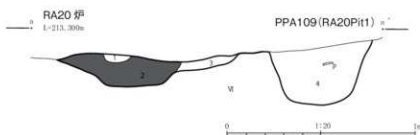
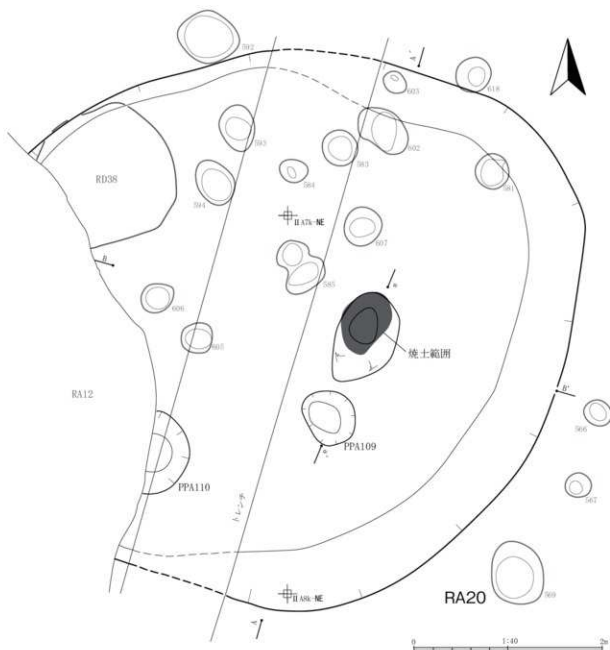


RA19 pit

1. 7.00K3/2 黒褐色。粘土質シルト。粘性有り、しまりなし。本埋積。
2. 7.00K3/4 暗褐色。粘土質シルト。粘性有り、しまりやや有り。くすんだ色調の地土で焼けはよくない。

※3層は、石器剥片を含むこの北側にはチップ出土。工房か。

第56図 RA19



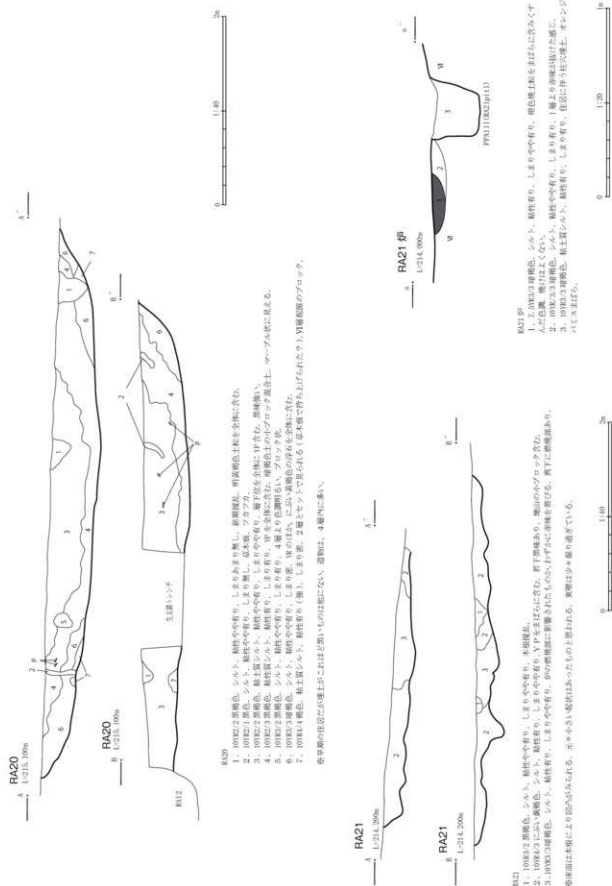
RA20 焼土層・PPA109 (RA20Pit1)

1. 10YR2.5 黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまり有り。YP わずかに含む。
2. 7.5YR3.4 緑褐色。シルト。粘性やや有り。しまり有り。焼付の部・焼成層地土。炭化物をまばらに含む。
3. 10YR3.7 緑褐色。粘土質シルト。粘性有り。しまりやや有り。YP わずかに含む。砂の周辺は一部崩れ込んでいるのが。
4. 10YR3.5 黒褐色。粘土質シルト。粘性有り。しまりやや有り。土器片（貝殻文画）含むことから住居に併うものとした。柱穴か土坑か。

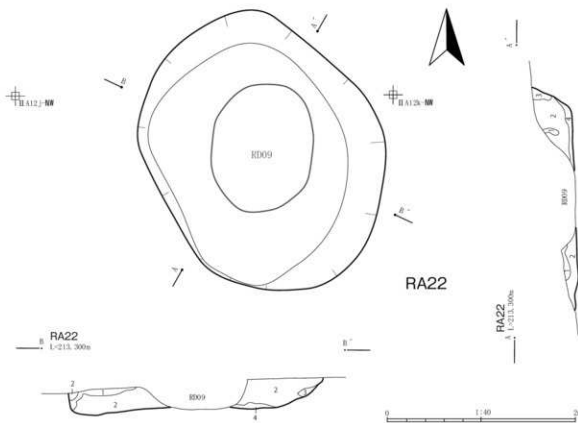
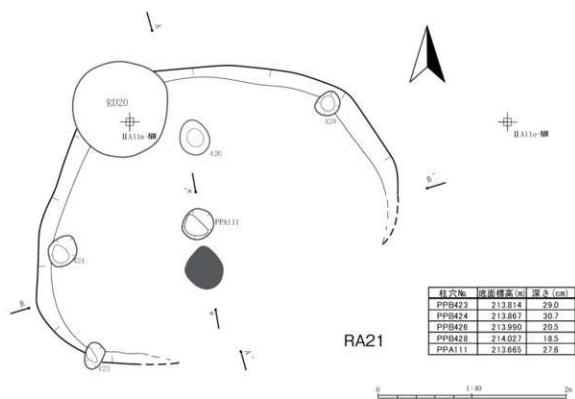
柱穴名	最深部高 (m)	深さ (cm)
PPA109	212.805	21.2
PPA110	213.870	15.3

柱穴名	最深部高 (m)	深さ (cm)
PP8566	213.400	14.4
PP8567	213.338	24.8
PP8569	213.448	19.8
PP8581	212.723	40.8
PP8582	212.908	14.8
PP8584	212.814	21.2
PP8585	212.805	22.9
PP8592	213.060	15.2
PP8593	212.933	26.0
PP8594	213.126	18.4
PP8602	212.937	63.5
PP8603	212.792	91.1
PP8605	212.738	20.7
PP8606	212.583	48.1
PP8607	212.842	32.5
PP8618	212.938	44.3

第57図 RA20

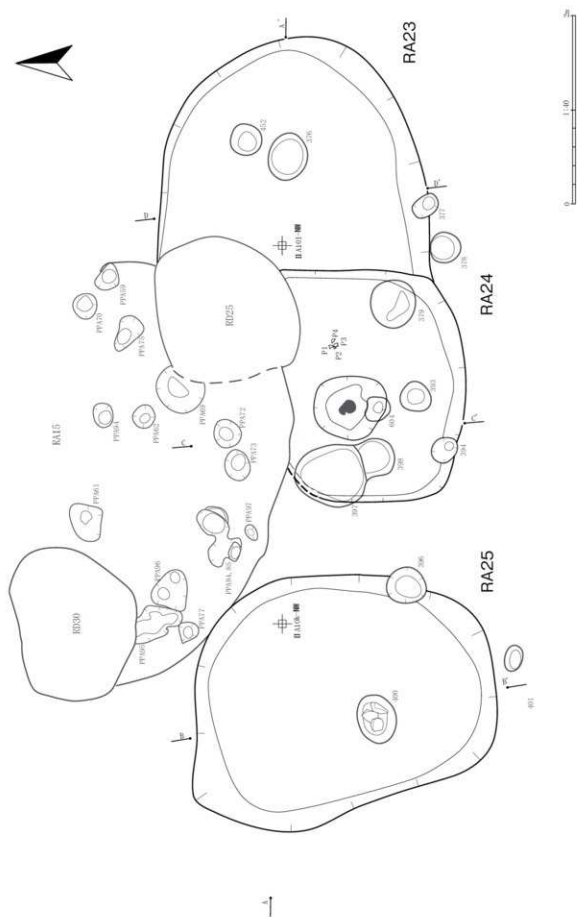


第58図 RA20・21断面

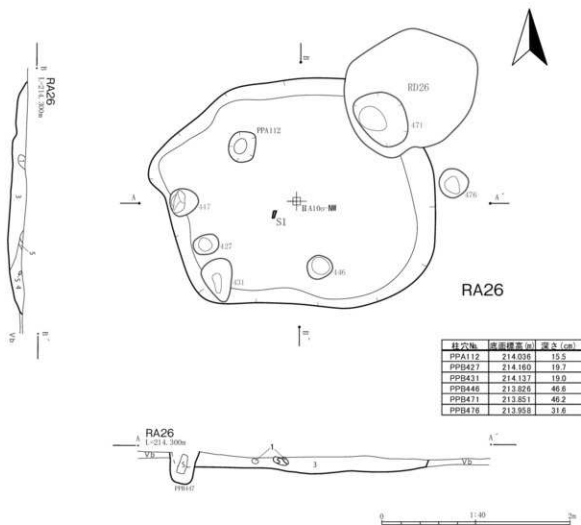


- RA22
1. 10YR3/3-10YR3/2暗褐色 黄褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや有り。褐色土を含む木炭屑などが、フカフカ。
 2. 7.5YR4/4褐色。シルト。粘性有り。しまりやや有り。明黄褐色土がフカクを含む。地山よりも深くに二つた感じ。
 3. 10YR4/4褐色。シルト。粘性有り。しまり有り。暗褐色土を含む。堆山崩落ブロック。
 4. 7.5YR4/4-4/6褐色。粘土質シルト。粘性有り。しまり有り。φ5mm大の非褐色土粒(?)を全体に含む。かたくしまる。

第59図 RA21・22



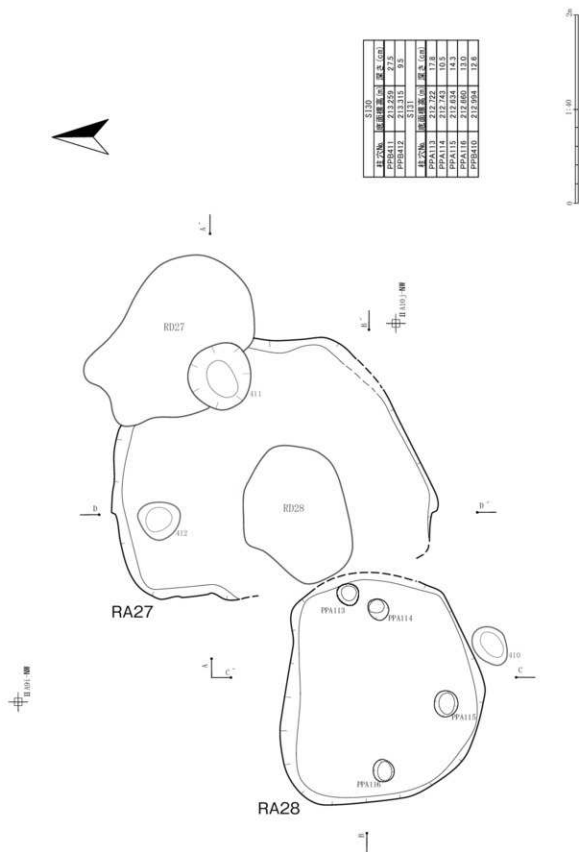
第60図 RA23～25平面



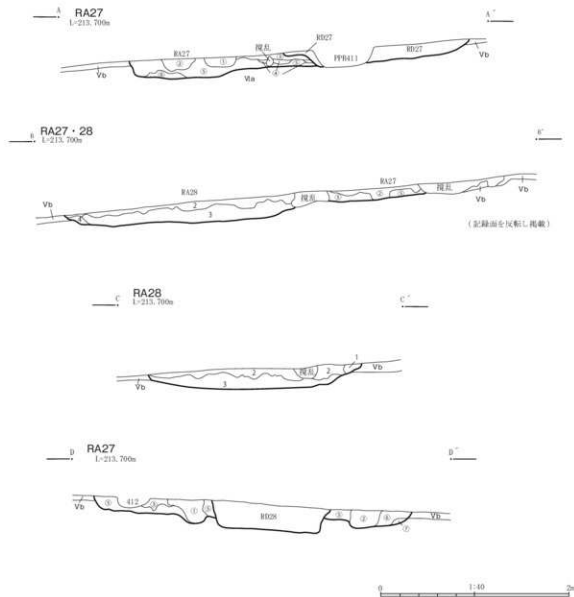
RA26

1. 10W3/2 黒褐色。シルト。粘性やや有り、しまり無し、本根無し。
2. 10W4/4 褐色。粘土質シルト。粘性有り、しまり無し、ロームブロック。
3. 10W4/4 褐色。シルト。粘性やや有り、しまりやや有り、Yリ層。合っけい浮石も含む。Vb層との区別不明瞭。
4. 7. 20W3/4 明褐色。シルト。粘性有り、しまりやや有り、3層より厚味あり、粘土ブロック含む。
5. 7. 20W4/4 褐色。シルト。粘性有り、しまり無し、塊けの良くない粘土ブロック。

※東壁の立ち上がり不明瞭。RD26に居られている。



第63図 RA27・28平面



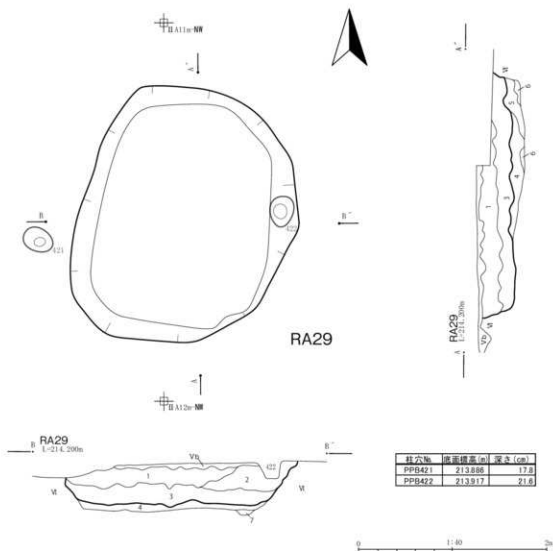
RA27

- ①. 10TK3/4 暗褐色。シルト、粘性無し、しまり種。黒褐色シルト塊 5%混入。
- ②. 7.5YK3/4 暗褐色。シルト、粘性無し、しまり種。黒褐色シルト塊 20%混入。
- ③. 7.5YK3/4 暗褐色。シルト、粘性無し、しまりや中種。黒色シルト小塊 3%、 $\phi 2-3$ mmの淡黄色軽石 3%混入。
- ④. 7.5YR4/4 褐色。シルト、粘性無し、しまりや中種。部分的に深い赤褐色土塊を含む。(西側に塊状で見られる)
- ⑤. 7.5YR4/4 褐色。シルト、粘性無し、しまりや中種。暗褐色シルト塊 30%、 $\phi 3-5$ mmの棕色軽石 1%混入。
- ⑥. 10YK5/6 黄褐色。シルト、粘性無し、しまり種。黒褐色シルト小塊 3%、暗褐色シルト塊 3%、 $\phi 3-5$ mmの棕色軽石 1%混入。非常にモゾモゾしている。
- ⑦. 7.5YR4/4 褐色。シルト、粘性無し、しまり種。炭化物 1%混入。南側の一部のみに見られる。
- ⑧. 10YR4/6 褐色。砂質シルト、粘性無し、しまりや中種。黄褐色シルト塊 30%、 $\phi 1-3$ mmの凝灰岩粒 1%、 $\phi 2-3$ mmの棕色軽石 1%混入。

RA28

1. 10TK3/4 暗褐色。シルト、粘性や中有り、しまりや中種。黒褐色シルト塊 10%、 $\phi 2-3$ mmの棕色軽石 1%混入。塊状で見られる。
2. 7.5YR4/4 褐色。シルト、粘性無し、しまりや中種。黒褐色シルト塊 30%、 $\phi 2-3$ mmの棕色軽石 2%混入。
3. 10YR4/6 褐色。シルト、粘性や中有り、しまり種。くずん石褐色シルト塊 3%、黄褐色砂質シルト塊 10%、凝灰岩小粒 2%混入。非常にやわらかく多くとしまりこむ。

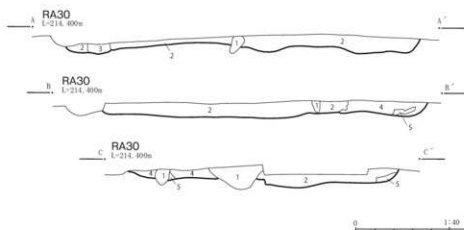
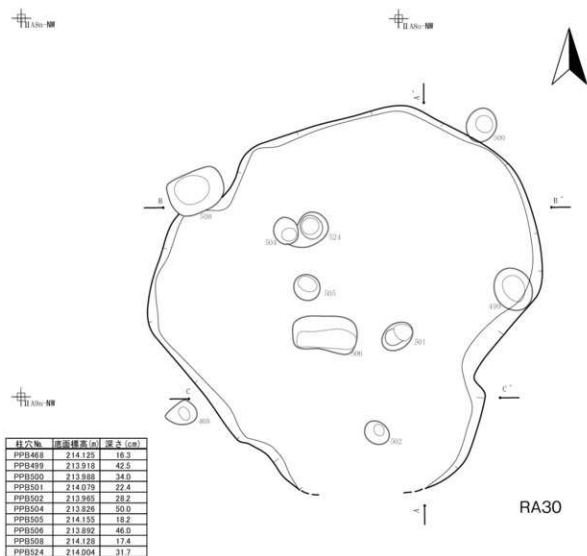
第64図 RA27・28断面



RA29

- 10R4.6 褐色 シルト、粘性やや有り、しまりやや密、球形色シルト小塊5%、 $\phi 2-5\text{mm}$ の褐色軽石2%、凝灰岩小粒1%混入。
- 10R5.6 黄褐色、砂質シルト、粘性無し、しまりやや密、褐色シルト塊5%、 $\phi 5-8\text{mm}$ の褐色軽石1%、 $\phi 3-5\text{mm}$ の淡黄色軽石1%、凝灰岩小粒1%、炭化物粒1%混入。
- 7.5R5.6 明褐色、粘土質シルト、粘性有り、しまりやや疎、 ϕ 約5mmの褐色軽石1%、 $\phi 1-2\text{mm}$ の非褐色スコリア1%、凝灰岩小粒2%混入。
- 7.5R4.6 褐色、粘土質シルト、粘性有り、しまり密、 $\phi 1-2\text{mm}$ の非褐色スコリア3%混入。(VI層に近い層で本層の上段5cm位の可能性がある)
- 7.5R5.6 明褐色、粘土質シルト、粘性有り、しまりやや密、 $\phi 1-2\text{mm}$ の非褐色スコリア3%混入、北端のみに見られる。(VI層と同様の層)
- 10R4.6 褐色 シルト、粘性やや無し、しまりやや疎、 $\phi 2-3\text{mm}$ の非褐色スコリア3%混入。(移積ベラで割るとシャリシャリしていてやわらかい)
- 10R4.6 褐色 シルト、粘性やや無し、しまり疎、 $\phi 2-3\text{mm}$ の非褐色スコリア3%混入。(移積ベラで割るとシャリシャリしていてやわらかい) (1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 860. 861. 862. 863. 864. 865. 866. 867. 868. 869. 870. 871. 872. 873. 874. 875. 876. 877. 878. 879. 880. 881. 882. 883. 884. 885. 886. 887. 888. 889. 890. 891. 892. 893. 894. 895. 896. 897. 898. 899. 900. 901. 902. 903. 904. 905. 906. 907. 908. 909. 910. 911. 912. 913. 914. 915. 916. 917. 918. 919. 920. 921. 922. 923. 924. 925. 926. 927. 928. 929. 930. 931. 932. 933. 934. 935. 936. 937. 938. 939. 940. 941. 942. 943. 944. 945. 946. 947. 948. 949. 950. 951. 952. 953. 954. 955. 956. 957. 958. 959. 960. 961. 962. 963. 964. 965. 966. 967. 968. 969. 970. 971. 972. 973. 974. 975. 976. 977. 978. 979. 980. 981. 982. 983. 984. 985. 986. 987. 988. 989. 990. 991. 992. 993. 994. 995. 996. 997. 998. 999. 1000.

第65図 RA29



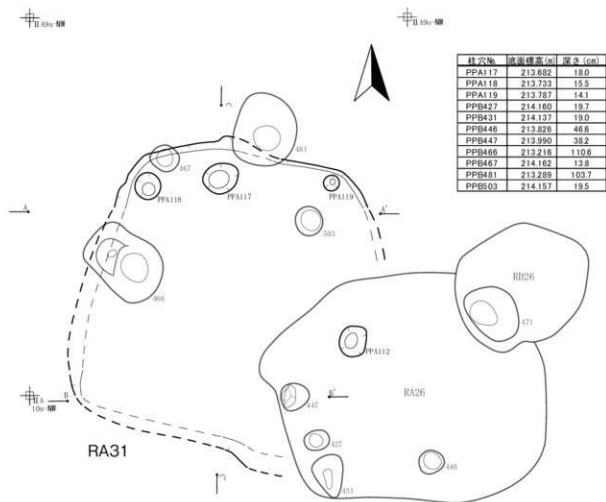
RA30

1. 10YR2/2 黒褐色。シルト、粘性やや有り。しまりあり無し。木根痕および履痕。
2. 10YR3/3 暗褐色。シルト、粘性やや有り。しまりやや有り。TP および黄褐色土小ブロックを全体に含む。
3. 10YR2/3 黒褐色。粘土質シルト、粘性有り。しまりやや有り。2層より上部域が強く硬くしまる。
4. 10YR3/4 暗褐色。粘土質シルト、粘性有り。しまりやや有り。TP 少量含む。
5. 10YR4/4 褐色。粘土質シルト。粘性やや有り。しまり有り。VI層底面と思われるブロック。

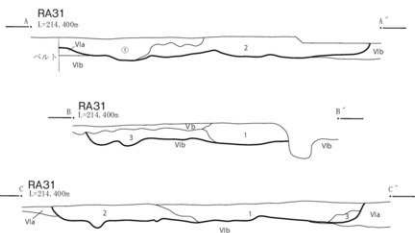
※RA30の壁はガラス状立ち上るが比較的明瞭。砂は少ない。床面はVI層 (TP 含む) 面である。遺物は少なめ。

第66図 RA30

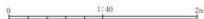
2 遺構



柱穴名	埋没深度(m)	直径(m)
PPA117	213.882	18.0
PPA118	213.733	15.5
PPA119	213.787	14.1
PPB427	214.160	19.7
PPB431	214.137	19.0
PPB446	213.826	46.6
PPB447	213.990	38.2
PPB466	213.216	110.6
PPB467	214.162	13.8
PPB481	213.289	103.7
PPB503	214.187	19.5

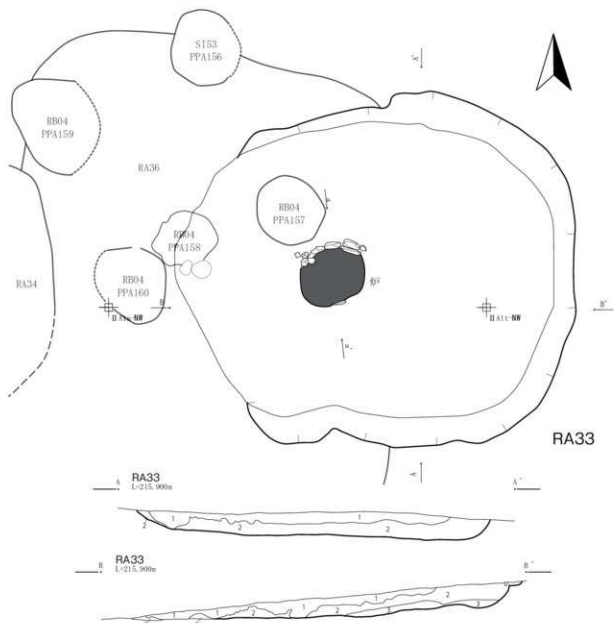


- RA31
- 7.50R/4 褐色 シルト、粘性無し、しまり様、埋褐色シルト塊 5%、YP2%混入、Cゾーンの中央部分ではしまり状態をおびている。
 - 7.50R/2 黒褐色 シルト、粘性無し、しまり様、褐色シルト塊 10%、YP2%混入、非常にモソクシしている。
 - 7.50R/4 褐色 シルト、粘性無し、しまり様、黄褐色シルト塊 10%、埋褐色シルト塊 3%、YP1%混入。
 - 10.0R/4 褐色 シルト、粘性無し、しまり様、黄褐色シルト塊 20%、埋褐色シルト塊 3%、YP5%混入。



第67図 RA31

2 遺構



RA33

1. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。暗色粒子含む。磁種相当。
2. 10YR2/3 黒褐色。シルト。粘性の明るい部分と濃い部分がやややや入り交じった層。IV層に似る。
3. 10YR2/3 黒褐色。シルト。VI層土を含む全体に明るい。磁種落ち土。

本住跡は北東区遺部において最層土の不整円形範囲として認識され、精密の観測で右図いをもつが検出されたことから、住居と認定した。計画上方に相当する東平面上でVI層が床面となり、比較的明確な立ち上がりが確認できたが、西平面上は床・壁とも不明瞭である。下段に黒色土の層積が認められることから、別の大形遺構の上段に後に構築されたものとみられる。想定されるプランからみれば、炉は西側側にあった位置にある。

0 1:40 2m



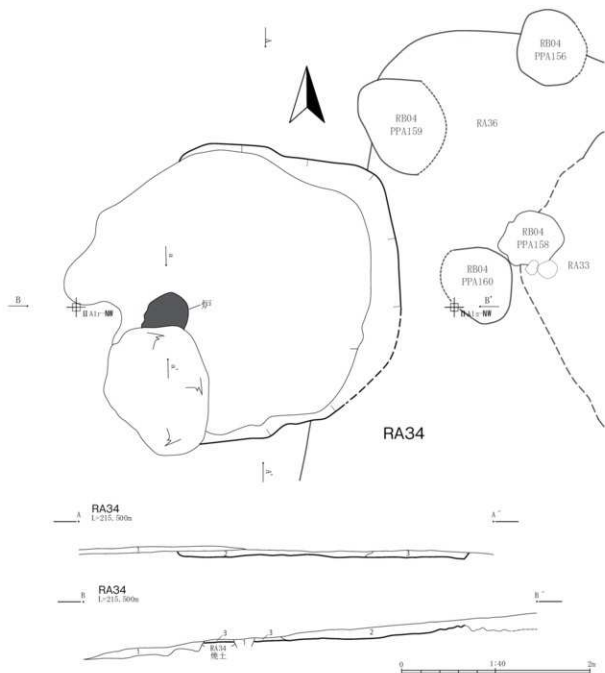
RA33 伊

0. 掘壊乱

- 1a. 10YR3/3 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。
- 1b. 7.5YR4/4-3/4 暗-暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。1aに黒土含む全体非均。
- 2a. 5YR5/5-6/5 暗赤褐色。シルト。粘性有。締まり密。焼物跡多量な土。焼土跡は認められない。
- 2b. 7.5YR3/3-4/4 暗-暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。焼の痕り方厚土。弱く焼熱しわずかに赤味。
3. 10YR2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。Va層土に似る。下段の別遺構様土か。

東平面上は掘壊方角、北辺と南辺の一部に磁が残存する右図が、北辺には二重(二列)に構築された部分も認められる。住居プランにおいては、やや西寄り位置する。床面に点在する焼熱土は本が磁に傾斜するから。

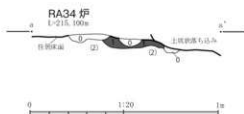
第69図 RA33



RA34

- 109K3/3-2/3 暗褐色・黒褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。IV層又はV_a層土に似るが、本遺構土を上方から覆及する土層。
- 109K3/2 赤褐色。シルト。粘性やや有。締まり密。I層に比して炭化物少ない。V_aに似る。本遺構の主体となる塚土。
- 109K3/4 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。VI層土ブロック含む全体明る。南及び東側面にみられる層。埋積塚土?

※本住居跡はRA34が礎土の抽出にともない、その周辺の色土分布範囲として抽出。断面上方側にある東部で一段階の残存を確認したが、跡じて残存状況は悪く全体形状は不明である。礎土門～南門形と想定。床面は北半部で良好に残り、ほぼ平坦に整っている。南半部及び西端部は上方からの根拠土等によって乱され、凹凸が目立つ。住居の想定プランからみると西に空いている。床面から被熱線2点抽出。☆は本来石囲いを伴うか。



RA34 伊

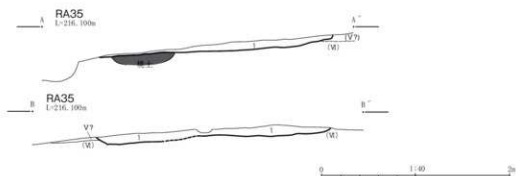
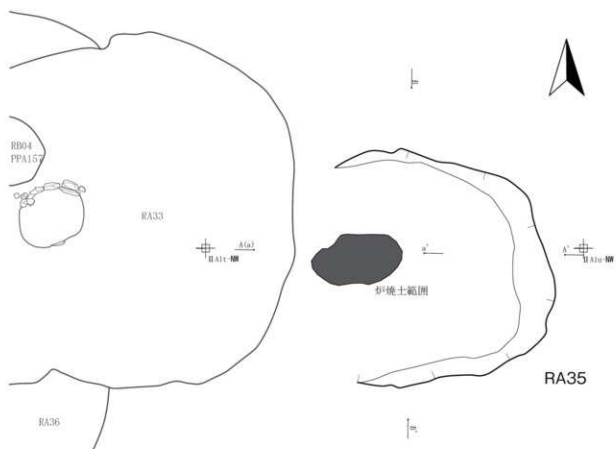
0. 根拠土。IV層土ベース。

1. 59K5年 明赤褐色。シルト。礎土。粘性やや有。締まり密。ガリガリの礫化面は見られない。
- (2). 109K3/4 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。I位の灰遺構埋土よりV層土にも似る。

※RA34 伊である。住居プランにおいては西側に位置する。全体に上方からの根拠土が顕著で、特に南側が大きく覆われている。周切に被熱線ある観点。本来石囲い?

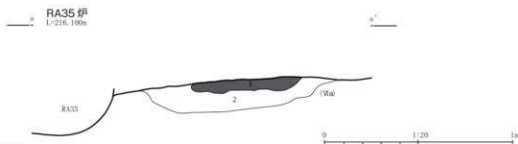
第70図 RA34

2 遺構



RA35

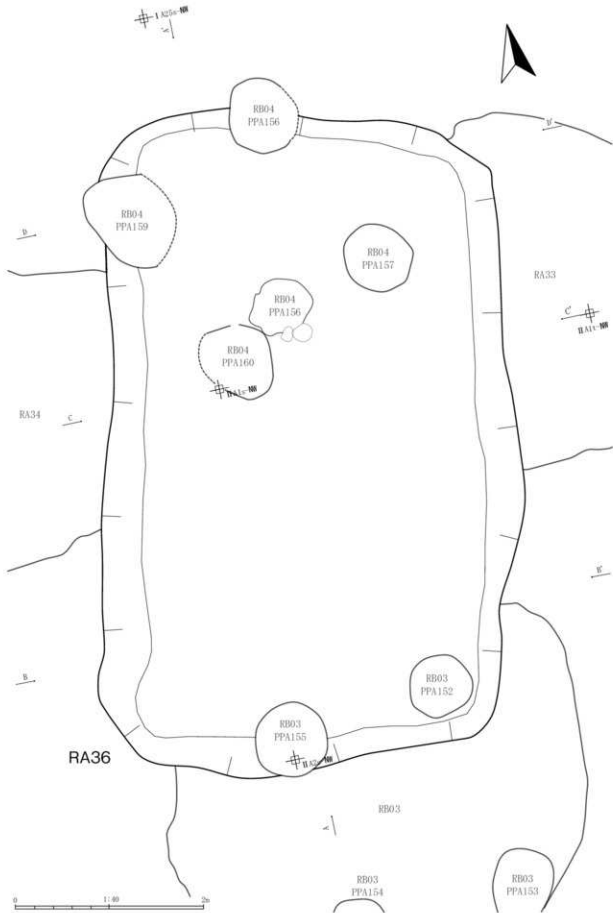
1. 10YR3/3 暗褐色。シルト、粘性やや有、締まりやや密、V1層土小ブロック散見。炭化物（径5mm）層状。
 資料庫下方側（西面）が破失。プランは不整形円形。Mは西壁よりM1?層間に被熱線直点。もとは石圍か?



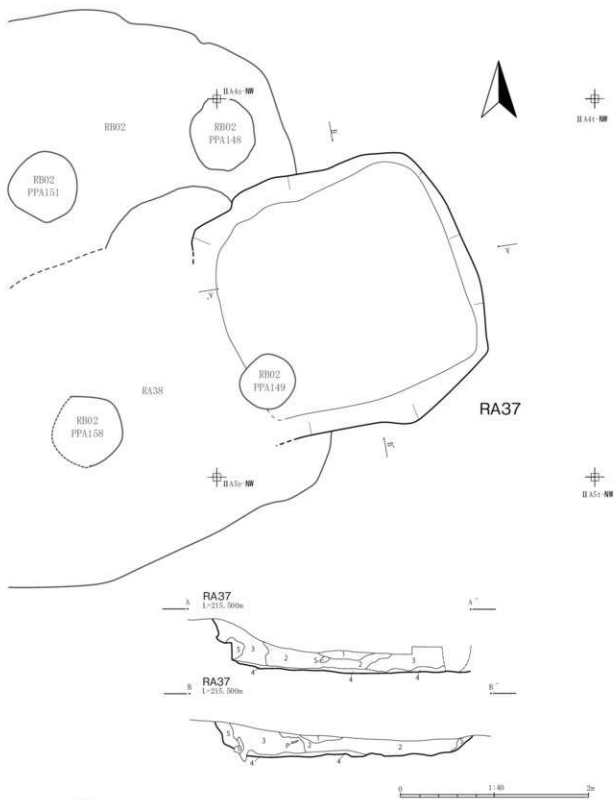
RA35伊

1. 5YR4/8 赤褐色。シルト、粘性無、締まりやや密、上面が部分的に褐色を呈す。被熱線。
 2. 10YR3/4-4/4 暗褐色。シルト、粘性無、締まりやや密。Vb層小ブロック10%混入。Vb層最厚か?被熱線の下部で東方の埋土のような土。

第71図 RA35



第72図 RA36平面



RA37

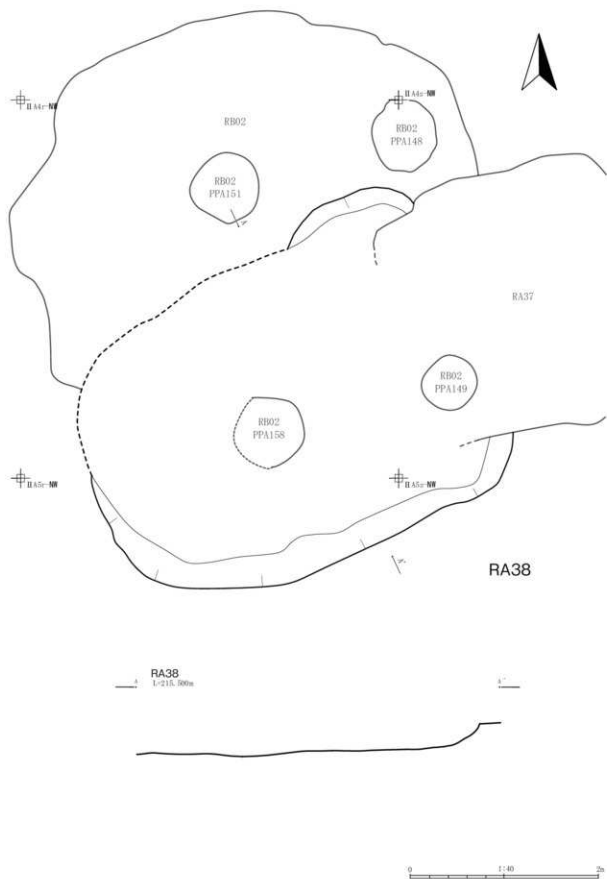
0. 遺構瓦.

1. 10YR2/2 黒褐色、シルト、黏性ややや、締まりやや密、黄鉄浮石 (Y P) 片少量、V a層に属する。礎土の中で最も厚い。
2. 10YR2/3 黒褐色、シルト、黏性やや密、締まりやや密、1 によく似るがやや明るい。
3. 10YR3/4-2/3 暗褐色、シルト、VI層土全体に含みやや黄味。
4. 10YR2/2 黒褐色、シルト、黏性やや密、締まり密、床面以上に分布する濃い黒色土層。
5. 10YR4/4-6 褐色、シルト、VIa~VI層の二次堆積 (崩落) 層。

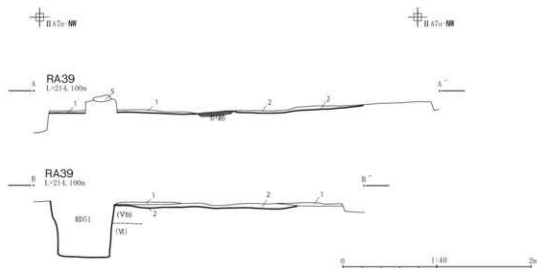
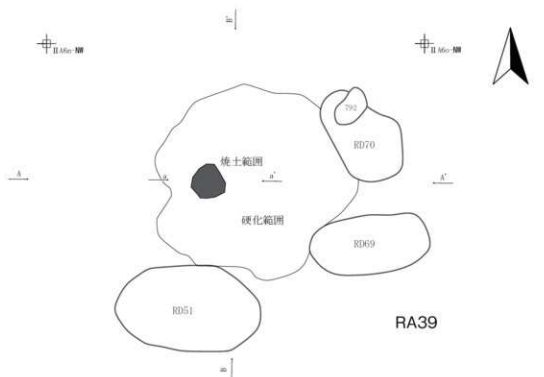
※VI層上面で検出、整った隅丸方形、現りの古い東壁はほぼ直線的に急激に立ち上がる。西壁は傾き時に壊れてしまった。

RB02 に切られ、RA37 はか早期住居を切る。床面は平坦に整いほぼ全面がガッチリと硬化。西壁側の3層から流れ込んだような状態で土器出土。

第74図 RA37



第75図 RA38



RA39

1. 10R2/2-2/3 黒褐色、シルト、粘性やや弱、締まりやや密、V_a 埋積層。
2. 10R2/3 黒褐色、シルト、粘性やや弱、締まりやや密、赤味あり1より明るい。

※Bとその他の範囲の硬化範囲を元に登録した住居。検出面はV_b層上面付近、V_a層埋積土にはほぼ床面付近まで削平されている。出土土器は早期、床面付近の埋土に散乱したツブが散見される。床面の一部は下位のR42の埋土が硬化したもので、早に均一かつ連続して傾斜する浅皿状を呈する。壁は残存しないため、本来の原形・形状は不明。



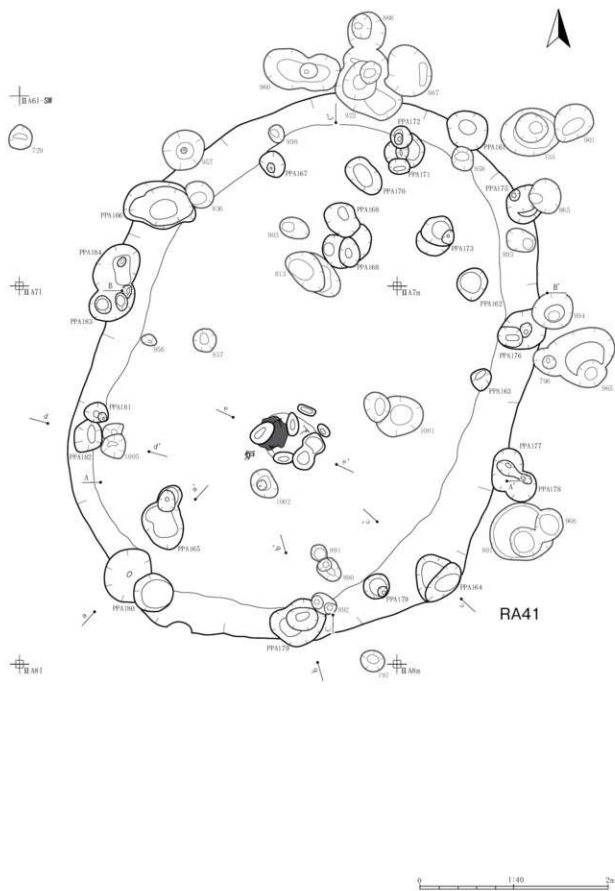
RA39 B1

1. 10R4/6 赤褐色、シルト、粘性無、締まりやや密。

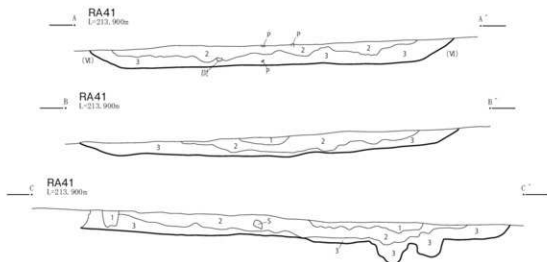
第76図 RA39



第77図 RA40平面



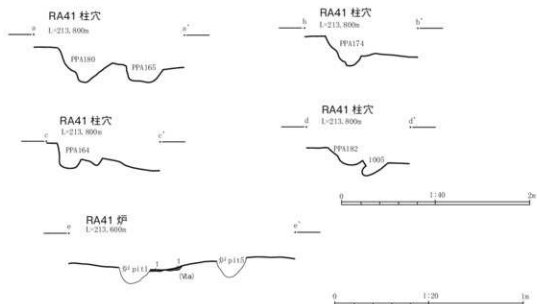
第79図 RA41平面



RA41

1. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。2より黒味強くIP（洗炭屑石）較少ない。
2. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。IP 微量。Va 層部似。
3. 10YR4/3-4 黄褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。床面皮土層。壁部に厚い。全体に臭味（壁に近いほど臭味強い）。Vb～VI層土に似る。

※Vb～VI層上面で検出。黒褐色土層（Va層似土）の横断面範圍として検出。その周囲に黄褐色～褐色土がにじむように広がっていた。結果的にこの範圍が1つの柱状となった。床面は早田で照壁。VI上部のIP含むガリガリの面が床面となる。壁は内周外縁。高壁近くの2層下面でへラ状石器出土。西半部2層下面に、径20cm前後の陶器片点。

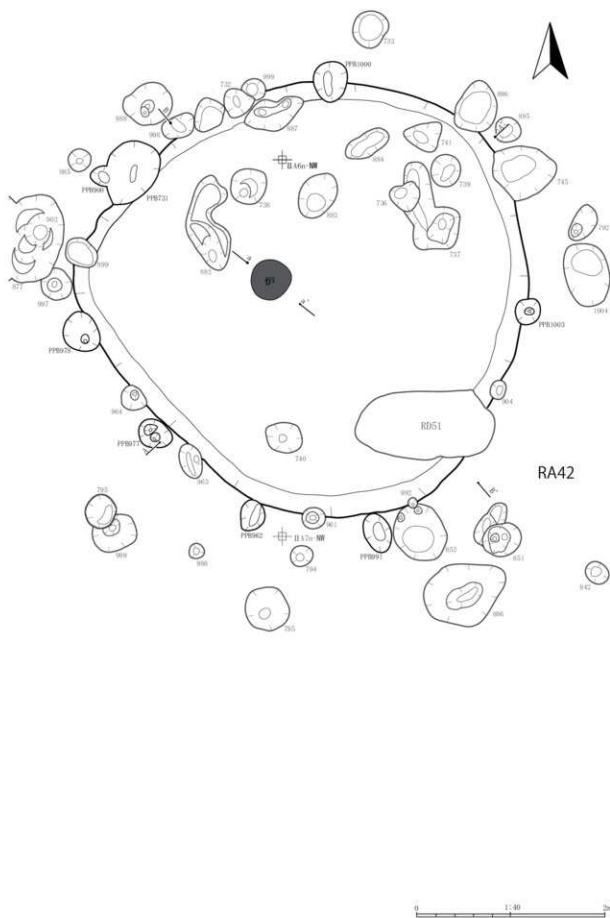


RA41 IP

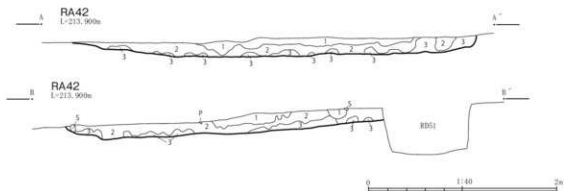
1. 5YR3/6 緑青褐色。シルト。粘性無。締まりやや密。VIa層が被熱（青灰）。
2. 10YR5/6 黄褐色。シルト。粘性無。締まり密。VIa層。

※機土の生成（残存）は点在的でごく薄い。上面は2層褐色シルトに覆われている。

第80図 RA41断面



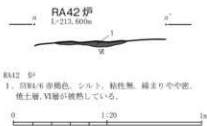
第81図 RA42平面



RA42

1. 10R2/2 黒褐色、シルト、粘性やや有、締まりやや密。
2. 10R3/3・4 暗褐色、シルト、粘性やや有、締まり密、炭化物粒(径2~5mm)極微量、Y層土含み黄色味。
3. 10R4/4・5/4 暗褐色、シルト、粘性やや有、締まり密、硬層~床面に分布、Y層の消滅流入土。

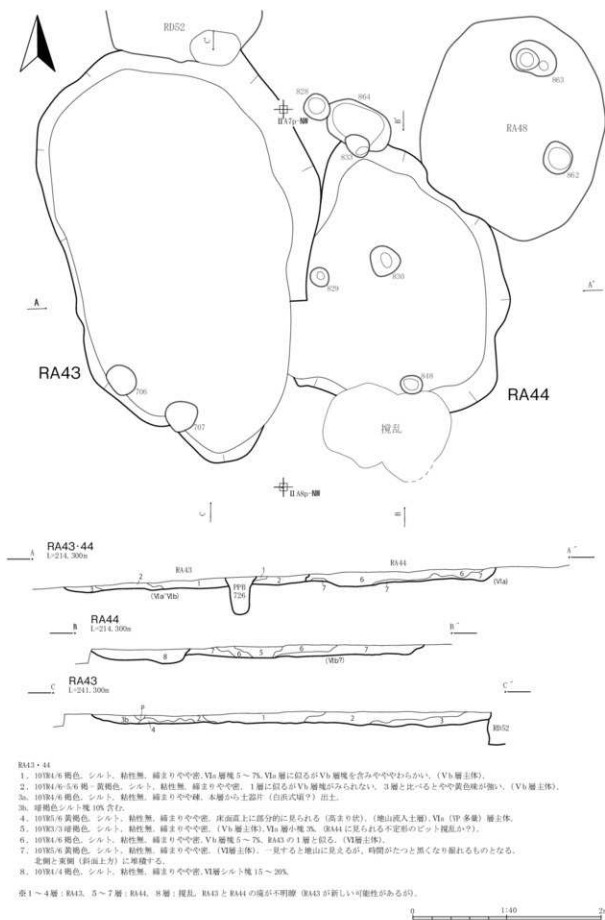
※ Yb ~ Y1層上面で検出、黒色土及びその周囲の暗褐色土の不整形範囲として検出。
浅籠形で底面中央に伊を持つ、付近に土器がまよって出土(完形ナ)。



RA42 伊

I-213.600m

1. 03R4/6 赤褐色、シルト、粘性無、締まりやや密、
焼土層、Y層が焼熟している。



第83図 RA43・44